の方に頭を取られてしまひます。

駒井に教へ込まれて、茂太郎の星を見る想像力がグット別なものになりました、彼はすでに古人によつて定められた星座の形に満足しないで、なほ〳〵様々のものを見るやうです星と星との距離と連絡をたどつて、古人が定めた以外の様々の現象を描いて見ることを覺えました。

さうして、科學的に教へられた星座の外に、自分の頭で、それ〴〵の星座を組み立て、それに命名をまで試みてゐるやうです、その命名も、たとへば、拍子木座と云ひ、團扇座といひ人形座といひ、大福帳と云ひ、兩國橋と云ひ――さうして、毎夜々々、その獨特の頭を以て、星座を眺めては、即興的に出鱈目の歌をうたふことは少しも改まりませんから、駒井が呆れてしまひました。折角この即興的の出鱈目を科學的に矯正してやらうとしてゐるあとから、教へられた知識を土臺にして、また空想の翼を伸ばすのだからやりきれません。

終には、たゞ、自分が天體を觀察してゐる時望遠鏡にさはることを恐れて、近くで足踏をすることだけを禁じて、出鱈目の歌には干渉をやめました。

今や、茂太郎は、星を一層深く見ることを覺え、さうして眺めた星の一つ一つを點畫として、自分としての空想を描き出すことで、毎夜の盡ることなき樂しみを覺えました。

つまり、今まで、禽獸蟲魚を友としてゐたと同じ心で日月星辰を友とする氣になつてしまひました、各々の星が、これで皆んな異つた色と光を持ち、異つた大きさと距離を以て、各々、個性的にかゞやきつゝ、それをながめてゐる自分を招いてゐることを見ると、嬉しくてたまりません、彼は星を見るのでなく、星と遊ぶ心です。

從つて、星の中の一つ、月といふものを見る見方も全く變りました。今までは月といふものは星の中の最も大きなものと見てゐたのが、今は、星の中の一番近いものだと見るやうになりました。

手をさし延べれば届くのが、あの月だ、星の中で、一ばん近いから一番大きく見えるので一番大きいから、それで星の王といふわけではない。

黒獸毒蛇でも、馴染めばなじめるのだから、日月星辰にも、近寄らうとすれば近寄れない

限りはないと想ひつゝあります、太陽はあの通り赫々たるものだから狎れるわけには行かないが、月はあの通り涼しいではないか、星はあの通りクル〳〵と舞つてゐるではないか、毎夜、毎夜、人間と遊びたがつて、大空にやさしく出て來るではないか。

茂太郎は、今は、天空を仰いで、星のまたゝきと、月のさやけさとをながめて戯れ遊ぶことだけでは我慢が出來なくなりました、手を取つて遊ばなければならぬ、星があの通り招いてゐるのだから、こつちも行つてやらないのは嘘だ！　と、こんな空想から、その星の中の最も近くして最も明るい、あの月に乗つて、それから星に遊ぶ——こんな空想のために、月が出ると矢も楯もたまらず月を目がけてまつしぐらに馳せ出すのを常とします。

二

茂太郎は、月に乗り得ないとは信じてゐない、斯うして、走りかゝれば、早晩、月に抱きつくことが出來ると信じきつてゐるが——いくら走つても、月の方へ走ると海になつてしまふ、海は深くして廣いことを知つてゐる。

月には至り得ることを信ずるけれども、海は越えられないといふことを知つてゐる。

さうして、月を目がけて一散に走つて、海に至るとはじめて茂太郎が呆然として自失してしまひます——今宵も亦、海に妨げられて月に至ることを得ずして濱邊を歸る清澄の茂太郎は

遼東九月蘆葉斷つ……
遼東の小兒、蘆管を採る
可憐、新管、清にして且悲なる事
一曲　風飜りて海頭に滿つ
海樹蕭索、天霜を降らす
管聲寥亮　月蒼々
白狼河北、秋恨に堪へ
玄兎城南、皆斷腸——

この詩を高らかに吟じはじめました。これは出鱈目でもなく、即興の反芻でもなく、岑參

の詩を、淡窓の調もて、正格に吟じ出でたものであります、さうして、この詩句と吟調とが、田山白雲によつて、茂太郎に敎へられてゐるといふよりは、白雲が興に乘じて吟じ出でたのを、茂太郎が、その音樂的天才の腦盤の中に早くも取り込んでしまつた、そのレコードが偶然、この處に於て、廻轉し出したと見ればよいのです、ですから、この詩と吟とには批點の打ちやうがありません。もし間違つてゐるとすれば、それはレコードの誤りで茂太郎には何の罪も無いことでした。

彼はこの唐詩を高らかに吟じつつ、海岸を走り戻りましたが、詩が盡きて、道は盡きず、次にうたふべきものが、未だ唇頭に上らざるが故に、その間沈默にして走ること、約二丁にして、忽ち、その病が潮の如くこみ上げて來ました。

皆さん——

元來、私は「エロイカ」

の名稱によつて

知られてゐる

ベートーベンの

第三シムフオニーが

大好きであります……

と海の方へ眞向きに向つて、半ばは獨語の如く半ばは演說の如く叫び出したのが尋常の聲ではありません。

無論、誰れも聞く人はない、また聞かせやうと思つて、呼びかけたものではないのです。

第八シムフオニーよりも

第五シムフオニーよりも

況んや非音樂的な

あの第九シムフオニーよりも

この第三と第七とが

最も好きであります

そこで、私は

幾度となく
この曲を聴いたり
或はその解剖を
してゐる間に
昔からエロイカに就て
論ぜられて來た
このシムフオニー特有の
神秘――換言すれば
謎に對して
人並に氣になり出して
來た次第であります……
出鱈目であるが、その聲が清み、おのづから調子がとゝのひ、それに海の波の至つて靜かな夕べでしたから、出鱈目の散文が、やはり詩のやうになつて聞こえました。出鱈目とはいへ、即興とは申せ、これはまた途方もない、併し、この少年は、いつか一度耳に觸れたことは、腦によつて消化されてもされなくつても、時に隨つて、必ず反芻的に流れ出して咽喉を傳はつて空氣に觸れしめねばやまない特有の天才を備へてゐるのですから何時何を云ひ出すかそれは全く豫測を許されないのですけれども、いかに天才と雖も無から有を歌ひ出すことは出來ますまい。

三

清澄の茂太郎は斯うして龍燈松の側まで來た時突如として脫兎の如く走り出しました。
いつもならば、馴染みの龍燈の松に腰打ちかけて、即興詩の一つもあるべき處を、今宵はその松の木の前を脫兎の如く、全速力で、眼をつぶつて走り去るのは、何か怖ろしいものを感じたからでせう、怖ろしいものと云つても、この子は、すでに世間並が怖れる處の猛獸毒蛇をさへ怖れないし、日月星辰をも友達扱ひにしやうとするほどのイカモノですから特にそんなに怖れる者は無い筈だが――さては、いつぞやお杉の女ッ兒をおびやかした海

龍でも本當に出現したのかな。

ところが、その海龍はこの子には恐怖の對象ではなくして、風説の製造元であつたのだから、海龍も亦親類であるべき筈。

では、何を怖れたか、つまり、この子の怖れるものは人間の外にはないのです、人間につかまへられて人氣物に供される以上の恐怖はこの子には無い。

甲州の上野原でも、こんなやうに無邪氣になつてゐる處を不意にがんりきの百藏なるならず者に捕つて、いや應なしに江戸へ拉し去られてしまつたではないか、幸ひ、江戸に於て田山白雲を見出して、その脊に負はれてこの房州へ連れられて來たが、怖れるところのものは、右樣の人間の外には、この少年の前にはありません。

多分、そんなやうな、迂散な者を、たつた今眼前に於て、感得したればこそ、彼は斯くも一目散に走り過ぎたものと思はれる。

さうして、夢中にものゝ二町ほども走つたが、幸に、何物も後を追ひ來る氣色がありませんから、そこで、安全圏内に入つたつもりで、歩調をゆるめてしまひました、こゝへ來ると行手に遠見の番所の火影がボンヤリと見えてゐる、萬一の場合、大きな聲を出しさへすれば、誰れか番所から駈けつけてくれる、それでも間に合はない時は殿樣のお部屋に鐵砲がある——そんなやうな安心で、茂太郎はまた歌の人となりました。

チーカロンドン、ツアン
パツカロンドン、ツアン

とロ拍子を歩調に合はせて

姐在房中（ツウザイワンチョン）
繡吓繡花鞋吓（シウリアンシウファヤイヤア）
忽聽門外（フラチンメンワイ）
算命先生（サンミンスヘンスエン）
叫了一聲（キヤウリヤウイシン）
叫了一聲（キヤウリヤウイシン）

と勢よく唱へ出して

トデヤウ、パンテン
スヘンスエン
ニィツインゾォヤア
ヌネン、バズウ
ゴテ、スヘンスエン
ニイ、ツエテンジヤ
ニイ、ツエテンジヤ

茂太郎としては出鱈目ですけれども、これは立派に支那の端唄になつてゐました。

こんな出鱈目な器量一ぱいに歌ひつゞけた時に、茂太郎は行手の右の方の、こんもりと小高い丘の上に眞黑に盛上がつた森の中からボーッと火の手の上がるのを見ました。

それは、狼煙(のろし)のやうに——風が無いものですから、思ふさま高く伸びきつて、のん〳〵と紅い色を天に向つて流し出したのです。

「あれ、天神山(てんじんやま)で火が燃えた」

時ならぬ火である、一時は火事かと思つたが、火事ではない、お祭禮(さいれい)でもない筈なのに、誰が何の必要あつて、あんなに火を燃やし出した？

茂太郎は、思ひがけなく火の燃え出したのを、非常事として見るよりは、その火の色が特別に赤い色をしてゐることに、美しさを感じて一時は、見とれたやうに立ち盡しました、火は、いよ〳〵盛んになつて、やがてパチ〳〵と竹のハネル音まで聞こえ出した時、茂太郎の唇の色が變つて

「あ、さうだ、マドロス君が燒き殺されてるんだぜ、あの火は……」

四

そこで、茂太郎は、聲も身體も震え上がつてしまひました。

「マドロスが、燒かれてゐるのかも知れない、たしかにさうだ、そんなやうな氣がしてならない、さうだとすれば大變だ！」ほとんど爲さん術(すべ)を知らない程に動顛(どうてん)したらしい。

そこで、すつかり、空想も幻想も打ちこはされて失神に近いほどの戰慄と恐怖を如何とも

することが出來ないらしい。

といふのは、今、あのマドロスが、村民の無頼漢の手に捕はれてゐる、さうして天神山へ連れて行かれて、今日明日のうちに燒き殺してしまうが、どうだいといふ、かけ合ひがあつたとか無かつたとか聞いてゐたが、それが本當であつたか。

昨今、駒井の殿樣を中心とする、この海邊の世界では、造船は著々と進行する、動力の研究までが目鼻がついて來る、働らく人は皆殿樣に心服してゐる、やがて船が完成すれば、それに乘つて行くべき人の人選も漸く定まりつゝある時に、その周圍から、漸く壓迫が出て來た事の形勢が、薄々この茂太郎にも判つてゐるのでした。最初は、充分の好意と、好奇とを持つて、駒井の新事業に便宜を計つてくれた附近の人が、この頃になつて、險しい見方をするやうになつたのは、たしかに黒幕があるのだ、と駒井の殿樣も云つた、それをお孃さんが、またよく註釋して云つて聞かせた。

「茂ちやん、もう、晝間でも、浮つかり外へ出るのをおよしよ、あぶないから、この近所の人は、漁師やお百姓さんで、何も知らないけれど、うしろに黒幕があつて、殿樣の仕事

を邪魔をしてやらうといふ空氣が濃くなつて來ましたから、どうも今までのやうに安心しちやゐられないのよ、黒幕が、ばくち打ちを使つたり、ならず者をけしかけたりして、殿樣の仕事を妨害するんですからね」

「黒幕といふのは何です、お孃さん」

「それは土地の代官だとか、神主、坊さん、儒者といつたやうな人達だらうと思ふんです」

「それがナゼ妨害するんだらう」

「つまり、この殿樣のなさることが、わからないんですね、どうも、あれは、毛唐の廻し者で、毛唐が黒船で日本を攻めて來る時に、こつちから裏切をするために、あゝして軍艦や大砲をこしらへてゐるんだ……なんてけしかけてゐるんですとさ」

「黒幕がかエ」

「えゝ、そこへ持つて來て、あのマドロスの奴が、だらしが無いんでせう、言葉がわからないし、あの面構えで、雞を盜んだり何かするもんだから、あれは切支丹の魔法使ひの毛唐だと云つてるんですとさ」

「マドロス君もよくない！」

「良くはないけれども、そんな根強い惡人でも何でもないのよ、他愛ない男なのよ、それを憎んで、彼奴を取捕かまへて燒き殺してやれ、メリケンの國では、黑人を取捕かまへると燒き殺してしまうんだから、日本でも毛唐を取捕まへて燒き殺したつてかまはねえ……なんて、この頃中からマドロスを土地のバクチ打やならず者が狙つてゐたんですとさ」

こんな話を、茂太郎は兵部の娘から聞かされたのは、こゝへ飛び出して來る少し前のことでした、マドロスがこの娘に對して暴行を働き、行方不明になつてゐたこと、それが一旦捕まつて、村民の爲に又さらはれて行つたこと、それはもう少し以前のことでしたが、良太郎も、マドロスにはもう多少の憎惡をさへ感じてゐたのだから、あんまり心配もしてやらないでゐたのに、こゝへ來て天神山の火を見ると、紅色をした鮮かな火焰の色と、スッテン童子の髮の毛とを思ひ出しました。

マドロス君も、いけないにはいけないが、燒き殺すといふのはヒドい、燒き殺されるのは全く可哀相だ……。

五

お孃さんに對して働いた暴行は、憎いには憎いが、さうかと云つて燒き殺さねばならぬ程に憎いとは思へない。

現に、再三、その暴行を蒙つたお孃樣自身すらが、それを許してゐるではないか。

駒井の殿樣があゝして、物置へマドロス君を拋り込んで置いたのは、燒き殺しておしまひなさるつもりではない、再三のことで餘りといへば許して置けないから、當座の懲しめの爲に相違ないのを、大勢がやつて來て、擔ぎ出し、それを天神山で燒き殺すといふことになつてゐる。

村民達に、そんな刑罰を行ふ權利が與へられてゐるのか、タカが、マドロス君が飢えに迫つて、お櫃をかつぱらつたとか、雞を盜んだとかいふ程度が、村民の蒙つてゐたすべての被害ではないか、それに向つて私刑を加へる——十や十五の叩き流しならまだしも、燒き殺してしまうといふのは、それはあんまり酷いや——。

いや〳〵、マドロス君を村民が燒き殺してしまはうといふ理由は外にある、それは、マドロス君が毛唐であるからだ。

毛唐といふものは、つまり日本の國を取りに來るものだ、それだから、當代、二本差してゐる憂國の志士は皆毛唐を斬りたがる、毛唐を一人でも斬れば斬る程幅が利く、まして毛唐に向つて戰をしかければしかけるほど、その大名の威勢があがる。

相州の生麥といふ處で、薩摩の侍が毛唐を斬つて、それから、薩州樣と毛唐とが戰爭をした、長州でも負けない氣になつて、下の關で毛唐と戰をした、これ等の大名連は毛唐と戰をするだけの勇氣があるが、將軍樣にはそれが無い——と云つて、多くの人達が齒噛みをしてゐる。

だから、毛唐は殺すべきものだ、毛唐を殺せば殺す程、侍としては勇者であり、國としては名譽である、そこで、この浦邊の漁民達までが、その氣になつてゐるのか。それでも、あたしには、それがわからないのですね。

あたしがつき合つてゐるマドロス君は、眼の色こそ變つてゐる、言葉こそ違つてゐるが、

やつぱり日本人と同じことの人情を備へてゐる、人情の長所も備へてゐるし短所も備へてゐる、この人は、あんまりエライ人ではない、ドコの國にもある、あたり前の勞働者だ、酒を呑みたがるのも無理はないし、飲めばむやみに女が好きになる處なんぞも、毛唐だから特別といふ廉はない、日本人だつて大抵そんなものではないか。

毛唐は日本の國を取りに來た者だとは云ふけれど、マドロス君一人では日本の國が取れやしない、よし取つて見たつて一人ぢや背負ひ切れまい。

毛唐だからとて憎まねばならぬといふ理窟はどうも茂太郎にはわからない。

それならば、毛唐のうちのメリケン人は、黑人と見れば取捕まへて燒き殺すから、おれ達もメリケンを取捕まへて燒くのだといふのも理窟にはならない。

一體、人間同志といふものは、そんなに憎み合はないでもいゝぢやないの、そんなにお互にこはがらないでもいゝぢやないか、人間はどうも物を怖がり過ぎていけない、獸や蟲なんぞでも、こちらが害心さへ無ければ、向ふも大抵お友達氣取で來るものを、人間が彼等を怖れ過ぎるから、彼等もまた人間を怖れ過ぎる。

本來、この邊の浦人なんぞは、そんな慘酷なことをする人間ではなく、最初から、我々には好意を持つてゐて呉れたものが、急にこんなになつたのは、お嬢さんの云ふ通り、黒幕といふ奴がさせるのだらう。

黒幕が悪いのだ。

と、茂太郎は漸く黒幕へ持つて行つて、責任の歸する處を求めようとしました。

そんなら黒幕を外してしまひさへすればいゝぢやないか。

六

黒幕を外してしまへ。

それは田山先生がいゝだらう、田山先生は強いから、きつとその幕を外せるだらう、黒幕といふのは一體何處にどう張つてあるか知れないが、探がせばわかるに違ひない。

それはそれとして、今眼前、燒き殺されやうとするマドロス君が可哀相だ——。

茂太郎は、今になつて、全くマドロス君に同情してしまひました。立ち上る紅の炎に無限の

恨みを寄せてゐます。

その時に、左の一方は海ですから、絶えずザブリ〳〵と、寄せては返す仇波が、月の色を碎いて、お定まりの金波銀波を漂はせつゝ、極めて長閑に打たせてゐたのですが、陸なる紅の炎を見ることに、心の全部を吸ひ取られた茂太郎は、今し、全く閑却してゐたその海の方を、遽く向き直りました。

それは波の俊敏な五官の一つに響いて來たものゝ音、やゝ遠く近く、櫓拍子の音がこの海から聞え出したからです。

そこで、くるりと海の方へと向き直つた茂太郎は、直ちに、程遠くもあらぬ處に一艘の小舟が櫓を押して通り過ぐるのを認めました。どうも、今時、この海を、岸づたひとは云ひながら、あの小舟で乘りきることに、少々の意外さを感じながら、きつと暗を通して見たのは、その舟の中です。

茂太郎の眼は、たしかに異常です、異常なのは眼だけではありませんが、その眼は特別によく働く機能を授けられてゐる、それにこの頃は、天文を見ること、星を數へることに毎

夜の如く慣らされてゐるから、その感覺が一層精練されて來てゐるやうです、それですから、暗夜でも物を見るのは、さして苦としないのを、今夜は形の如き月夜ですから、眼の前を通る舟の中を見定めてしまふことは何でもありません。

「あ！」

さうして、此處でもまた、あつ！　と驚かねばならないものを發見しました。

今、現に、櫓を押してゐるその人は……それこそ自分が現に極度の同情を寄せてゐたマドロス君その人ではないか。

さうしてまた一方、艫の方に、もう一人ゐる、それとても別人ではない、昨今、遠方から此處へお客に來てゐる七兵衛といふおぢさんではないか。

さしもの茂太郎が、そこで途方に暮れてしまひました。

あの天神山で燒き殺されてゐるマドロス君があるならば、今、こゝを小舟で通り過ぎてゐるマドロス君がマドロス君で有り得る筈が無い！

どうしたのだらう？

そこで思ひ亂れた茂太郎は、前後の思慮もなく大聲を揚げてしまひました。

「マドロスさあーん」

船の櫓拍子は相變らず聞えるけれども返事はありません。

では、あの過ぎ行く舟の中の人はマドロスさんではないのか――いや、たしかに、あれがマドロス君でなければ、他にマドロス君があらう筈はない、もしかして自分の眼に誤りがあつたのかと、ちよつと眼を外らして天の方を見ると、いつも見るカシオペヤもオリオンも月光に薄れながらはつきりと見える、海の波も、陸の色も變りはない、ひとり、この眼でマドロス君だけを見誤る筈がない、そこで、茂太郎は二度大きな聲で呼んで見ました。

「そこへ行くのはマドロスさんぢやないかエ、マドロスさん！」

けれども、一向手答へがなく、船はそのまゝグン〳〵と力限りに漕がれて行つてしまふ、併し、漕がれて行く先は遠く外洋へ出でようといふのではない、近く岸に沿ふて、さうして、遠見の番所、造船所の下の方へと、筋を引いて行つてしまふのです。

七

啞然として、岩角に隱れた舟を見送つてゐた茂太郎が、またも思ひ返して天神森の方を見ると、さき程の火は大分に薄れて行きましたが、この時、丁度、蜘蛛の子を散らしたやうに、柿の實をバラ蒔いたやうに、その眞黑な天神森から、點々として、多くの火影が飛び出したのを認めました。

提灯か、松明か知らないが、各々小さな火の子を手にして、多くの人數が、崩れ出したことは確かです。

さうして見てゐるうちに、右の火の子が、四方へ散り亂れたけれども、やがてそれがほゞ一つになつて、長蛇のやうな形で、こちらへ向いて來ることも慥かです。

茂太郎は、今それを怖れ出しました、兎に角一目散に、番所まで逃げ込むことが急務だと考へたものですから、また息せき切つて砂の海岸を眞一文字に遠見の番所まで走せ戻つたものです。

番所まで一目散に走りつくと共に茂太郎は、まづこのことを誰に向つて語らうかと案じわづらひました。

駒井の殿樣に申上げるのが本當だらうけれども、殿樣はまだ、マドロス君を許して居られないのだ、田山先生はゐない、金椎君は話したつて無益、どつち道、お孃樣に話して見てからの上……そのお孃樣といふ人は、今眠つてゐるに違ひないから、それを起すのも氣の毒だ。

そこで、茂太郎はまづ、小使部屋へ飛び込んだ見ると、そこの爐邊に思ひがけない人が一人ゐるのを認めました。

キャンドルを入れた行燈が明るく、爐中の火も賑やかに燃え、大鐵瓶の湯もチン〳〵と沸いて、いづれも氣持よく室中の氣分が熟してゐる中に、爐を前にして、お膳を置き、傾けつくしたと見える德利を一本飾りこみ、悠然としてお茶漬を掻きこんでゐる處の一人を發見したものですから、茂太郎が、

「おや、おぢさん、いつ歸つたの？」

「はい、もうちつと先きに歸りましたよ」
「さう……」
茂太郎は何とも解せない面で、この悠々とお茶漬を掻き込んでゐる中老人の面を、しげしげと見やりました。
それは、この頃、こゝへお客に來た武州の田舍の七兵衛といふお爺さんだからです、そのお客さんだから特に解せないといふわけではない、お客さんに來ても、歸らない以上は此處に泊つてゐるのは當り前だし、泊つてゐる以上はお茶漬を食べることも不思議ではないが、茂太郎がどうしても不思議でたまらないので、しげ〳〵とこの空にした德利を一本前へ飾りつけて、お茶漬を食べてゐるお客樣をながめたまゝ、引込みがつかないでゐるのは、この人こそ、ついたつた今、小舟の中で見た人だからです、マドロス君が爐を押して、このおぢさんが梶の方に坐つて、さうして、こちらが呼べども知らん面に、造船所の方へ行つてしまつたその舟の中で、たしかに見たこのおぢさんがあのおぢさんです。果して、このおぢさんがあのおぢさんであるとすれば、何處へあの舟をつけて、いつ此處まで來たの

だらう、たとへば、あの時に、造船所の前へ舟を著けたとしても、それからこの番所までは相當の距離がある、走つて來たとしても相當息切れがしてゐなければならないのに、もう德利を一本空にして、悠々とお茶漬を食べてゐる。
もし、舟の中のあのおぢさんがこのおぢさんでないとしたならば、こゝにゐるこのおぢさんは誰だ？　マドロス君といひ、この七兵衛と稱するおぢさんと云ひ、今日は實に、解しきれない變幻出沒――さすがの茂太郎が當惑しきつて、
「おぢさん、いつ此處へ戻つて來たの」
「たつた今……」
「だつて、お茶漬を喰べてゐるぢやないか」
「お腹がすいたからいたゞいたのさ」
「だつて……」
この時、屋外が騷がしくなりました。

八

そつと窓を押して、二人は外を見ると、すぐ眼の下なる濱邊は白晝の如くかゞやいてゐるのを認めました。

それは、地上では盛んに焚火をして、上には高張提灯を揭げ、何十人もの村民が竹槍薙旗の勢で、そこに群がり、頻りに云ひ罵つてこの番所を睨み合つてゐるのを見ます。

さすがに、ひた〳〵と押寄せては來ないが、この番所に向つての示威運動であることは確かであります。

そのうちに、大きな藁人形が二つ、群集の中に、こちらへ向けて、高く押し立てられました。さながら彌次郎兵衛の樣に竹の大串にさして、突き立てたのを、下に薪を積みはじめた處を見ると、この藁人形に火焙の刑を施さんとするものらしい。

その擧動によつて察すると、彼等はマドロスを捕へて燒き殺すことに、何か失敗があつたその腹癒せか、さうで無ければ首尾よくマドロスに私刑を加へ終つて後、斯うして駒井の番所近く第二の示威として藁人形を燒き立てやうとするものらしい。

一人で、凝と見てゐると、彼等は皆相當に昂奮しきつてゐるやうです。その昂奮に油をそゝぐやうに、立ち廻つてゐるのは、幾多のバクチ打とならず者の類と見える。

やがて、藁人形の下に積み重ねた薪に火をつけると、火は勢よく燃え上がる、それと同時に、ドツト喚聲が湧き上がりました。

この騷ぎでは多分、駒井甚三郎も目をさましたでせう、兵部の娘のベットの枕も動かされたに相違ない。

こちらの番所の中の人は擧げて、皆んな、窓越しに、ぢつとこれを眺めてゐるに相違ない。

そこが、群集のつけ目で、第一の藁人形に斯うして火をつけると、第二の藁人形に火をつけて置いて以前にも增した喚聲を上げる。

その火の色と、喚聲とを聞つれて、此の場へ駈けつけるものは、一揆の暴徒らしいやからのみでなく、浦の女子供も群がつて來ること爆竹の祝ひ見たやうなものです。

こちらの番所では、只、靜まり返つて見てゐるだけですが、あちらでは、必死になつての

示威運動です。口々に罵り騒ぐのを聞いてゐると、切支丹だとか、毛唐だとか、太え奴だ國を取りに來やがつた、――とか、黒ん坊同樣に一人殘らず燒き殺せとか、番所も船もブチ壞せとか、口を極めて物騒千萬な威嚇を試みてゐるが、威嚇しながらも、自分達に相當の警戒があつて二の足を踏んでゐるやうでもあり、遂には、奮激の虚勢も惡罵の言吻も、やゝ種切れの氣味で、その時分に鎭守の社から下げて來たらしい太鼓が屆くと、それを打ち鳴らし、やがて、この群集が躍り出しました。

それは示威運動だか、お祭り騒ぎだか、わからなくなつてしまつてゐるうちに、押し立てた高張提灯の一つに、どうしたハズミか火がついてパット燃え上ると、それを揉み消さうとして混亂が起ると、それのハヅミで何か物爭ひが起つたやうです。

喧々として物爭ひをはじめたのは、仲間同志でした。

それは、何の原因だか分らないが、ホンの足を踏んだとか、踏まれたとか、手がさはつたとかさはらなかつたとか云ふ行き張りなんでせう。やがて、すさまじい仲間同志の物爭ひになつたのです。

そこで取組合ひがはじまる、仲裁が出るといふお定まりで、こちらへ對するの示威はフッ飛んでしまひ、仲間喧嘩に花が咲いて、その騒々しさ云ふべくもない。

こちらの番所で見てゐる者は、ここに至ると笑止千萬に堪へられないでせう。無論、駒井甚三郎も研究室のカーテンを揭げて、最初からこの形勢を見てゐましたが、今し、仲間喧嘩が酣になつたのを見て、カーテンを卸してしまひ、またキャンドルを消してしまひました。

九

しばらくすると、扉をハヽ〳〵と叩くものがありますから駒井が

「お入りなさい」

と云ひました。

「御免下さいま〳〵」

と、いんぎんに現はれたのは七兵衛です。七兵衛は、主人の外に客用のものがある椅子へ

は、すゝめても腰を卸さないで、敷物の上へかしこまるのを例とします。たゞ、手に一本の矢を持つてゐる事がいつもと違ひます。

「おゝ、七兵衛殿」

「只今は隨分お驚きになりましたでございませう」

「少々、驚いたね」

「でも、あの位で納まつてよろしうございました、どうやら仲間喧嘩でも仕出かした容子でございました」

「いや、本來あの連中のやることは、根があつてするわけではないのだから他愛がない」

「でございますが、たしかにおだてる奴があるものですから、御油斷はなりませぬ」

と云つて七兵衛は、右の手に持つてゐたその矢を駒井の方へ差出して、

「只今、小使部屋とお廊下との間へこんなものを射込んだものがございました」

「はゝあ、矢文だな」

駒井は、七兵衛の手渡す矢を受取つて見ると、其處に結び封が結へつけてある、それを外

して、繰りひろげながら讀んでゐる、その讀む時間を遠慮して、七兵衛は差出ることをしないでゐたが、駒井は、さほど長くもあらぬ矢文をスラ〳〵と讀んでしまつても、別段、變つた色なく、さつと、机の上へ投げ出したのをきつかけに七兵衛が、

「おだてる奴があるものでございますから、御油斷はなりません、萬一の爲に、明日は一つお船の方から人を呼んで、この御番所の廻に嚴重な柵をお作りになつては如何かと存じます、わたくしもお手傳ひをいたしますから」

「用心にしくはないが、まあ、さうするまでには及ぶまい」

「併し、旨くおだてられてゐるんでございますから、調子によつては何を仕出かさないものでもございません、實は只今もあゝして、押かけて來て、何でも一氣にこの御番所へ荒れこんで、火をつけてしまへといふことだつたさうでございますが、中にこの御番所には大筒がある、大筒をブッ放されてはたまらないといふことを云ふ者がございまして、そこで、あんな面當だけにとどめたといふ事でございますから、今後、また度々いたづらをするに定つて居ります。さうしますと、時のハヅミで、ワーッとこれへ亂入して來ない限り

はございません、そこで、塀なり柵なりをかけて置けば、そこで必ず多少の遠慮をするに定まつて居りまする――さうしてゐるうちに、鐵砲の音の一つもさせてやれば、怖れてもう寄りつきは致しますまい、こちらから征伐も大人氣なうございますが、籠城の用心だけをして置きませんと……それには、搦手は大丈夫でございますが、海に向いた生田森が手薄でございます。早速明日にも、あれへ柵をおかけになつて置いた方が安心でございます」

七兵衛は、いんぎんに斯う云つて、駒井に進言をして見ましたが、駒井はそれを聞いて、頷くだけで、

「たとへ黒幕があるにしても、おだてる奴があるにしてもだ、人氣が斯うなつてはモウ可かんな、斯樣な人氣の中で我々は安心して仕事をするわけには行かん、我々の仕事は鐵條綱を一方につくつて、人民を敵視しながら、研究を續けて行かねばならんといふ性質のものではないのだ、彼等はおだやかにあしらつても、威力を以てあしらつて見ても、どの道、我々に對して、あゝいふ根本的の誤解が人氣になつた以上は、それを釋明するのは容易の事ぢやない。不可能の事ぢやないにしても、それを納得させる努力を外で用ひた方が宜しいから、結局――この地は我々の方より一應退散した方が勝だ」

十

駒井甚三郎は、その時に矢文の紙片を取つて七兵衛に讀み聞かせました。

ソノ方事、江戸ヲ追放サレテ、當地ニ來ル仔細ハ、毛唐ニ渡リヲツケテ謀叛ノ志アルコト分明ナリ、ヒソカニ軍艦ヲ製造シ大砲ヲ鑄造シテ毛唐ノ侵入ヲ待チ、事ヲ擧ゲテ、ワガ神國ヲ禽獸ノ徒ニ向ツテ奴隷トナサンコトヲ企ツ、言語道斷ノ次第ナリ、シカノミナラズ、毛唐ノ無賴漢ヲ雇ヒテ、善良ナル村人の財物ヲ剽掠セシメ、婦女ヲ犯サシメ、切支丹ヲ流行シ、禽獸ノ行ヲススメテ改メシメザルハ、一ニソノ方ノ責也、ヨツテ近日、中汝トソノ一味ノ者ニ向ツテ天誅ヲ加ヘ、世ノミセシメトナスベシ、覺悟セヨ

斯う云ふ文句が、可なり達筆に認められてあるのを駒井は讀み且見せて、七兵衛に向つて云ひました。

「御覽なさい、文章は體をなさないものだが、文字は、なか〳〵よく書いてあります、この邊の浦の漁師達などに書ける文字ではないのです」

「神主(かんぬし)樣か何かお書きになつたのでございますか」

「神主樣と限つたものではあるまいが、斯う云ふ思想を煽つて、無智の人民をけしかける者が志士といつて、今の世には到る處に充滿してゐる」

「怪しからん事ぢやありませんか、そんな奴を一つ御退治なすつちやあ、いかゞでございますか」

「併し、それがまあ今の世の一般の空氣になつてゐるのだから、逆らはないが宜からうと思ふ」

「でも、そんなわからず屋のおどかしに怖れてばかりゐては、つけ上がるやうな事はございますまいか、一つは御威光を見せておやりなすつちやいかゞですか」

七兵衛は、駒井の云ふことを齒痒いやうに思ひます、かう云ふ場合にこそ、空でも何んでもいゝから大筒の一發もブッ放して見せてやれ、彼等のコケおどしは、一たまりもあるまいと思はれるのに、目を驚かすばかりの精鋭な船も武器も持つて居りながら、見す〳〵こんな威嚇に屈服して爭はない駒井の殿樣の態度に七兵衛も齒痒いやうに思ひました。處が駒井甚三郎は、内心に於ても激昂してゐる容子は無く、却て、七兵衛を和めるやうな語氣で

「わしが、こゝへ籠つたのは、江戸からも遠からず、周圍も靜かで何かと便宜があるからこゝを選んだまでのことだ、周圍がうるさくなつた後、それと抗爭したり釋明したりしてまでこの地に執著して居らねばならぬ理由は少しも無いのだ、それに仕事の方も、ほゞ完成した、船は燃料の問題だけで、動かさうとすれば今にも動くまでになつてゐる、ホンの自衛の印(しるし)にこしらへた大砲も据えつけが終つてゐる、今は船中生活の器具類と食料品とを積みこめば出帆には差支へないのだ、此上は乘組の人員と目的地の針路(しんろ)だが、乘組員の方はほゞ豫定がついてゐる、この際、田山君が戻つて來ないのは殘念だが、香取鹿島までの旅だから、今日明日に戻つて來るだらうと思ふ、あのマドロスは仕方のない奴だが、鍛へ直せば役には立つのだ、お前の骨折で、あのマドロスを暴徒の手から取り戻して呉れたの

はいゝことであつた、さういふわけだから、この際、思ひ切つて、船卸しをやつてしまひ、我々はこの地を出來るだけ早く立ち去りたいのだが、それについて七兵衛殿、お前も希望通り、この船に乗りますか」

とたづねられて七兵衛が、

「それは、願つてもない仕合せでございますが、私よりも澤井にござる登様と、お松とを是非お連れ下さいませ、それが叶ひますならば、これから私が澤井へ走せ戻つて、登様をお連れ申してまゐります」

「うむ」

「では、これから一走り登様のお迎へに行つて參りませう、さうして登様とお松とこの七兵衛奴をまで、このお船の中へお連れ下されば、こんな有難いことはございませぬ、だが御當地をお立ちになつてどちらへ船をお廻しになりますのでございます」

十一

「この船は、いかなる大洋をも乗りきれるつもりだから、一たび出帆した以上は、何處へ行かうとも勝手だが、それには燃料と食物の關係もあるから、今の處はさう遠くまでは行けない、わしの考へでは、當分、近くの然るべき處へ落つけて、なほ修理と改良を加へたいのだ……その候補地が二つある、一つは駿河の國の清水港で、一つは陸前の石の巻の港だが、清水港はよい處だが、今の處、目に立ち易い心配がある、その點では陸前の石の巻が宜からうと思ふ、そこで、昨晩いろ〳〵考へて、それに決めてしまつたやうなものだ」

と駒井甚三郎が行く先きを説明して聞かせた上に、彼地には、曾て、高島門下で自分と同窓の木野德助といふものがあつて、土地で有數な船乗であり、よく自分を諒解してゐてくれる、それに土地も邊鄙だから、この邊よりはなほ一層人目に立つことが少ない、もしもの場合には一同が船中生活をしてゐて、外へさへ出なければ危險のありさうな筈がない、萬一危險がありとすれば、帆をかけて海に避けるまでのことだ……といふことを駒井が七兵衛の得心の行くまで説いて聞かせました。

駒井としては、その邊に十分の自信を持つてゐて、帆前の用意まで怠りはないのだが、そ

れにしても心にかゝるのは燃料の事で、遠洋の航海をするのに、その燃料の貯藏と補給とには念に念を入れねばならぬと考へてゐるのです、併し、それは石の卷へ著いてからの研究でも間に會ふ、それと、もう一つは結局の目的地のこと……これは定まつたやうな定まらないやうな現在ではあるが、定めて置いて却つて失望するやうなことはないか、定めないで置いて却つて理想に近い新陸地を發見し、そこに水入らずの一王國か或は民主國か知れないが、さういふものゝ種を蒔いて見ることは、また男兒の快心事ではないか、この點に於て、駒井の近況は必ずしも、冷靜な科學者でも緻密な建造家でもなく、一種のロビンソン的空想家となつてゐないではない、そこで可なり正確な數理と著實とを以つて諄々と話しつゝあるにかゝはらず七兵衞の頭におのづから熱を傳へ、實際的に信賴の出來る根據があるだけに、七兵衞のロマン味をも刺戟すること一方でないと見え、老巧な七兵衞が、海を說かれて、少年のやうな興味を植えつけられて勇みをなした有樣が、瞭々としてわかります。

この話が定まると七兵衞は、早速旅裝をとゝのへて洲の崎を出發しましたが、その馬力のかゝつた足許の躍り方までが、いつもより違つた若やかさを感ずるのは不思議と思はるるばかりです。

今までの七兵衞は、千里を突破する早い足を持つてゐたのには相違ないが、その往く手は、いつでも眞暗でした、斯うして乘りかける處は結局三尺高い木の上に過ぎない、いかに早く走つたからとて、いつかは、自分はそこまで追ひつめられて、忌應なしに、その臺の上へ、この首をのつけてしまはねばならぬ。

いつ出てゝも、往く手は夕暮である、どんなキラ〳〵した天日も七兵衞が走りながら仰ぐと暗くなつて見え、自分はそれを觀念しつゝ、幼少より今日に至るまで、明るい世界を全く暗く歩み、生涯、この暗黑から蠶はれる由なき運命のほどを、自ら哀れみもし、自らあきらめもしてゐたのが——時として、旅の半ばに、前後をのぞみ見て、泫然として流るゝ涙を拂つたこともないではなかつたのです。子供の時分、名主樣に舌を捲かせ、貴樣は日吉丸になるか石川五右衞門になるかと呆れさせたことのある自分も、よく通れば、日吉丸ほどでなくとも、五右衞門の出來そこなひにはならなかつたに相違ない……それが斯うし

て今、かうして暗く歩んでゐる。

それを考へて、七兵衛の戴く天地に、かつて明るい事がなかつたのですが、今日は、全く別な世界を歩みはじめた氣持です、この世界にはこの足を必要としないで歩み得る世界がある、それは海だ！そこは自分の特長は全く無用視されるが、自分の身に安心が豫約されるではないか、船といふものは全く別の世界になり得る！

十二

田山白雲が勿來の關に著いたのは黄昏時でありました。

勿來の關を見てから、小名濱で泊るつもりで、平潟の町を出て、九面から僅かの登りをのぼつて、故關のあとへ立つて見ると、白雲は旅情抑へがたきものがあります。

昔に聞く、勿來の關の故關の趾。

誰れが書いて、何時立てたか、「勿來古關之趾」と、風雨に曝された木柱の文字、それを圍んで巨大なる松の木が五六本、おのづからなる離合の配置面白く生ひ立つてゐる、櫻はと眼をつけて見たが、あちらに半ば枯れた大木と、あとから植えたものらしい若木が十本ばかり半ば紅葉して見えただけのもの、さて、東には海を見晴らし、西には常盤の連山、海は遠く山は近く、低い雲に壓され氣味な、その日のその時刻。

古關の木柱の前に立ちつくして、雲霧と海山とをながめ渡して、白雲はホット息をつきました。

それは疲勞を感じたから、ホット息をついたのではない、夕暮の雲煙が、いとゞ自分の旅情を壓迫して、やはり、旅情といふものを、いよ〳〵おさへ難きものにしたからでせう。

「遠くも來つるものかな」

彼は斯ういふ表情をして、勿來の古關の上に、往を感し、來を懷ふて、いはゆる低回顧望の念に堪へやらぬものゝやうです。

實際、遠く來てしまつたな——といふ感じは、その旅中の氣分の中に充ち滿ちてゐるだけに、古來の「勿來」の文字が、大手をひろげて、何か彼に向つて、前路の暗示を與へてもゐるものゝやうです。

「遠くも來つるものかな」、暗雲低く垂れて呼べば答へんとするものゝ外に、その感懷を訴ふべき人煙は無い。

吹く風ならぬ白雪に
勿來の關は埋もれて
萩のうら葉もうら淋し

白雲は斯ういつて、微吟しながら、その豪快なる胸臆のうちに、無限の哀愁を吸引し來ることに勝へないらしい。

それにしても、「勿來」の關は、王朝以前の勿來の關で、近代の勿來の關ではない筈です。たとへ、田山白雲ほどの男でも、王朝以前の時に當つて、遙々都を出でゝ、東路の道の果なる常陸帶をたぐりつくして、さてこれより北は胡沙吹く處、瘴癘の氣あつて人を傷ましむるが故に來る勿れの標示を見て、我ながら「遠くも來つるものなるかな」と傷心の感懷を洩らすのは、無理とは云へないだらうが、黒船の海を行く今日の世では、もはや「勿來」は名殘だけのものです。

江戸が天下の政治の中心地となつてしまひ、常陸にはその宗藩が置かれ、その常陸を纔か一歩拔け出した處の「勿來」の關、これから奥にはまだ、黄金花咲くと云はれる處に、伊達を誇る都もあるし、蝦夷松前といつても、名もなき漁船商船でさへが、常路の如く往來をしてゐるこの際に、白雲ほどの豪傑が、ホット息をついて、「遠くも來つるものかな」は女々しいではないか。

吹く風ならぬ白雪に
勿來の關は埋もれて
萩のうら葉もうら淋し

但、こゝで白雲の口頭に上つた微吟の歌には何等の意義が無い、さし當り口を突いて出て來た調子のまゝに、口あたりよき雅言が、咏歎的に歌調をなしたまでのことで、つまり多少共、清澄の茂太郎にかぶれたものと見て置けばよい。

立ち盡して、白雲はたゞ蒼茫たる行手の方のみを、暫らく見つめてゐました。

「遠くも來つるものかな」やはりその旅情を如何ともすることが出來ないらしい。

十三

西に眼を轉じて、自分は、安房の國洲の崎濱の駒井甚三郎の食客となつてゐる身で、それに相當の暇を告げて、立ち出でゝ來た旅中の旅路であることを憶ひました。

駒井に暇を告げる時は、香取鹿島から、水郷にしばしの放浪を試み、數日にして歸るべきを約して出て來た身なのです。それが、鹿島の浦で興をそゝられて、奥州松島を志し、「勿來」の關まで來てしまつたことが、我ながら「遠くも來つるものかな」の自省を促さざるを得ないものとなつたのでせう。

更に東へ眼を轉ずると、そこは涯りのない海です、海はいつも同じやうなことを教へる、渺たる滄海の一粟、わが生の須臾なるを悲しみと、古人は歌ふが、わが生を悲しましむることに於ては海よりも山だと白雲は想ふ、海は無限を教へて及び無きことを囁やく、人間の生涯を海洋へ持つて行つて比べることは、比較級が空漠に過ぎるやうだ。

左に磐城の連山が並ぶ、その上に斷雲が低く迷ふ——多くの場合、人間はこゝよりも山を見て、人生を悲しみたくなる、それは特に山に沒入する時よりは、山を遠くながめる時に於て、山と云ふものゝ悠久性が、海といふやうなものゝ空漠性よりは、遙に人間の比較級に親しみが深いからでせう。

海を見ても泣けない時に、却つて山を見て泣かねばならぬことがあります。

頭をあげて山川を見、
頭を低れて故郷を思ふ

この度の旅行に於て、海は白雲のために友であり師であつて、絶えずこれと共に歌ひ、これに勵まされ來つたやうですが、山が却つてこの男を、人間の悲哀に向つて、誘ひ込むらしい。

磐城の連山の雲霧の彼方に安達ヶ原がある、陸奥のしのぶもぢすりがある、白河の關がある、北海の波に近く念珠ヶ關も無ければならぬ。

それを西北に廻れば、當然、那須鹽原、二荒の山々でなければならぬ、さうして、やがて上州の山河……

「遠くも來つるものかな」と感傷のため息をついたのは、白雲もまだ人間並に故郷といふものを思出でたからでせう。おれにも、これで妻子といふものがあつたのだ、その妻子にも、幾年月の苦勞をさせたものだなといふ人間感が、犇と胸に迫つたから、それが、白雲の面に、見るに忍びぬ、一脈の傷心の現れを隱すことが出來なかつたものに相違ない。

事實、この男には妻子があつたのです、その妻子を故郷に預けて來てゐることを、「勿來」まで來て、はじめて、思ひ出すのはいゝが思ひ出される妻子といふものゝ身になつても辛からう。

斯樣な人間に附屬せしめられた妻子といふものこそは、全く氣の毒の至りです。その氣の毒な運命の程は、嘗めさせられてゐる當の妻子達は無論の事だが、嘗めさせつつ我を忘れてゐる當人も他所目ほどには樂でもあるまい、妻子には濟まい——

自己の豪興半ばにして、白雲は、ふいとこの氣分の爲に、心を傷めぬといふことはないのです、旅に出ても、若干の收入さへありさへすれば、自分は食はなくとも、それを妻子に仕送る心がけだけは忘れなかつたものだ、幸にして、この頃中は、あの山かんな女興行師につかまつて、あの女のために思はぬ大金を惠まれた、それをそつくり故郷の妻子に屆けてあるから、あれで當分の生活には事缺くまい——といふ安心が、一つは白雲を驅つてそれからそれと、陸奥の旅までも、突進させたのですが、もう一つの動力は、まさに「狩野永德」のさせる業でなければならぬ。

陸前の松島の觀瀾亭に、伊達正宗が太閤から貰つて、もたらして來た永德の大作があるといふ噂を聞いたことが、一氣にそこまで白雲を突進させやうとして、こゝ勿來の古關のあとに立たしめた本當の道筋でありました。

十四

斯うして、鹿島洋で得た豪興が、一氣に田山白雲を、こゝまで突進させてしまつたけれどこゝへ來て見ると右樣の始末で、「勿來」の文字が、歸るに如かずを敎へることしきりです。

駒井殿も心配してゐるだらう。妻子にも逢ひたくなつた——ガラにもなく、この歸心の爲

に田山白雲の心が傷みました。

松島には狩野永徳が待つてゐる――扶桑第一とうたはれた、その松島の風景的地位といふものも見定めて置きたいし、黄金花さくといふ陸奥の風物は一として、わが寶囊に從來無かつた土産物を以て充たしめざるは無いに相違ない――が前途、路は遙かだ。

「歸るに如かず」の心が、白雲の逸る心を乘り越え〳〵して、堪へ難いものとすると共にこゝまで來て……引き返すといふことの意氣地のなさを、自分ながら後めたいものにもする。

そこで、結局、行くべきものか、歸るべきものか、白雲ほどの男が、低徊顧望して、全く踏切りがつかない始末です。

そこへ、峠の彼方から――峠といふほどではないが、關の彼方から、うたをうたつて來るものがある、その歌は、何だか知らないが、うら若い娘の聲で、人の無いのを見て、ひとり興に乘つて、うたふ此の邊ありきたりの謠唄であるらしい。

「姉さん、おい姉さん」

松の間から見えた、里の乙女といひつべき若い娘、ぽちや〳〵した面の、手拭をかぶつて

脊には籠を脊負つてゐたのが、峠といふほどで無いにしても上下一里はある山路の中を、いゝ氣になつて、謠唄をうたひながら來たのを、こちらから呼び止めたのは、雲をつく田山白雲でしたから

「え！」

その當座、右の姉さんは、ぴつたりと唄をやめて、棒立ちになり、同時にワナ〳〵とふるへ出したものゝやうです。

「姉さん――」

娘は動きません、白雲はこちらで手招きをする。

娘は動かない。

白雲は、なほ手招きをする。

娘はヂリ〳〵と足ずりをする、しかも、前へは摺らないでうしろへ摺る。

白雲は、莞爾として、娘を迎へようとする。

しかも娘は蒼くなる。

白雲は、怖いものぢやないよといふ表情をして見せて、再び小手招きをする。

娘は、また足摺をする、やはり、後ろへ向つて、こつそり足摺りをしてゐたのが、やゝ小刻みに、二足ほど引く、それでも、姿勢は棒立になつた心持。

松の立木と、萩の下もえとを間にして、その間約半丁——

いかに白雲が、好意を示し、小手招きをしても、娘は近寄らない。この間、しばし。

やがて、三足、四足と、急速に踵を返すと、まつしぐらに、身をねぢ向けた娘、そのまゝ眞一文字に元來た道へ馳せ下つてしまひます、その處女にして、同時に脱兎の如き文字通りの退却ぶりを見て、白雲は開いた口がふさがらないのです。

だが、その心持ちと進退のほどはよくわかる、申すまでもない、恐怖がさせた業で、彼女の恐怖の的となつてゐるのは自分——男性でさへ、此の御面相では可なり避けて通すことになつてゐる、このおれといふものに、この時節、こんな處で、不意に呼びかけられて、あの態度を取ることは、先方の身になつて見れば些つとも不思議ではない。

併し、氣の毒な思ひをさせた、こちらは、不意に出逢せては却て蟲を起すだらう、ワザと

遠くから豫備意識を與へて、この自分といふものが見かけほどに怖ろしい男ではないといふ諒解を與へて置かうとした好意が却つて仇となつて、娘を逃がしてしまつた、氣の毒なことをしたよ——と苦笑しながら、その逃げ去つた後を見つめると何か落しものをしてゐる。

十五

傍へよつて落したものを見ると、それは金唐革の香箱でした。

「やれ〳〵、可哀相なことをしたわい」

白雲が大事に拾ひ上げて見ると、箱の中には、鼈甲の櫛笄だの、珊瑚樹の五分玉の根がけだのといふものが入つてゐる。

あの娘が後生大事に抱えて來たものだ。

風呂敷へも籠へも入れず、斯うして持つて歩いたのは、途中も嬉しいことがあつて、時々、取り出してはながめ、取り出してはながめずには居られない理由といふほどのものがあつ

て、自然に下へは置けなかつたのだらう、あちらの町から買つて、こちらの村へ戻るの途中といふよりは、あちらにおばさんなり、姉さんなりといふものがあつて、それが、今まで秘藏して居たこの品を、仔細あつてあの娘に讓つてくれたものではないか、それは、かねての長々の約束であつたか、或は一時の話のはずみから出來たのかも知れないが、今日といふ日に、この品が確實にあの娘の手に落ちたので、それを持ち歸る途中、嬉しくつて、幾度も〳〵取り出してはながめ、とり出してはながめ、こゝへ來ては、その嬉しさが鼻唄となつて、宙にかゝえ込んで來たところへ、雲突くばかりの男が出て行手をさへぎつた！、それまでの光景が、白雲の眼に手にとる如く映つて來たので、いよ〳〵罪なことをしたものだと思ひました。

白雲といへども、斯う云ふたぐひの品が、どの位、若い娘の心を躍らせるといふことを想像しないほどの凡倉ではない、若い娘でなくとも、斯う云ふものに愛著を感ずる女の心はたしかに實驗を味はつてゐる、よし、自分は嫁づいて納まり込んでしまつたにしてからがなか〳〵手放せないものだ、それを甘んじてこの若い娘さんの爲に割愛した、伯母さんなり姉さんなりの心意氣も嬉しいものではないか、事によると、あの娘が最近然るべき處へお目出たい話がまとまつた、そのお祝ひとして、この品をあの娘に讓つたといふやうな次第ではないか——さうして見ると、その二つを、ムザ〳〵と自分といふものが出現した爲に無にしてしまつてゐる。

返す〴〵も、氣の毒なことだ、罪なことをしてしまつたわいといふ、詫び心がムラ〳〵と白雲の頭に起る。そこでまた、それといふのも一つは、白雲が、自分といふ者の爲に、自分の女房と名のついた女が、散々の苦勞をし盡し、最後に、その髪の飾りの物まで、惜し氣もなく手放して呉れた苦い經驗を思ひ出さないわけには行かなかつたと見えます。

本當に惜し氣もなく——貧乏といふことの犧牲の爲に、女が身の皮を剝いで盡して呉れるその惜し氣もない心づくしといふものが、白雲だつて、今まで可なり身にこたへてゐないといふ筈は無いのです

そこで白雲は、浦島太郎がするやうに、その小箱を小脇にかい込んで——苦笑しながら娘の逃げて行つた方面を見送つてゐましたが、それは、もう一つの理由からしても、あの娘

の跡を追ひかけて、手渡してやらなければならぬといふ義務に責められてゐるやうなわけでした。

つまり、あの娘の、この品に對する愛著と失望を救ふ目的のみならず、自分の良心と名譽の爲にかけても……それは、あの娘が、里へ命からゞゝ逃げついたとする、彼の目には、雲突くばかりの追剝が、行手にわだかまつてゐたから、といふより外の報告は無いに定まつてゐる、さうなると、村人は默つてはゐまい、捨てゝは置けまい、在鄉軍人や青年團が總出になつて、出動するやうな形勢になることはわかりきつてゐる。

痛せても枯れても田山白雲が追剝泥棒の嫌疑を無關心では居られない、その證明の爲にもこちらから進んで行かねばならない——これ等の事情がつひに、白雲をして不知不識「勿來」の關の關門を前に向つて突破させてしまひました。

十六

關を下つて、關北の村へ出ると、果して白雲の豫想した通りでした。村人が總出で、只今勿來の古關のあとへ、雲突くばかりの怪盜が現はれて、若い娘を脅かして、その後生大事な髮飾りを强奪した、さういふ奴を許しては置けないといふことで、それが勿來の關に向つて押しかけて來る處へ、白雲が、その被害品を小腋にして、悠々として下りて來たから、血氣盛んな村の者が、却つて出鼻をくぢかれてゐるのを、

「怪しいものぢやありませんよ、君達、拙者は繪師です、旅の繪かきでござる、安心しなさい」

と先づ安心させて置いてから白雲は、

「野州足利の田山白雲といふ繪かきが拙者です、君達の心配する目的物はこれだらう」

と云つて、例の香箱を目先きに突きつけ、

「は、は、は、娘さんが少々、狼狽したのだ、よく、あらためて、當人に返しておやりなさい」

村人は、突きつけられた香箱を前にして、目をパチクリやつてゐるが、この男が、自分たちの豫期した惡漢ではないといふことだけの合點は行つたらしい。

「でも、繪師のやうぢやねえぜ」
とさゝやく者がある。
「浪人者のやうだなあ」
といふ、批評も聞える。
「二本差した繪かきなんていふものがあるべえか」
「浪人者ぢやねえかのう」
「繪かきぢやねえぞ」
「浪人者だア」
「浪人者」
浪人者の名は、ある時には追剝よりもよくないものになつてゐる、風體の怪しい浪人者と見たらば、引捕らへることも、尋常に捕まへきれぬ時は斬り殺すことも許されてゐる、一應、諒解したらしいが、再應の雲行が怪しくなつたと見て取つた白雲は、
「いや、君達、繪かきだから二本差して惡いといふわけは無いのだ、拙者は繪を描いてゐ

るが、野州の足利でこれでも士分の片くれの者なのだ、浪人者ぢやないのだ、それ見給へ、この寫生帖といふものを見るがよい、香取、鹿島から、霞ヶ浦から、鹿島洋から此方の風景をこの通り寫して來てゐる、今も、それ平潟の村から「勿來」の關、有名な古來の名所だらう、それを、この通り圖面にうつし取つたのだ」
と云つて、ワザ〳〵彼等の前に、その寫生帖をひろげて見せました。言語文章を以てしては理解せしめ能はざるものを、繪畫が容易く說明する、田山白雲はいつもこの手でもつて有ゆる難關を突破する、彼はその風采に於て、劍客とされ、浪士とされ、或は風雲の機をうかがふたぐひの間諜とあやまられるのに適してゐる、そこで、頭から自分は繪師の田山白雲といふことを名乘つて、さうしてなほ聽き容れられざる汐合を見て、この寫生帖を提出すれば、萬事は立ち處に解決するのを例とする、今も、
「成程、浪人者にやあ、斯うは描けねえなあ」といふ諒解についで
「やあ、九面の太平が小屋が描いてあらあ、九面の太平が小屋、あん嬶あが、餓鬼をしよつて立つてやがら」

「あ、あ、あ、太平が小屋か、お國つかゝあが餓鬼を脊負つて立つてるとこが、旨くけえてありやがらあ――ふーん」

諒解が、やがて感歎に變り

「旨えもんだなあ、こりやお關所の松の木んところだぜ――そつくりだあ、あ、こりや山庄の土藏だよ」

「なに、お前樣、小名濱の網旦那んとこんござらつしやるのかね――皆んな、御粗末にするなよ、網旦那んとこのお客樣だあよ」

と村の長老が斯う叫び出したので、空氣がまた一變しました。

十七

田山白雲は、長老の一人から、

「で、お前樣、繪をかきに上州の方から、わざ〳〵、こつちへござらつしやつたのかい、さうして、これから、どつちの方さ、ござらつしやるだかえ」

とたづねられて

「今日は一つ小名濱といふ處まで行つて、そこで、小谷半十郎といふのへ、紹介されてゐるから泊らうと思ふのだ」

「え、小名濱の網旦那んとこですか」

「いや、小谷といふのだ」

「そりや、お前樣網旦那んとこだ」

「とにかく、其處へ尋ねて行くのだ」

「それぢや、網旦那のお客樣だ、皆んな、このお繪かきさまは、網旦那んちのお客だから失禮の無えやうにしなよ、直しうに次郎公、お前、小名濱まで、このお繪かき樣をお送申しな」

斯うして、彼は質朴なる村人の諒解と好意を得て、その夜は關北の村に一泊し、翌日は小名濱の小谷家まで無事に送り屆けられて、そこで、鹿島洋で、測量のさむらひが呉れた紹介狀が立派に物を云ひ、このあたりでは殆んど領主でもあるらしき尊重ぶりの所謂網旦那

の屋敷の客となることを得たといふ次第です。

その家について見ると田山白雲は、いよ〳〵以て、この邊に於ける網且那なるものゝ勢力が、勢力に於ても富に於ても、鹿島以東の浦々に並ぶ者のない威勢を見せてゐることを知り、さうして、またこゝの當主が聞えたる藏幅家であることを知り、なほ人物と書畫と兩方面に相當の鑑識を備へてゐると見えて、田舍廻りの旅繪師を名乘つて來た白雲を無下に扱ふといふことなく、少しく畫談を試みてゐるうちに、所藏の書畫をそれからそれと取り出して見せるのですが、白雲は、その數に於て驚かされない譯には行きませんでした、次から次と運ばせる軸物の中には、駄物もあるが、また相應に見られるものも無いではない、どうして、こんな處へこんな作物が舞ひ込んだかと思はれるほど、支那の元明あたりの名家へ持つて行きたい幅物も時折現はれて來ることに感心しました。そのうち殊に白雲の眼を驚かしたのは竹林の圖です。

「これは蛇足ですな」

「さ樣です」

「うむ――」

と云つて白雲が眼をすましたのを見て、主人が敬服しました。

數ある畫幅のうちで、主人にとつて、この蛇足は一二を爭ふ秘藏のものであるらしい、併しながら、この邊鄙にお客に來るほどのもので、この主人の自負に投合する者が極めて少ない、蛇足を蛇足として見るだけの明のない奴等を、主人が笑つたり、ひとり腹を立つたりしてゐる處へ、たま〳〵白雲が來て投合し、この蛇足に向つて、蛇足だけの扱ひをしたのですから、主人が悅びました。

白雲としては、當然なことです。瓦礫は轉がるやうに轉がり、珠玉は珠玉のやうに輝いて光つてゐるのだから、數ある幅物のうちで蛇足に引かゝつたのは當然ですが、それが、たま〳〵主人の意を得て、

「この繪かきは話せる！」

といふ心持にして、それが、やがてまた待遇の上にまで現はれて來るのも當然でした。

白雲は、この蛇足から眼が放れないでゐる間に、主人の注文も定まつたと見えます。

やがて離れの別室にうつされて、主人の注文に應じて畫を作ることになつた白雲の微吟の

音が外へ聞えます。

吹く風ならぬ白雪に
勿來の關は埋もれて……。

十八

併し、ここでは、たとへ主人の好意があらうとも、注文の繪の性質があらうとも、永く滯留して、筆を練るといふことを許さない事情がありますから、白雲は二日間を限りて二つの畫を作つて、明日は晴雨にかゝはらず、此處を立つといふ時に、主人が送別を兼ねて小宴を開いて白雲をねぎらひました。

二日間の作、一つは主人の注文によつての「鐘馗(しやうき)」と、自分の作意によつての「勿來關」であります。

その二つを、床の間に置いて、送別の小宴を開いてゐる處へ、外から、

「半十郎」

と主人の名を呼ぶ聲がします。

「あゝ兒島先生がお出でになりました」

主人が座を立つて迎へやうとする時、早や聲の主は襖を押し開いて、無遠慮に、こゝへ通りました。それを白雲が見ると、小柄な色白のまだ年の若い一人の武士であります。

「拙者は米澤藩の兒島辰三郎といふ者でござる」

引き合せられて、その若い武家が白雲の前に名乘りました。

年は若いし、小柄ではあるし、色は白いし、額は廣いのに、髮は惣髮に結んであるので、一見、女にも見まほしいといつたやうな優さ男には見えるが、そこに、何となく稜々たる氣骨の犯し難きものを白雲が見て取りました。

打ち見るところ、何か、出張の目的あつて、自分よりも以前にこの家に逗留しつゝ、その所用を果しつゝあるのだな、

「御覽下さいませ、あなた樣の御不在中田山先生に、あの二幅を描いていたゞきました」

「はゝあ、鐘馗か……風景は、あれは勿來の關だな」
「はい」
「うむ、見事、見事」
その武士は、見事、見事だけで一切を片付けてしまつたのを、白雲は笑止に思ふ位ですー
ーやがて、杯酒をすゝめて後、主人が改めて、
「兒島先生、この勿來關の方に、先生の御贊をいたゞき度いものでございます、いかゞでございませう、田山先生」
と網且那の主人が云ひました。
「結構ですな」
と白雲が如才なく同意を示すと、主人は手を打つて人を呼び、筆墨の用意に取かゝらせたが、それと聞いて、忌とも云はず、默諾の形を示してゐた兒島なにがしと云はれた武士は
「いゝですか、折角の名作を汚してもかまひませんか」
「どうぞ御遠慮なく」

と白雲が、やはり如才なく云ひました。
「では、一つ」
用意せられた筆に墨を含ませて、白雲の描いた「勿來關」の上の空白を睨んでゐる目つきを見て、白雲が、小さかしい振舞かなと思ひました。
この位の年配で、たとへ旅の貧乏繪師とはいへ、苟も他人の描いたものへ、贊をと望まれても一應は辭退するのが禮であらうのに、一向辭退の色もなく引き受けて、少しもハニかむ色なく、筆をぶつつけようとする度胸だか、盲蛇だか、それに白雲は小癪な奴だといふ氣がしないでもありません、よし、まあ、やらせて見ろ、下手なことをしやがつたら、その分では置くまい、白雲の手並を見せてやる、それからで宜い。
若造 ——やつて見ろ、といふ氣構へで傍から白雲が悠然として、酒杯を啣んで見てゐるうちに、筆を取つて、畫面を見てゐた、右の若い武士は、ヅブリと硯田にそれを打ち込んで白雲の揮毫の眞中へ、雲煙を飛ばせてしまひました。
「あつ！」

と白雲が酒杯を落さうとしたのは、憤慨の爲ではありません、その龍蛇を走らすが如き奔放なる筆勢――或は意氣に打たれたとでもいふのでせう

十九

先づ、書の巧拙や、筆法の吟味は論外として、その覇氣遊逸(はきゆういつ)して、筆端龍蛇を走らす底(てい)の勢に、さすがの白雲が、すつかり氣を呑まれてしまつた形です。

さうして、白眼で見てゐた眼が躍り出し、危く酒杯を取り落さうとして見てゐると、そんなことを眼中に置かず、さつさと、走らせた筆のあとを、文字通りに讀んで見ると、

平瀉灣、勿來關
石路索廻巖洞間
怒濤如雷噴雷起
淘去淘來海嶽山
地形雄偉冠東奥

……

一字一句も亦その筆勢にかなう磊塊(らいくわい)たる意氣の噴出でないものはありません。

もとより古人の詩ではない、誰れか近代人の作を借りて來たのか、どうもその手に入つた書きぶりを見てゐると、他の作を借りて、自家の磊塊に濺ぐものとも思はれないのです。

して見れば、これは自作だ、この年で――廿歳前後です――この筆で、この作で、この意氣、これは全くすばらしい男だと、白雲が舌を捲いてしまつて、今度は、改めて、拳を膝に置いて、その武士の横顔を穴のあくほど睨みつめたものです。

件の武士は、こゝまで一氣に雲煙を飛ばせて來たが、こゝへ來ると、ピツタリ筆をとゞめて、

「まだ、あとがあるのだが、未完稿として、これで筆を止めて置く」

といひながら、同じ筆で、その側へ「湖海俠徒雲井龍雄題」と小さく書きました。

これが落款のつもりでせう「湖海俠徒雲井龍雄」といふのが、この男の好んで用ゐる變名であらうと白雲が考へました。

さうして見ると、この雲井龍雄といふ名が、この青年には、いかにもふさはしい命名であるやうに思はれて來る。

主人は、先刻から米澤藩士「兒島某」と紹介してゐたが、自分で名乘る處では雲井龍雄だ、それは自己命名か、由緒ある處の雅號か何か知らないが、この男には、たしかに兒島なにがしよりも、此處に記した、雲井龍雄の名がふさはしいと白雲が微笑して納得してしまひました。

さうとは知らず、昂然として、筆を置いた兒島なにがしこと雲井龍雄は、またもとの座に直つたが、不出來とも何とも申譯をするのではなく、自分の書いた贊を七分三分に睨みながら、主人の捧げる杯を取上げました。

白雲が、そこで何となく、いゝ心持に持前の喧嘩腰を發揮しようとします。

この男の喧嘩は名物です、喧嘩を吹きかけて見るといふことが、必ずしも、癪にさはる時のみではない。何かいゝ心持になつた時、酒の勢ひによつて善惡にかゝはらず相手を卷添にしてしまひたがる、この時も漸く酒氣が廻つたのに、そのいゝ心持が手傳つたのですから、

「君、一體、君は年は幾つだね」

と湖海俠徒、雲井龍雄の方に膝を押し向けたのから、抑々、喧嘩白雲の地金がころがり出したのです。

「弘化元年三月廿五日辰の刻に生れたよ」

斯う答へられてしまつたので、白雲が暫らく二の句が次げなくなつてしまひました。弘化元年三月廿五日辰の刻生れまで云はれてしまつたのでは、戸籍役人としても、この上難癖のつけようがないではないか、田山白雲がちよつと手がゝりを失つて、力負けの形となつて、二の矢がつげないでゐたが、そこで引込む白雲ではなく、盛り返してからみついたのは、

「生れ故郷は出羽の米澤だとおつしやいましたね」

「左樣、左樣、出羽の米澤の吾妻山の下で生れたのだ」

出羽の米澤だけなら無事だつたが、吾妻山と云つたので因緣がついたらしい。

二十

「出羽の米澤――謙信公の上杉家は知つてゐるが、吾妻山なんて山は知らない」

白雲がこんな處に因緣をつけてからみついたが、雲井なにがしは取合はない、酒によつて惡い處が嵩じて來た白雲は、

「米澤の吾妻山なんて名乘つても、米澤だけの天地では通るかも知れんが、他國の人に名乘り聞かせる場合には通らない、出羽の米澤の謙信公の上杉家のその家中の、何のなにがしと、お名乘りなさい、吾妻山なんて云ふ山は名山圖會の中には無い」

「ふゝん」

兒島なにがしが、冷笑して問題にしないから、田山白雲が躍起となりました。

この男は、駒井甚三郎に對すれば駒井甚三郎に對するやうになり、兒島なにがしに對すれば、またそのやうになる。

「關東では山として高い方でほ日本一の富士、低いけれども名に於てこのもかのもの筑波

がある、高さにして富士は一萬五千尺、山も高いが名も高いことこの上なし、筑波は僅かに數千尺――山は高くないが名が高い、米澤の吾妻山なんて、山も高くない、名も高くない……一體その吾妻山なるものゝ高さは何尺あるのだ」

白雲が、しつこくからみついたのは、やはり相手が相手だからでせう、その相手が、今度はそれに對して拔からず次の如く答へました。

「さ樣さ、吾妻山の高さは高くて五尺五寸といふところだらう」

「ナニ」

「吾妻山の高さは五尺五寸だ」

「五尺五寸とは何だ」

田山白雲が威丈高になりました。

それはこの青年に對して、あまり大人氣ないやうでしたけれども、酒興に乘じたとは云へ、高さ五尺五寸の高山とは、この青二才、人を愚弄した挨拶だと憤慨したのも無理はありません、そこで、白雲が、いきなり猿臂をのばしたのはこの青二才をなぐらうとしたの

です。

「まあ、待ち給へ」

と青年武士は、白雲の憤慨を輕く受けとめて、微笑を含みながら次の如く云ひました。

「拙者の家の書齋の窓は六尺だ、その六尺の窓から見ると、吾妻山の全體が見えて、まだ四五寸餘る、それによつて測量すると、あの山の高さは、まさに五尺四五寸のものだらうと思ふ」

「ハ、ハ、ハ、ハ」嬉しさうに笑つたのはこの家の主人です。

「それは全く間違ひのない測量でございます、六尺の窓へ入りきる山は、五尺四五寸以下でなければなりますまい」

そこで、白雲がまた白まされてしまひました、これは喧嘩にならないと思ひました。同時にこの青年は、尋屈たる怪物であると共に湧くが如き才物であることを思はせられて、どの道、非凡の男には相違ないがどうも非凡過ぎる處があると、それが氣になり出して來ました。

そこで、小谷の主人が、うまく調子をつくつたものですから、風雲は頓に納まり、三人ともに快く飲むことになります。

やがて、白雲が、前途の目的を話して、自分は仙臺の松島へ行くのだ、松島へ行くのは、あながち風景を見んが爲ではない、「永德」を見んが爲に、松島へ行く氣になつたのだ、——たゞ一人の「永德」にあこがれて、矢も楯もたまらぬ思ひで、松島まで單騎獨行するのだといふ意氣を見せたが、一座があまりその興に乘らないのを不足とします、

興に乘らないのみならず、右の青年武士は、その「永德」とは何だと反問して、豊臣時代の狩野の畫家の名であることを知り、

「今日のこの時勢に、一枚の繪を見ようとして、陸奥まで出かける閑人……一人の畫工にあこがれて千里を遠しとせざる愚物」が存することを冷笑しました。

二十一

「だから、君等は話せない」

今度は青年武士の冷笑を白雲が、輕く受けて爭はず、却つて諄々として教へるの態度を執りました。

「一枚の繪といふても、君達はまだ一枚の繪の味がわかるまい。一人の畫工といふけれども、一人の畫工の持つェラサが、君達には判らないのだから情けない」

と云つて、白雲はまづ、慷慨して、次の如く論じました。

「君たちに、あの時代の歴史を云はせれば、太閤ノ時ニ方リ、其ノ天下ニ布列スル者、既ネ希世ノ雄也、而シテ盡ク其ノ用ヲ爲シテ敢テ叛カシメザルハ必ズ術有ラシ、曰ク其意ニ中ル也、曰ク其ノ意ノ外ニ出ズル也程度で盡きるだらう、同時に人物を論ずれば、家康、如水、氏郷、政宗、三成、清正、正則それに毛利と島津あたりの處で、種切になるだらうその他はあつてもよし、無くてもよし、君達の粗雜な頭で見る歴史と人物は大よそ、その邊が止まりだ、その他日本の貿易界に誰れそれがあり、發明家、美術家に誰、思想家に誰學者にこれといふやうなことは、殆んど頭にござるまい、それは君達が悪いのぢやあない日本の歴史の教へ方が悪いのだ、天下を取つたとか取られたとか相場師の出來そこなひのやうな奴、コケ緘の鎧を著て軍をする奴でなければ、日本には英雄が無いやうに子供の時分から、教育がさう教へこんでゐるやうなものだ、そこで君達はじめ、日本人のこしらへた歴史は、まるで材木だけで組み立つたガランドウ見たやうなものだ、骨組だけはどうやら出來てゐるが、壁も無ければ障子もない、まして室内の裝飾と調度なんといふものは全然頭に無いのだ、日本の國家といふものは材木だけで出來てゐるやうに教へられてゐるから、歴史を語つても人物を論じても、その邊で、大よそ種子が盡きてしまう、人間の住む家として、骨組ばかりのガランドウが何になる、人間らしい家は人間らしい内容を持たなけりやならんのだ、時代は英雄豪傑に骨組みだけを作らせるかも知れないが、その内容整正といふものは全く違つた人々の手にある事を君達は知らない、知らないのは、教育が知らないやうに仕組んでゐるのであつて、天が不公平に一方に多く與へ、一方に多く惜しんでゐるのではないのだ、いつの時代でも必ず君たちの知つてゐる所謂通俗の英雄豪傑の外に、やはり英雄豪傑ではあるが、君等の知る通俗の英雄豪傑に優るとも劣ることなき偉材が存してゐるものだ、それが所謂通俗の英雄豪傑のした荒ごなしを補塡して行つて、人

間の仕事に不朽の光榮を殘して行くやうになつてゐるのだ、幼稚な國の教育は、たゞ前の英雄豪傑だけに箔をつけ、後の使命者の眞價を敎へない、だから若し日本人に向つて「秀吉」とは誰れだと聞いたら三尺の童子だつて知つてゐる、「永德」と呼びかけて見て、日本人のうちでは最も教養のある部に屬する君たちが知らない、知らない事が恥にはならない眞實情ない事ではないか」

白雲が痛快に罵倒するのを雲井なにがしは耳を傾けてゐて、

「そりや、君の云ふことも一面の眞理はある、何も政治をしたり軍をしたりする奴だけが英雄豪傑ではなからうけれど、他の社會の仕事はその道の人でなければわからない、わからないから、自然、人の口頭にも上らないのだ、それは必ず他の方面にも英雄豪傑が存在するに相違ない、不幸にして、その人たちは全體を見渡せるだけの地點に立つてゐないから、全體にも見られないのだ」

「處が、美術といふものは、誰れにも見える處に置かれ、誰にも見られるやうに出來てゐながら、それを見る人が無いのだ、たとへば……」

二十二

たとへば……といつて白雲が膝を組み直した時に、雲井なにがしが、問ひかけました。

「その通り、恥かしながら、我々も美術や繪畫の事にかけては盲目なのだ、それは店頭にかけた繪草紙と、應擧の描いたものと、いふやうな格段は別だが、大家の位附になると、どれも同じやうに見えて、そのエラサ加減に甲乙をつけるだけの眼識は無い、それは一つは不幸にしてさういふことを學んでゐる暇が無かつたのだ、そこで、端的にこゝで、君について學びたいのは、日本一の畫家——つまり、繪の方で古今獨歩の名人といふのはまづ誰れなのだね」

それを聞いて白雲は心得たりといふやうな見得で雲井なにがしの面をながめ、

「素人は、さういふことを聞きたがる、子供が義經と清正はどつちがキツイといふやうな程度のものだ、日本一といふものは、桃太郎の旗印のやうに簡單明瞭にくつゝけられるわけのものでは無いが、美術鑑識の入門としては、さもありさうな質問で、それを輕蔑する

わけには行かないのだ、また拙者もこれで、その道で衣食する職責上としても、素人の眞甲から來る、さう云つたやうな子供じみた質問にも充分に應接する用意を持たなければならぬ義務はある、今、それを君に成程と頷かせるだけの返答を與へてやるつもりだが、その以前に……君に聞いて置きたい豫備試驗がある、それは極めてやさしいもので、日本人である以上は、今いふ三尺の童子でも樂に及第の出來る問題だ、つまり、それは、日本第一の英雄は誰れだと尋ねれば先づ何は兎もあれ豐臣秀吉と答へるだらう」

「そりやあ、議論をすれば際限がないが、さう聞かれて、左樣に出て來るのは豐臣秀吉さ——秀吉が日本に於ける古今第一の英雄だといふことは、まあ、富士が第一の高山だといふのと同じやうに相場になつてゐる」

「その通り、そこで、拙者は、もう少し深く突込んだ意味で、端的に日本第一の畫家を狩野永德だと答へるのだ」

「先生、そりや……」

と口をはさんだのは小谷の主人でした、雲井なにがしの應答には異議をさしはさまなかつ

た主人も、白雲の斷定には服することの出來ないものがあるらしく、

「先生、そりや、ちよつと考へものぢやありませんか、太閤秀吉の日本第一の英雄といふことは許せるにしても、古永德が日本一の畫人、古今獨歩の人といふことは、まだ獨斷ぢやありますまいか、巨勢の金岡もあります、光長も信實もあります、土佐もあります、雪舟、周文、三阿彌、それから狩野家にも古法眼があります、その後に於ても探幽があり、應擧があり……」

「そりや、もとより異論もあるだらう、永德の日本一は秀吉の日本一のやうな相場にはなつてゐないが拙者は狩野永德が日本に於て最大の畫家であり、古今獨歩の名人であることを信じて疑ひません——まあ、お聽きなさい、拙者だつて、意地でそんなことを云ふわけではありません、今日まで、拙者の見た處、測つた處を論據として、それを云ふのです、地圖の測量では下總の佐原の伊能忠敬が名人ですが、拙者と雖も、自分の職とする道に於ては、可なり忠實綿密なつもりです、人間はこの通りお粗末だけれども、せめて古人を見ることの謙遜と忠實とだけでは人後に落ちないやうにと心がけてはゐます、ですから、拙

者は今日まで、苟も名畫と聞き、名人と聞けば、出來るだけの手數を盡して、その繪を見せて貰ひ、その人に親しく逢はうとしました。無論貧乏だから、買ひたいと思ふものも買へず、斯うして乞食同樣にしてゐるから、見たいと願ふものも見せてくれないものもあるがその謙遜と熱心とだけは變りませんよ、陸前の松島まで「永德」を見に行かうとするのも必ずしも物好と醉興ばかりではありませんね――この骨のこはい頭を下げてはならぬ時と下げねばならぬ時とはこれでも相當に心得てゐるつもりですよ」

二十三

白雲は傍若無人に語りつゞけました。

「狩野永德が日本一の畫家です、古今獨歩の名人です、本當に日本の繪といふものを代表するのは永德の外にありません、無いとは云へないが、あつても、それは部分的でなければ條件つきです、處が、永德に限つて、これが日本第一の、日本の美術の代表の畫人だと彈りなく云ふことが出來ます」

「永德のドノ點がエライのです、どういふ理由が日本一になるのです」

「それを云ふには……君たちを教育する意味に於ても、一通り日本の繪畫史を頭に入れて置いてもらはなければならないが、そんなことをしてゐる暇はないから、手つとり早く云へばですね、まず、ずつと上代では繪畫は即ち佛畫で、その佛畫は皆神品といつて宜しく一とか二とか等級を附すべきものではないが、その神品たる佛畫にしてからが、やつぱり支那といふものゝ系統を度外しては論ずることが出來ないのです。その後大和繪といふものが起りました、巨勢とか、土佐とか詫摩とかいふ日本の繪が出來ました、それは立派なものであるけれど、何をいふにも歴史が淺く規模が足りません、……さうしてゐるうちに東山時代といつたやうなものが來ました、所謂「雪舟」などはまさにその完全なる代表者です、たゞ、時代の代表だけではない、雪舟あたりこそ、日本一とか古今獨歩とか云ふべき地位を與へても異存のない處ですが、幸か不幸か、雪舟の偉大なのは、これを宋元の大家と比較しての偉大であつて、日本の畫家としての代表には偉大は餘りあるとしても特色が不足します、勿論、雪舟自身は支那へ渡つても、彼地に師とすべき者なし、たゞ山水の

み師なりといつて、空しく歸つて來た位ですから、その藝術に國境や系統を附すべきものではないが、その筆法の系統には宋元の脈を引いて爭ふべからざるものがあるのです、そこで、よつて、彼を世界の第一流とは云へるかも知れないが、日本を代表しての古今獨歩とは推し難い……日本を代表する以上は、そのすべてが日本化されて、さうして獨自の境に立つて、天下を睥睨するといふ渾成と氣魄が無ければならないのです、さうして、優にそのすべてが備はつてゐるのは、狩野永德が唯一人です、永德を日本第一、古今獨歩と私が推稱するのは、大體そんなやうな理由ですが、もう少し、それを分析しないと、いくら素人でも、君たちにわかるまいと思ふから……」

こゝで、また酒をとつて飲みました、主人ともう一人客は、あながち、白雲の氣焰を否まずに聞いてゐるから、白雲が續けました。

「永德は元信の孫です、元信は御承知の通り古法眼で、この人も亦、ある點では永德以上のものを持つてゐました、一體狩野家には代々豪傑が現はれたこと不思議と思はれるばかりですが、古法眼を祖父として松榮を父として生れた永德が、生れながら、すでに名匠の血を持ち、むつきの間から丹青の中に人となり、後年大成すべき豫備と練熟とは、若冠のうちに片づけてしまつたこと、我々、貧乏人が中年から飛び出して、やつと繪の具の溶き方がわかつた時分にはもう白髮になつてしまつてゐるといふやうな、悲慘な行き方とは天分の惠まれ方が違つてゐましたね、基礎學は、子供のうちに叩き込んでしまつて、一意自家の大成に全力を注ぎうるやうに仕組まれてゐた彼の境遇も仕合はせといへばいへますが天はその實力無き者に優越の環境を許すものではありません、時代は永德を現さねばならぬやうになつてゐたから、優秀な上に優秀な待遇を與へて世に送り出しました。實際彼ほど偉大な日本畫家は無い如く、彼ほど惠まれた環境を持つた畫家もありませんでした――父祖に元信があり、漢畫と大和繪を融合して日本の繪の技術を綜合した上に保護者が、その天下第一の英雄である秀吉であり、その秀吉よりも一層天才である信長でしたからね」

二十四

「秀吉が永德の唯一の保護者といふわけではないが……永德は信長の爲に寧ろ傾注してゐ

たに相違ないが、安土の城が燒けると信長の覇業が亡び、同時に永德の傾注したものも失せました、そこで、秀吉はつまり信長の延長といつてさしつかへ無いのですから秀吉を假りに保護者として置きませう——併し保護者といつた處で、秀吉は永德に取つて最負の且那でも無ければ、永德は秀吉のための御用繪師でもなく、見やうによつては、秀吉はどうしても、其の事業の光彩の爲に永德が無ければ片輪者になるし、永德はまた秀吉を待つてはじめてその大手腕を發揮することが出來たのですから、もし假りに永德が秀吉の御用繪師ならば、秀吉はまた永德の爲めの御用建築家をつとめたとも云へるでせう、永德あつて秀吉の土木が意味を成したので、永德が無ければ、單なる成金趣味の粗大なる土木だけのものでした」

「さ樣に永德は狩野の嫡流から出たのですから、漢畫水墨の技巧は生れながら受けて、早くこれに熟達を加へてゐるのに、大和繪の粹を盡く消化してゐる、さうしてそれを導く者が一代の巨人秀吉であり、その秀吉以上の天才信長であつたから惜し氣もなくカンバスを供給して、そのやりたいだけのことをやらせ、伸ばせるだけの手腕を伸ばさせて他に制肘を蒙るべき氣兼といふものが少しも無い、「畫史」によると、松や梅の十丈二十丈の物を遠慮なく金壁の上に走らせてゐる、古來日本の畫家で永德の如き巨腕を持つたものはあるかも知れないが、その巨腕を縱横に驅使すべきカンバスを與へられたこと永德の如きはあるまい、彼は文字通りの大手腕を揮ふのに注文通りの惠まれた材料を與へられてゐる、幸福といへば無上の幸福者です——貧弱を極めた我々貧乏繪師の夢にも及ばないこと——だが彼は本來、大作に餘儀なくされて大作を成した男ではないのですよ「畫史」にありますね「山水人物花鳥皆細畫ヲ爲ス、間大畫有リ」といふのですから、寧ろ細畫に堪能で、さうして大物をこなすのが本當の大物です、大小といふことはカンバスの面積の問題ではないのですが、古來これに引かゝらない畫家は殆んどありますまい、骨法の皆傳を父祖に受けたけれども、自然の觀照は獨得です、まあ、繪の骨法も正格だが、自然を觀照するの正しいこと——忠實なこと、謙遜なこと、素直なこと、爲細畫の爲すといふのは、その意味にとりたい位です、永德が、いかに骨法に正格に自然に忠實であるかといふことは……どうも、此處で君達に口で說明するといふことが出來ない、繪を見せてさうして會得させ

るより外はないが、たとへ、京都の智積院の草花の屏風を見て見給へ、あの萱の幹と野菊の葉を見て見給へ、飛雲閣の柳の幹と杖のいかに悠大にして自然なるかを見て見給へ西教寺の柿と柚の二大君子の面影に接して襟を正さないものがあるか、三寶院の鵜は一つ一つが生きてゐますよ、活きてゐると云つたつて君、活きてゐるやうに巧く描けてゐるといふ意味ぢやあありませんぜ、大覺寺の松は舞つてゐる、大安寺の藤は遊んでゐる、永納の證ある「鷹」は見まーたけれど、毛利家にあるといふ「唐獅子」を見る機會を得ないのが殘念です、われ〳〵が無位無官の田舍繪師としての傳手で、見られるだけは見たが、何處から見ても永德に隙間はありません、大にしてよく、細にしてよく、山水がよく花鳥がよく人物がよく、濃繪がよく、淡彩がよく、點がよく劃がよい——殊にその線の勁健にして和順なる味といつたら、本當の精進料理を嚙みしめる味で、狩野家の嫡流として鍛へこんだ腕でなければ、あの線は出來ません——この大名人が信長と秀吉に、自分のカンバスを作らせて、思ふ存分の腕を揮つて後、その秀吉よりも一足先きにこの世を去つた、四十八歳では短命の方ですが——自己の生命を不朽に殘して形態の英雄秀吉よりも一足お先へ行つ

てしまつた處が痛快ではないか」

二十五

主人も、雲井なにがしも、話の內容の興味よりは、意氣に乘じて語る白雲の豪快な氣焰に興を催してゐる。

白雲は、この機會に、もう少し叩き込んで置かねばならぬと考へたのでせう、こんなことを云ひました。

「さういふ樣に、信長や秀吉が如何に土木を起して金壁をなすりつけて見た處で、永德があつて、それに眼睛を點じなければ、それは成金趣味だけの者だ、前に云ふ通り、秀吉や家康や、氏鄕や元就で無ければ人物が無いと思つてゐる君達の爲に、もう少し永德の後談を語らなければならない、永德の時代友松のあつたことも記憶すべきだが、その子に山樂の出でたことこそ忘れてはなりませんよ、子といつても山樂は本當の子ではない、養子であつたのだ、しかもその養子の氷人がやつぱり天下第一の秀吉の直接の口利であつただけ

に、養子ではあつたが不肖の子ではなかつた、永德を知れば當然山樂を知らなければならぬ、永德の繪にも山樂の繪にも落款といふものは極めて少ないから、いづれをいづれと、玄人でも判斷のつきかぬることがあるが、よく見れば必ず永德は永德であり、山樂は山樂で無ければならない筈のものだ——永德は早死をしたが山樂は長生をした、凡そ長生すれば恥多しといふことを、沁々と體驗したもの山樂の如きはあるまい、山樂が丁度四十歳前後の時に不世出の英雄であり、自分を繪に導いてくれた唯一の知己恩人である秀吉に死なれて、その豪華一朝に崩れて、關東に傾くの壯大なる悲劇をまざ〳〵と見せられた山樂、家康が屢々招いたけれども行かない、遂にその不興を買ひ、身邊の危險をまでも感じて、やむなく家康にお目にかゝりに罷り出でたことは出でたが、もとより家康は秀吉ではない、英雄ではあるけれども英雄の質が違ふ、例の「實史」に恩赦ヲ蒙ッテ東照大神君ヲ駿城ニ拜シテ洛陽ニ歸休すとあるのが笑はせる、何が恩赦だ、何が大神君を拜するのだ、家康には永德や山樂は柄に無い、家康といふ男は惺窩や羅山を相手にしてゐればいゝ男なのだ、白眼に家康を見て歸つた晩年の山樂が、池田新太郎少將のこしらへた京都妙心の塔頭天球院の、

精力を傾注してゐるのは面白いぢやないか、京都へおいでたら、知積院、大安寺、その他の永德を見て、天球院の山樂を見ることを忘れてはなりませんよ——拙者が、これから行つて見ようとする松島の觀瀾亭といふのは伊達正宗が、桃山城のうちの一廊をそのまゝ秀吉から貰ひうけて建設したのだといふことで、その一棟全體が繪になつてゐるさうだ、その何れにも落款は無いが、山樂といふことに專ら傳へられてゐる、山樂でなければ永德——永德でなければ山樂——より外へは持つて行き場が無からうけれど、遊於舍の主人なども一見して自分は永德と信じたい——と語つた、關東には永德なんぞは無いものと信じてゐた拙者が、偶然、東北の一隅にその聲を聞いては凝としてゐられない、一人の畫工の爲に一枚の繪の爲に、千里の道を遠しとせざる我輩の振舞は、なる程君たちが見れば、閑人の閑つぶしとして、此の上もない馬鹿野郎に見えるだらうけれども、そこは緣なき衆生だ——緣なき衆生と雖も度するだけは度するの慈悲が無ければならぬと思つて、つひ一人でおしやべりをしてしまつた——慈悲といへば事の序にもう一つ、凡そ彫刻でも繪畫でも、日本に於て最大級の產物は盡く佛教と交渉を持たぬものは無いけれども永德はその佛教から

も超脱してゐる、この點も、まさにその特色の一つで、秀吉を古今第一等の日本の英雄とすれば、同時に日本を代表する古今獨歩の巨人としての畫人永德を忘れてはならない――

さう云つたやうな次第で拙者はこれから松島の觀瀾亭を見に行かうとするのだ」

二十六

その翌朝、田山白雲と雲井なにがしとは結束してその家を辭して出でました。

白雲が急がぬやうで急ぐ旅であり、この青年壯士も亦、落ついて此處に逗留してゐる身ではないらしい。

雲井なにがしは、近き將來に日本の勢力が二分することを信じてゐる、それは痩せても枯れても從來の德川家が一方の勢力で、他の一方の勢力の中心は薩摩と長州である。殊に薩摩がいけない、長州は國を賭して反幕の主動者となつてゐるが、そこへ行くと薩摩は國が遠いだけに長州よりも陰身の術が利く、長州は幾度か國を危くしたが、薩摩はそんな危急に瀕した事は一度も無く、さうして威壓のきくことは無類である、この兩藩が中心となつ

て末勢劣弱の德川家を、有らん限りの横暴と陰險とを以て、いぢめてゐる――と雲井なにがしは誰もが見るやうに見てゐる。

處で、その德川家の、征夷大將軍の威力も明かに落ち目で、盛衰消長は是非無しとするもそれにしても齒痒過ぎる――と雲井なにがしは自分の事のやうに憤慨する。

德川氏、政權をとること三百年、士を養ふこと八萬騎、今日この頃になつて、遂に一人の血性ある男子を見ることが出來ない、雲井なにがしは其れを切齒してゐる、その點から見ると、明らかに德川方の負であつて、薩長の横暴陰險を憎んでゐる、たゞ、德川に負するのが、所謂、佐幕論者とは全く調子も毛色も變つたものであることを認めないわけには行かない。この男は德川の恩顧を蒙り、或はその知遇に感じ、以てその社稷を重しとするのではない、薩長が憎いから德川に同情するのである。

薩賊、長奸といふやうな言葉を絶えず口にする、兎にも角にも、薩長あたりが中心となつて末勢の德川を壓迫する、そこで天下は二分する、二分して關ヶ原以前の狀態にもどる、秀吉と信長以前の狀態に一度逆轉すると見てゐる。やがてまた群雄割據の世になるかどう

か知れないが、東西二大勢力が出來て、當分はこれが相爭ふのだ、その時の用意として、自分は東北の海岸の地形や要害を見て廻つてゐる。

といふやうな議論が風發するのを、田山白雲が聞いてゐると、こいつがいよ〳〵容易ならぬ男であることを感ずる。

勤王とか佐幕とかいふ名目だけでは片づけられない、米澤といふだけに、北方に嶋を負ふて信長を畏怖させてゐた上杉謙信の血が多少共此の男の脈管に流れてゐるのではないかとさへ思はせられる。

白雲も、當世流行の勤王家や佐幕黨に可なり眉唾物の多いことを知つてゐる。藩としても隨分あやふやなものゝ多いことを知つてゐる。たとへば、ある藩では豫め藩中へ、勤王と佐幕との慣れ合ひ勢力を二つこしらへて置いて、萬一天下が勤王方に歸した時は、藩中の勤王黨の方を押し立てゝ、弊藩は斯くの如く最初から勤王黨でござるといひ、もしまた當分德川で落つく事になれば、當藩は何條無二の幕府方、その忠義心斯くの如し……と各々こしらへ置きの覺書を出してお目にかけることにする、どうしても、染め替へのならぬ旗色のものは別、さうで無い限り親藩といへども、態度の覺束ないこと、それ〴〵の志士浪士、皆それ〴〵の後立をたよつて大言壯語する。

ひとり此の雲井なにがしは悍然明白に、薩長倒さゞる可からずと主張する、さうして、たゞ一人でも其れを實行する意氣組を持つてゐる、兎に角その意氣だけは本當に怖るべき意氣だ、これほどの氣骨あるのが德川旗下にゐたらと思ふよりは、やつぱり上杉謙信や、直江山城守が、此の男の口を借りて、若干を云はせてゐるやうに、白雲に想像されてならない。

大言壯語をする奴は多いけれどもたつた一人になつても本當に謀叛の出來る奴はいくらもあるものではない、大勢の順逆は論外として、兎に角、この男は本當に謀叛をやれる奴だ、謀叛人の卵だと白雲が、同行しながら、雲井なにがしに向つて舌を卷きました。

道は山路をとつて盤城平へ通ずる處。

二十七

煙にまかれて、雨戸をしめきつたお雪ちやんは、次の間へ飛んで出て、
「久助さん、久助さん、火事ですよ」
と云ひ捨てゝ、そのまゝ、遽しく二階へかけ上つてしまひ、
「先生、火事でございます、早くお仕度なさいまし」
云はれるまでもなく、この時、龍之助はもう心得て、身のまはりのものを掻き寄せてゐた處でした。
「お雪ちやん、氣をつけるといゝ、火事の時は、明るい方へ逃げないで暗い方へ逃げるものです」
「先生、早くなさいまし」
お雪ちやんは、龍之助の手を取つて引き立てやうとしたが、人を急き立てる自分こそ却つて、あはてゝゐて、寢まき一つのまんまで騒いでゐるのに、龍之助は、身のまはりのもの少なくとも大小と、懐中物だけは、抜かりなく用心した上に、頭巾を手に取り上げてゐます。

「さあ、降りませう、あゝ、いけません、こちらは明るい、この裏梯子から……」
「あゝ、先生、わたしは、もう一ぺん自分の座敷へ戻らねばなりません」
「それは危ぶない」
「でも……」
「命には代へられません」
その裏梯子を下りる時には、お雪ちやんが龍之助を導くのではなく、寧ろ、龍之助がお雪ちやんを抱へて、靜かに下りて行くのを見ましたが、火は、煙は遠慮なく、その後を追ひかけて、姿そのものを捲き込んでしまひました。
斯うして二人は、ほんたうに身を以て、裏梯子から、直ぐ家の欄の下の棧橋に立つて、河原を走ることになりました。
お雪ちやんこそは全く身を以て、逃れ出たもので、自分が一番先きに發見したといふ立場から、まづ以て急を久助さんに告げ、その足で、二階へ、龍之助に告げに行つた、その次の仕事としては、もう、どうしても自分の部屋に戻ることは出來ませんでした。

部屋そのものに名殘の殘るわけではないが、そこには自分の身のまはりの一切のものが置き捨てられてあつたのです。

一切のものといふうちに、その數々を擧げて見るよりは、その中から取出し得たものはこの身體と、この身についた寢卷一著だけといふ方がわかり易いでせう、しかも、この寢卷は自分のものではありません、帶までが宿のものなのです。

河原の眞中へ來た時分に、盛んに燃えてゐる自分達の座敷のあたりを見ると、お雪ちやんは急に恐ろしくなつてしまひました。

あゝ、何だつて、自分はこんなに、はしたないのでせう、せめてあの帶上げだけも、あの手文庫だけも、あの紙入だけも、立ち上る送端に、しつかりとこゝへ挾んで來ればよかつたものを——命より大事なものは無いと云ひながら、旅に出ては命同樣の役目をする路用の一切を燒いてしまつた、ほんとに明日からは、どうするのでせう。

久助さんは……久助さんは、どうしたらう、あの人は耳が少し遠いから、わたしがあゝ云つて呼んであげたのがわかつたかしら、判らなくても子供ぢやなし、逃げ出せない筈はな

いが……

お雪ちやんは、漸く、川原の中程へ來て、わが身の事と、人の身の安否を考へたが、どちらもたよりない事ばつかり、でも、肝腎の目の見えない先生が、斯うして御無事に……と思ふ、そればかりが心だのみでした。

「もう大丈夫ですねえ、先生」

自己安慰を求めるものゝやうに、斯う云つたが、盛んに燃えさかる火の手が、河原の表面を晝のやうにかゞやかすと、避難の者が、いづれも此方へ此方へと走りかゝるのを見て、又も不安の念に襲はれました。

二十八

火に追はれるのは怖れないにしても、人目に觸れさせたくない心配はある。間もなく川下の森のやうになつた柳の木蔭で、探し當てたのは、つなぎ捨てられた屋形船の一つです、夏になると、此の宮川が屋形船に覆はれて、花柳の巷が川の上へ移される。今は誰も相手

にする者の無い捨小舟。

船の中をなほよく見ると、蓆やゴザが丸く卷いて隅の方に積んである、お雪ちやんは、その敷物を布いて、龍之助をその中に休ませました。さうして置いて云ふ事には、

「先生、わたしは、これから火事場の方へ行つて參ります、久助さんの身の上も心配だしもしかして、わたしの荷物を、宿の人が出して呉れたかも知れません」

「行つておいでなさい」

「お寒いでせうけれど、暫らく御辛抱なすつて下さいね」

「寒い位は何ともありません」

「その代り、わたしが宿の人に頼んで、直ぐによい避難所を探がして來てあげますから」

「あゝ、何しろ火事場はあぶないから怪我をしないようにね」

「大丈夫、先生こそ、お風邪を召さぬように」

「なあに、わしは大丈夫だ」

と云ひました、暗いから、よくわからないけれども、龍之助は、お雪ちやんのやうに寢卷

一枚ではなく、急の場合に、手まはりで身づくろひの出來るだけのことはして來てゐるやうです、ですから、こゝで、うたゝねをさせて置いても、そんなに急に風邪をひくやうなこともあるまいと思はれるのに、自分は、ホンの寢卷一枚——急にゾク〳〵寒氣がして來ました。

氣がついて見れば、自分がこの人を呼びさまして、連れて此處まで避難して來たといふのは全くウソで、事實は、この人に自分が抱へられて、梯子を下り、小川を飛び越え、河原を走つて、こゝまで來たのだといふことがこの時、はじめてわかりました。

途中、緊張しきつて、我を忘れてゐたものですから、そこは水でございます、そこに石があります、あゝ大きな穴が、あぶない——と走りながら、自分は幾度か警告したのは口だけで、さう云ひながら此處まで走つて來たと思つた自分は、實は此の人の小腋に抱へられて、自分が口だけの案内者に過ぎなかつといふことが、この時ハッキリ判りました。

その證據には、自分は全く素足で、履物といふものを穿いてゐない、それは途中で脱げてしまつたのではなく、最初から穿いて來なかつたので、穿いて來る餘裕の無かつたといふ

ことは、今となつて明かにわかります、かりにも履物をつけないで、あの河原道をこゝまで走つて來れば、足が裂けてしまつてゐるに相違ない、それだのに、自分の足は何ともないではないか、それが、ハツキリわかつて見ると、お雪ちやんは、いくら先走つて世話を燒くやうでも女は女——といふ引け目を、しをらしく感じてしまひました。同時にまた、こんなに病身で、殊に肝腎のお目が悪いのに、それでも足許を誤らずに、この石ころ高い河原道を、わたしといふ者を抱へながら、こゝまで連れて來て下さつた先生は、えらいと思はないわけには行きません、危急の場合にはどうしても女は女で……と感ずると共に、男である以上は、こんな不自由な身であつても、膽の据ゑ方といふものが違ふのぢやないか知ら——とお雪ちやんは、今更のやうにそんなことを感じ、一時、こんな氣持でボンヤリしましたけれども、いつまでもボンヤリしてゐる場合ではなし、

「では、先生、一走り行つて參りますから」

と三たび暇乞の言葉を殘して行かうとしますと、龍之助が、

「お雪ちやん——草履をはいておいでなさい」

と心づけて吳れました。

「まあ」

そんな事、細かいことまでわかるのかしら、お雪ちやんは、眼のあいた人と眼のあかない人との地位が顚倒してゐるのではないかと思ひました。

二十九

さうして置いてお雪ちやんは再び火事場へ取つて返しました。

大した風はなかつたのですけれども、乾ききつてゐた處へ、消防の手が不足のせゐだつたのでせう、火勢はいよ〳〵猛烈で、殆んど手のつけやうが無い有樣でした。

橋を渡つて、火が對岸へ燃えうつらうとしてゐるのを、必死で支へるだけが消防隊のする全力の仕事のやうでした。

ですから、ほとんど火事場へは寄りつけない、のみならず、火を避けやうとして、逃げ出す人波と荷物とに押されて、空しく押し戻されるより外はありません。

その逃げ迷ふ人波の中に、せめて久助さんの姿でも見出したいものと、川原を廻つて後ろからのぞんで見ましたけれども、それらしい人を見ることが出來ません。

是非なく、また川原道を、屋形船の處まで舞ひ戻るより外に爲さん樣がありませんでした

この戻りにも、何といつて一つ獲物らしいものを持つて來ることが出來ない悲しさ、せめて、あのお金入れの一つさへ持つてゐたならば、この戻りに廻り道をしてなりと何か一品

——さし當つての一夜の凌ぎになるものを買つて戻れるものを、それも出來ない、まして借りる處も、貸す處も——手ぶらで出でゝ手ぶらで歸るより外、何事も出來ない自分を齒痒いと思ひました。

けれども、今の場合では、どうしても、さうして手ぶらで歸るより外に道はありません、せめて手ブラでなりと無事に歸つて、人を安心させ、自分も安心して、この一夜を明かしてから、萬事はその後——とさう心を定める外はありませんでした。

さうして、大火の火影に照らされながら、川原道を飛んで、時には、水たまりへぐちやりと足を入れたりなんぞして、前をながめ、後ろを顧みながら辿つて行くと、草むらの中に一際白いものゝあるのが眼につきました。

「おや」

白い、長い、箱のやうなもの、遠火の光にあふれて有り〳〵とそれを見出したのは、やつぱり長い箱に相違ありません。

長持にしては白過ぎると思ひました。でも、それが何の爲に、こんな處に存在するかを想像するのは難事ではない、大事なものを持ち出して、ワザとこんな遠くへまで置きぱなしにして行つたのは、もうげんじたわけではない、火事に顚倒して、我を忘れた狼狽の沙汰ではない、荷物を持ち出す時の目測では、もうこの邊まで持ち出せば大丈夫と安んじてゐたものが、いつしか、火勢に先んぜられて混亂の渦に沒してしまふ事が多い、そんな途方もない處まで運ばなくてもと、物笑ひになる程の心配が却て賢明に安全を贏ち得るといふことはよく經驗する處です——お雪ちやんは歩むともなく、その置きつぱなしにされた白い長い箱の傍に寄つて見ると、果して長持ではない。

「おや——」

前のは單なる驚異でしたけれども、今度のは、恐怖を伴ふ叫びでした。

何です、これは、縁起の悪い、棺ではありませんか、寢棺ではありませんか、おゝ忌だ、寢棺が捨てられてある。

お雪ちやんはそれを見まいとして走りました。

あれだけの寢棺では、可なり立派なお家の葬式であらうけれど、入棺間際に火事が起つて眞先きにあれを擔いで避難はしたが、死んだ人よりも生きてゐる人の難儀の方が大事である場合、是非なく棺はあのまゝにして、また火事場へ取つて歸してしまつたのだ。

それにしても、この際、棺をこゝまで持つて來て避難させるまでの熱心があるならば、誰れか一人位は、こゝに番をしてあげたらよかりさうなもの、よく〳〵の場合とは云へ、捨てられた佛が可哀想ぢやないか、獨りでこんな處へおつぽり出されて、もし狼か山犬にでも荒されるやうなことがあつたならば、いつそ、火事場へ置いて燒いてしまつてあげた方が功德ぢやないかしら。

お雪ちやんはこんなことを考へながら眼をつぶつて屋形船の近くまで走つて來てしまひました。

三十

この屋形船の中で、龍之助とお雪ちやんは一夜を明かしたのです。

夜が明けると、お雪ちやんは龍之助に斷つて、再び火事場へ出て行きました。

昨晩は、近寄れなかつたが、今朝は、もう火も鎭まつて見れば、行けないことはない、第一に久助さんの行方——それから自分達の荷物の安否、それから宿屋の主人に向つて善後策の交渉——そんな事を、一々これから切り盛りをしなくてはならないと、雄々しくも心を定めて、寢卷一著を恥かしいとも思はず——恥かしいと思つても、この際、どうすることも出來ないのですから、そのまゝで、燒け跡の方へ出かけて行つてしまひました。

船の中に、ひとり殘された龍之助は、肱を枕に横になると、天地の狹いことを感じませんこの頃では、よいことに、夢ではなく眼をつゞつて、息を調へて沈默してゐる間に、さまざまのうつゝの物を見ることです。曾て見たことのある山水や人物が、うつゝとなつて、

沈思閉眼の境に現はれて來て、甘美なる幻像に喜ばされるの癖がつきました。

これは、さうするつもりがなく、白骨の閑居のうちに、おのづから養はれた佳癖といふことが出來ませう、それは曾て自分が實見したことのある山水のみならず、人が樣々に語り聞かす物語を、自分が閉眼して一々繪に描いて見ることが出來るやうになつたもので、白馬ヶ嶽や、槍ヶ嶽や、加賀の白山や、越中の立山が、皆んな實物以外の想像となつて、龍之助の眼底にあり〳〵と寫つてくるのです、さうしてまたお雪ちやんの話しぶりといふものがその想像を助けるのに最もふさはしいものでありました。白骨の爐邊閑話でも、そこに集まる冬籠りの人達の風采を、お雪ちやんの話によつて、一々想像に描いて見ては、それ等の人と共に語るやうな思ひもするのです、時として、イヤなおばさんだの、佛頂寺彌助の一行だのと云つたやうなのが、苦々しい幻像を現すこともあるが、概して、自ら描いて見る風景と人物とは　特殊な甘美なものがあつて、自己陶醉には充分なのです、その幻像から來る自己陶醉を樂しむ事が出來るやうになつた龍之助は、性格的にどれほど惠まれたかは知れないが、時間的には、たしかに退屈といふことを忘るゝの術を授けられたやうな

ものです。

平湯から、こちらでは、その機會の少なかつたのは、沈靜から流動へと移つた旅程のあわたゞしさでせう、昨夜の火事の前なども、うつら〳〵とその夢幻の境に引き入れられやうとして、引き戻されたのではあるまいか。

今は、しばらくその時が與へられた、空想の幻像によつて、窮居の無聊を救ふの術を覺えたことの應用はこの邊だと心得たものでもないでもうが、肱に枕をすると、眼を眼中に向けて、想を雲煙の境に飛ばしました。併し、幻想と雖も境遇と離れては成り立たないものと見えて、龍之助の夢うつゝは、昨夜來の出來事と、さうして自分にかしづいてゐるお雪ちやんの面影の外には出でることが出來ませんでした。

あれから、夜の白むまでの半夜を、この狹いところに明かし合つて、眼がさめた時の、お雪ちやんの言葉が、

「先生、お寒くはございませんでゝた？」

と斯う云ふのです。

寒くないかと、見舞を云つたお雪ちやんその人が却つて寒さに顫えてゐる面影を龍之助はあり〳〵と見ました。

寢卷一著の外に、何にも無くて、自分を顧るよりも先きに、人の安否の爲に奔走したお雪ちやんの最も好意ある狼狽を、龍之助と雖も充分見て取つてゐるのでせう。

自分はあの際にも、出來るだけの身ごしらへはして來てゐるから、寒くはない、寒いといつても知れたものだが、お雪ちやんはあれから間もなく夜明けではあつたものゝ、その間寢入つたやうなふりをしてゐたがまんぢりともしなかつたことを龍之助は知つてゐなければならぬ筈。

三十一

龍之助も、あの子にだけは、どう考へても惡意を持つ氣にはなれないらしい。

お雪ちやんといふ子を、龍之助は、どんなやうに想像してゐるか、女と云ふものに就てはお豐である限りの外の女は、龍之助の肉眼での女といふものは無いのです。

どの道、女といふものゝ運命も、他の生物の運命と同じことに殺してしまうか、殺されてしまうのが落だ。

龍之助はお雪ちやんを可愛ゆいと思はないことはない、可愛ゆい子だと、身に沁みる時にまた一方に極めて冷たいものがあつて、こいつも亦、今まで經來つた有ゆる女と同じ運命の目を見せてやる時が來るのかな——とあざ笑ふこともある。

いつの間にか、自分が愛すれば愛するほど、自分が愛せられゝば愛せられるほど、そのものゝ運命のほどを、凝と最後まで見詰めてゐてやりたくなる癖がある。

生かすこと、殺す事の外には、龍之助の天地は無いのだ、たとへば現在はどうあらうとも運命がこの二つに過ぎないことは、見え過ぎる程見えてゐる、愛著がしばしの戯れと思はれて、彼は何人の捧ぐる好意にも感謝といふものを持つことが出來ない、それでも、お雪ちやん、その人には感謝は出來ないながら、惡意を持つことまでは出來ないで、さうしておのづからその慘虐なる遊戯性が、この子の前では、崩して來ないことを不思議と云へるでせう。

如何なるおそれも、最後は、必ず自分が手にかけて殺してしまふ――斯う云ふ自覺せざるの自信に充ちてゐる龍之助も、まだお雪ちやんを殺さうとはしてゐないらしい、結局はそこへ行かねばならないことを怖れてゐるのは辨信法師一人で、お雪ちやん自身も一向それに氣のついてゐる容子はない。

辨信に對しては、龍之助は、殆んど無關心でゐることの出來る、此れも一つの不思議な存在でありました。

神尾主膳は、辨信の存在をこの世の何者よりも憎み嫌ひ憤り、その名を聞いてさへも、渾身の憎惡に震へ上がり、一たびその聲を聞き、その姿を見た時は、打ち殺し打ちひしぎ裂き碎いて、この世での存在はもとより想像をさへも拭き消したがるほどの關心を持つてゐるのに、龍之助は、あのおしやべり坊主に對しては、水の如き執著をしか持つて居りません、甲州の月見寺で、むら〳〵と彼を斬りたくなり、その身代りに卒塔婆を斬つた途端にその執著が水の如く、身内を流れ去つて以來、彼の存在を餘り氣にしてゐるといふことを知りません。その他、考へて見れば、自分は自分に降りかゝつて來る物の外に從つて不思議に執著を持たない身であることを感せずには居られません、むら〳〵と自分の身に湧き出す如何ともすべからざる力に、ふと外物が引かゝた時が最後――その外には、自分は憎むべくして憎むべき人を知らない、殺すべくして殺すべき人を知らない。

こんなことを、うつら〳〵と考へてゐる時に外で聲がしました。

「先生、喜んで下さい、久助さんがゐましたよ、見つかりましたよ」

さも嬉しさうな呼び聲、燒跡へ出かけて行つたお雪ちやんが歸つて來たのです。

その、たまらぬほど嬉しさうな聲によつて見ると、お雪ちやんは、久助を燒跡で見つけたのみならず、こゝへ伴つて來たことの有樣があり〳〵と想像されます。

途中で、一度は、どうしたら久助さんをまいてしまへるか知ら――とひそかに苦心したお雪ちやん自身が、今は死んだ子が生き返りでもしたやうに、喜んで歸つて來た心持ち、我儘といへば此の上もない我儘、自分勝手の行き止り、お雪ちやん自身でもそれを考へて見ればをかしくはないか。

船の外には、お雪ちやんが先に立つて、久助さんが何か荷物を一脊負ひ脊負ひ込んで立つ

てゐるに違ひありません。

三十二

二人が火事場の模様を話して聞かせる處によると、延燒區域は一の町二の町三の町目ぬきの處をすつかり、後ろは錦山、前は橋を燒いて向う岸までも嘗めた處がある、近頃での大火であつたこと、御同樣、燒け出されの者が多いこと、その燒け出されに不思義と著のみ著のまゝが多い事、でも町内と代官の手廻りがよくて、いち早く炊出もあるし、罹災民の救助方も可なり行き屆いてゐるとの事。

久助さんも、最初お雪ちやんの警告を聞いて、飛び起きたが、飛び起きた時は、もう火が迫つてゐたので、御多分に洩れず、著のみ著の儘で飛び出したが、今朝になつて古著や炊出しの恩惠にあづかり、斯うして脊中に一荷物脊負ひこみ、なほ炊出しの握飯を竹の皮包みにしてこゝへ持ち込んで來たものです。

さうして、二人で宿の主人にかけ合つて見たが、宿でも殆ど家財を持ち出さなかつた位で

お客樣の方に手が及ばなかつた事を繰り返し、詫言を云はれて見ると結局身一つだけが持ち出されたといふことに、あきらめをつけるより外はありません。

併し、代宿としては、今の宿が責任を以て心配してくれ、相應院といふお寺を借りて、そこに泊つていたゞく事に交渉がついてゐますから、あれへお越し下さいませ、萬事は、後程の御相談といふ事で一應の解決はつけて來たのでした。

さういふわけで、もう一晩、此の屋形船の中で辛抱し、明日になれば、お寺へ引き移らうといふ相談になつて、それから、お雪ちやんと久助さんとが申し合せて、さし當つての急場の凌ぎです、その爲に久助は出て行きました、お雪ちやんは、久助の持つて來た炊出しの握り飯を龍之助にもすゝめ、自分も食べて見て、はじめてお腹のすいてゐたといふことを悟る始末です。

それでも、お雪ちやんにしても、久助さんにしても、お救ひ米を貰ひに行く氣にはなれないのです、こんな非常の際とはいへ、何だか定まりが悪くて風呂敷や袋をさげて、燒跡へお救ひ米をもらひに行く氣にはなれないが、さりとて、著のみ著のまゝで、燒け出されの

旅の身、親類が一人あるといふわけではなし、明日からの當座の宿所はお寺と定まつてもそれから後がまた心配です――故郷までは長い道のり、たよりをすることも、金を取り寄せることも、この場合間に合ふ筈がありません。

よし、忍んで、お救ひ米にありついたとしてからが、それが幾日續かう、路用や貯への一切を燒いてしまつた上に、せめて、頭の飾りとか何とか一草でも殘つてゐれば、多少共急場を救ふの金目にならないとも限らないが、それすら無いのですから、一時は斯うして人の好意につながつてゐても、八妄が目の前についてゐる。

どうしても、何とか當座の凌ぎをつけて置いて、久助さんを國へ立たせなければならぬ、久助さんを國へやるか、この地で飛脚を賴むかするより外は無いが、飛脚では安心のなり難い事もある、是非、どうしても久助さんに行つて貰はねば……先日は、かりそめに邪魔にした久助を、今は一にも二にも恃む心になつたのも、勝手なものだが、その恃みきつた久助さんとても、假りに最大速度で走つて呉れたところで、往復に廿日はかゝるでせう、その廿日の間――廿日たつて歸るものならいゝが、今の時節、途中でもしものことでもあつたらどうしませう。

此際に、お雪ちやんが、「遠くの親類より近くの他人」といふ諺をしみ〴〵と思ひ身に沁みました。

親類でも實家でも、遠くにあつては何にもならない、これは、いつそ、近くの他人……他人へすがるより外はあるまいけれど、こんな處ですがるべき他人を見出すことがむづかしい、どうしたものだらう――お雪ちやんは思案の揚句、不圖胸に浮んだのが白骨温泉に滯在してゐる人達、わけて北原さんの事です。

三十三

白骨を出る時は、こつそりと、出しぬけに出て來てしまつてゐるから、皆さんも氣を惡くしてゐらつしやるだらうが、それには、さうしなければならぬわけがある、でも、何も皆さんの爲に、あとを濁して來たといふわけではないから、申譯をしさへすれば話は、わかつて貰へる。

あの多籠りの人達は、いづれも一風變つた人達ではあつたけれども、中でも北原さんが一番氣輕で、わたしとは氣が合つてゐた、口は惡いけれども全く親切氣のあつた人。

あの北原さんに便りをして見やうかしら、近くの他人といへば、あの人より外は無い、甲州までは大へんな道のり、白骨はほんの十里内外――久助さんに面をかつて一つ白骨へ行つてもらはう、さうして北原さんに事情を打ち明ければ、この急場を凌ぐに最もよい智惠を貸して下さるに相違ない――さうだ、では北原さんに手紙を書きませう。

お雪ちやんは、こんな氣持になつて、明日、お寺へ落着いたなら、眞先きに北原さんへ手紙を書かうと決心し、それから、

「先生、こんなことなら、あなたを白骨にお置き申した方が宜うございましたねえ」

と、所在なさゝうな、轉寢の龍之助を見て、なぐさめの言葉をかけました。

「こんな世話場も面白いものだ」

「本當に、思ひがけない世話場を出してしまひました、これも、あのイヤなおばさんの祟りかも知れません」

とお雪ちやんが、何氣なく返事をして、もつて自分が變な氣になりました、世話場は世話場でいゝが、何もイヤなおばさんの名前なんぞをこゝに引合に出す由は無いのに、口を辷らして自分でイヤな思ひをし、人にイヤな思ひをさせることを悔んで見ました。

「さうかも知れないね、あのおばさんの魂魄がついて廻つてゐるのかも知れない」

「もう、よしませう、あんなイヤなおばさんのこと」

「どうしたものか、昨晩、わたしはあのおばさんの夢を見た」

「もう、よしませう」

「今更、そんな薄情なことを云はなくてもいゝぢやないか、白骨にゐる時は、お前もあんなになづいた癖に、こゝはあのおばさんの故郷といふことだ、せめて、こゝへ來たからはあのおばさんの魂魄をとむらつてやる氣におなりなさい」

「でも、わたし、何んだか頭が變で、どうしてもそんな氣になれません、あのおばさんのこと、思ひ出しても氣が變になりさうです、忘れてゐればよかつたのに」

「それが忘れられないといふのも因緣で、どうも白骨から、あのおばさんの魂魄があとに

なり先になつて我々に伴いてくるやうな氣がしてならん、昨晩も……」
「もう、よして下さい、先生、わたしも本當は、そんな氣がしてならないことがあるんですけれども、誰れにも云はないでゐるんです」
「はゝあ、それを云つてごらんなさい」
「忌です。本當に忌な先生、今まで火事で忘れてゐたのに」
「それを思ひ出すやうにしたのは」
「やつぱり、わたしが云ひ出さなければよかつたのに」
「それが、つまり、イヤなおばさんの祟りといふ奴かも知れぬ、實はな、昨晩も……」
「もう御免下さい、あなたから昨晩……と仰言られると、水をかけられたやうにゾッとして、そのあとから幽靈が出さうでなりません、さうでなくても、わたしはあのおばさんについて、誰にも話せないことを見てゐるのですから」
「誰にも話せないといふて、話さないでゐるからいけない。云つてごらんなさい、イヤな思ひが晴れるかも知れない、實は昨晩、寢てゐると、あのおばさんが向ふの川原から來て

此の船をゆすぶつて行つたよ」
「え！」
お雪ちやんが面の色を變へた時に久助さんが歸つて來ました。

三十四

久助さんが、尙ほ何かと手土産やうのものをブラ下げて歸つて來ての話に、こんな事がありました。
「お雪ちやん、わたしは今日、お救ひ小屋で妙な人に出會ひましたよ」
妙な人だの、變な人だの、イヤなおばさんだの、だしぬけに引き出される名前が、お雪ちやんの胸にいゝ印象を與へませんでした。
「誰れに？」
「あのね、そら、いつぞや、上野原へ、若い衆のおさむらひさんが來たでせう、お雪ちやんが井戸で水を汲んでゐなさる處へ、疲れて來て、水を一ぱい下さいといつたのが緣で、

それから、あなたがお宅へ泊めておやりなさることになると、ホラその晩、あの強盗でございませう、方丈様も、お前様も、殘らず強盜に縛られておしまひなすつたのを、丁度泊り合せなすつた、あの若いおさむらひさんが、すつかり退治をして下さつたあの晩の事、さうして、その強盜を追ひ散らし、皆さんを無事に助けて下さつたけれど、あの泥棒共が翌日火の見櫓の下で、狼に食ひ殺されてゐましたつけ……ほら、あの時のあの若いおさむらひさんに違ひないと思ひました。あの方にお目にかゝりましたよ」

「まあ、それは本當に珍らしい、またよい人にお目にかゝりました、先方様は何と仰言いました」

「それがね、たしかにあの方とは思ひますけれども、もしやと思つて、何とも申上げないで歸つて來ました」

「それは、惜しいことをしました。何とか御挨拶を申上げて見ればよかつたのに」

「御挨拶なら、いつでも出來ると思ひましてね、實はそのおさむらひさんが、お代官所の役人様達と一緒に、お救ひ米やら、救助方やらに骨を折つてゐらつしやるので、隨分お忙しいやうでしたから、本當に御親切に、わたしを見かけて、あちらではお氣がつきませんのですが、たゞの燒け出され人だと思つて、お米を下さる、着物を下さる、この乾物も持つて行けと、こんなに惠んで下さいました、あんまりお忙がしいやうでしたから、ツイその事も申上げませんでしたが、なあに、あゝしてお代官所にゐらつしやるのだから、いつでも御挨拶は出來ますが、それは私が申上げるより、お雪さんが行つてお話になると、一ばんわかりがいゝと思ひました」

「本當にそれは珍らしい、若しあの時の旅のおさむらひさんでしたら、よい處でお目にかゝつたもの、明日にもわたしがお訪ね申して見ませう」

「さうなさいまし」

お雪ちやんは、あの夜のことを思ひ出しました、果して、それがあの時のさむらひ、宇津木兵馬様であるやら無いやらは懸念の事だけれども、今日の場合では、他人の空似であつても心強い感じがする。

明日は北原さんへ手紙を書くことの外に、もう一つ用事が出來た。それは、そのお方をおた

づねして見ることだ、本當にあの若いおさむらひさんならば、北原さんよりもいつそ手近で、打ち明けて相談の出來る人、ほんとに他人でない氣持ちがする——今の先き、忌なおばさんの記憶で惡くした氣を、この久助の報告で、お雪ちやんがすつかり取り返しました。こんなやうな、あはたゞしい混亂のうちに、夜になつたから、この一晩を、また屋形船の中で明かすことになりました。昨晩は、火事をよそにして幾らも殘らない夜明けを、あんなにして明かしてしまつたが、今晩はもう一人、久助さんといふ者が來てゐて、狹い船の中が賑かです。

それでも、昨晩からの疲れが烈しいものですから、お雪ちやんは、薄著の事も氣にならず他愛なく眠に落ちてしまひました、久助さんも亦同樣で、二人とは少し離れた處にゴロリと横になると、やはり疲れがさせる鼾の聲——。

ひとり、龍之助だけが眠れないものですからそろ〳〵と起き上りました。

三十五

立ち上つた時には、龍之助は、昔、甲府城下の夜の時したやうに、その後は、本所の彌勒寺長屋にゐた時分の夜な〳〵のやうに、面を頭巾に包んでゐました。

たゞ、今宵は、自分の今まで羽折つてゐた羽織だけを脱いで、それをどうするかと見ると寢息をたよりに、お雪ちやんの體の上へ、ふわりとのせて置いて、それで自分は煙のやうに此の船の中を外へ出てしまひました。

その足どり、物ごし、手に入つたやうなもので、人間そのものがこゝを脱け出したとは思はれません、煙が一むら、すうつと、窓を拔けたやうなあんばいに、いつしか、龍之助は屋形船の外の人となつてゐました。

外へ出ると、天地は飛驒の高山の宮川の川原の中です。

川原の中を、すつく〳〵と歩み行く龍之助、久しぶりで壺中の天地を出て、今宵はじめて天と地のやゝ廣き處へぬけ出したから、この邊から雲を呼んで昇天するといふつもりでも無いでせうが、ほんとうに、久しいこと、自由な天地を歩きませんでした。

昔は、斯うして、夜な〳〵、外を歩いて、血を吸はないと生きてゐられない氣持でしたが

白骨の湯壺が、しばらくの間、この毒龍を封じ込んでゐたものでせう、それが飛驒の高山へ來て、今晩といふ今晩、その封が切れたやうです。

黑い頭巾と、白い着物と、二本の刀が閃にさゝれたのが、すつく〳〵と川原を歩んで行きさうして水溜りとか、蛇籠とかいふやうなもの〻障りへ來ると、ちよつと足を踏み止めて、思案の體に見えるが、間もなく、五體が魚鱗のやうに閃いたかと見ると、いつの間にか、その障碍を越えて、あなたを、すつく〳〵歩んでゐる。

凡そ物體が動き出したといふことは、生きてゐることの表現であつて、同時に生きようとする努力であると見ればよろしい。

生きようとする努力は即ち、飢渴といふものに餘儀なくされてゐると見ればよろしい、人間にあつてもさうです、人間が動き出した時は大抵、飢えた時、さうで無ければ何處ぞに空虛を感じた時の外は無いと見てもよろしい。

そこで、滿足した人は大抵沈默する、充實した處には痕跡といふものが無いのを例とする人が動いてゐる時と、騷いでゐる時は、人間がその最も弱點を暴露した時なんだが、人間は却つて、充實と沈默を怖れないで、活動と噪狂、宣傳とカモフラージュとに惘喝される、

笑止！

お化だつてさうである、出て來た時はすでに人間に未練といふ弱身があつて來るのだから、ベルゼブルだつてさうです。人間に取りつくのは、自分の腹が透いてゐるからなのである。

若い男は若い女の情に飢えてゐるから夜遊びをする、若い女はまたそれを待ち構へて、その飢えに食ませたり食んだりする——ついでに云つて置くが、戀といふものに限つて、食へば食ふほど飢えを感ずるもので、戀の飽食といふことは、結局尻尾だけを殘して食ひ合ふ猫のやうなものです、人はパンのみにて生くるものではない、戀も食ひ物である、愛も食ひ者である、イサカサも食ひ物であり、ペランも食ひ物である、動物の中には夢をさへ食ひ物にして生きてゐるものがあるといふではないか。

今、東經百三十七度十六分、北緯三十六度九分の處、海拔五百六十二メートル八八のあたりを音無の怪物が動き出したといふ事も、つまりは飢渴を感じ出したからです、飢渴と云はなければ、空虛と云つてもよろしい。

つまり、その食物を求めんがため、食物で悪ければ充塡物を、さがし求めんが爲に、ふら〳〵と歩き出したのだが、こゝは果して甲府の城下ではない、また大江戸の市中ではない、城氣の疾に失せてゐた飛騨の高山の事ではあり、この高山も目ぬきの大半を祝融氏の餌食にゝへてゐるのだから、此の怪物に餘された獲物といふのは、どんなものか知ら？

三十六

有る〳〵

尾花だの萱だのの中に竹煮草とか、ごまめ菊とか云つたやうな雜草がすがれてゐる、一口に云へば蘆葦茅草の中の川原の石の磊塊たる處に、置き捨てられたまだ新らしい白木の長い箱が一つある。

これは昨晩、お雪ちやんをおびやかした白木の寢棺です、あの娘は一目見たきりで、おびえて逃げたけれども、この怪物に取つては、これも亦餌食にはなるらしい、惜しいことにこの幽靈は、足許は暗かだが、眼が利かないから、眼前に横はる好下物を、氣取つた事は氣取つたが、そのものゝ質を知ることは出來ないのです。

白木の寢棺を距ること、略ぼ一間の處で、立ち留まつて、うかゞつてゐるのは、その寢息を見るもののやうです、宮本無三四は、佐々木巖柳を打ち倒しても、まだその生死のほどの見極めるまでは近寄ることをしなかつた、それは無三四に限つたことではない。ワナを上手に外す動物は、どんな好餌があつてもさうガツ〳〵と一圖には近寄ることをしないものです。

こゝに、俄然、一つの食べ物を感得したからといつて、一概に貪りかかることをしないのは、武術の達人の殘心のうちの一つと稱すべく、智慮ある動物の陷穽を避ける心がけと云つてもよい、それ〳〵、果して、この寢棺の一端が動き出したではないか。

寢棺が動き出すといふことが、もう只事ではない。

こつちがその心で、ぢつと氣合を伏せて見まもつてゐたものだから、先方も、もう我慢がしきれなくなつて、化の皮を現はしてしまつたのだ、死人を入れることにのみ專用するものと見せた寢棺が生きて動き出した。斯う云ふことがあるから、人を殺せば、血を見なけ

ればならないといふのだ。敵に斬られることよりか、斬つて止めを刺すことを忘れた武士の方がうろたへ者と云はれる。

果然！寢棺の一端が動き出して、死人が物を云ひました。

「御免下さいやす、つひ、ほんの出來心でおましてな、惡い氣でやつたんぢやございませんのや、寒いもんでおますで、女房や子のやつが寒がつておますやでな」

死人が斯う云つて物を言ひ出したのみならず、ベタリと、石川原の上へ、へばりついてしまつて、大地に兩手をついて、額を其間に埋めて、ベルゼブルにおわびをするのです。いやまだどつちがベルゼブルだかわからない。

龍之助は、そのお禮の言葉を充分に聞き分けてしまひました。

「何をしてゐるのだ」

「どうも、惡い氣で致したのやおまへん、燒け出されでおましてな、女房子が寒がるもんやで……つひ」

「つひ、そこで何をしてゐたのだ」

「はい……これを一枚だけ、ちよつとほんの一晩のうちお借り申したい事やと存じましてな」

訊問する者も、訊問される者も、わからない。

「では、御免下されましてな……」

ベタ〳〵と碎けてしまつた腰を立てながら、後退つて逃げてしまつた男の形が眼に見るやうです。

それを逃がし[illegible]は字、そのあとで龍之助が、歩みよつてそこに感得した何者かの物體を撫で廻して見ると、それは動かない長い箱でした、つまり、撫で〻見てはじめて長い箱の存在を知つたので、最初、立ち止つたのは、此處に白木の長い箱が存在することを怪しんで、さうして、不審とながめてゐる間に死人が動き出したといふ順序ではなかつたのです。

撫で〻見て、はじめて、可なりに長い箱だと感觸したが、それが白木であつて、手障りからすれば、當然寢棺と氣のつくまでに、龍之助の手先きに觸れたのは、その寢棺の上にふわりと打ちかけてあつた、一重ねの衣類でした。

龍之助は、その長い箱が白木であるか、塗物であるか、寢棺であつたか、長持であつたかまだわからない、その上に乘せられた一重ねの著物のみが手にさわると、

「はゝあ、これを盗みに來たのだな、今の奴は、これを盗まうとして此方の姿に驚かされたのだ」

とおもひました。

三十七

例の、この長方形の存在物が、人間といふものゝ最後のぬけ殼を入れた器物の一つであつたことを覺つたのは長い後の事ではありませんでした。

それをまだ地中にも葬らず、火中にも置かず川原の眞中へ抛り出してあるのだ、生きてゐないといふまでのことで、まだ煮ても燒いても無いのですから、宜しかつたらこのまゝ召し上がつて下さいと云はぬばかり。

だが、死肉は食へまい、如何に飢えたりとも、天が特に爪牙を授けて、生けるものゝ血肉を思ひのままに裂けとと申し含めてある動物に向つて、棺肉の冷へたのを食へよといふのは、重大なる侮辱である。

カタ〳〵と輕くゆるがして見たゞけで、此の動物は、遂にその中の餌食に向つては、指をさして見ることをも恥辱とするものゝやうです、だが、カタ〳〵と輕くゆすつて見た瞬間に、釘目を合せて置かなかつた、この棺と稱する人間の死肉の貯藏所の蓋が二三寸開いてしまひました、二三寸開いた處から、意地惡く、その髮の毛のほつれと、冷え固まつた面の白色がハミ出して見えたやうです、朧のやうな夜光で、見やうによつては、棺の内で貯藏された死面が笑ひかけたやうです。

處が、折角、死肉が笑ひ出しても、こちらの怪物は、それに調子を合せるだけの愛嬌を持ち合せて居りませんでした、それのみならず、その笑ひかけたのを、淺ましがつておつかぶせてやるだけの慈悲心も持ち合せてゐないやうでした。

ですから、斯うまでして、死人がわざ〳〵愛嬌を見せても、この怪物に對しては、全く糠に釘のやうなもので、お化が却つてテレきつてしまうのです。

三分五厘子は吾人に教へて云ふ。

ある處に、一人ののら息子があつて、親爺も持て餘したが、望み通りの美しい嫁さんを貰つてやつたら、ばつたり放蕩がやんで、嫁さんばつかりを可愛がつてゐる、嫁さんも美しくもあり情愛もあつて、若夫婦極めて圓滿なのは結構至極だが、たゞ一つ解せない事は、この花嫁さんが、毎夜々々、夜更けになると、婿さんの寢息をうかゞつては、そつと拔け出して何れへか消え失せる、その樣、丁度、三つ違ひの兄さんの女房のするのと同じやうなことをする、嫉けてたまらない婿さんが、或るそのあとを尾行して行つて見ると、寺の墓地へ行つた、有らうことか、その花嫁は墓地へ行つて、新佛の穴を發き、その中の棺の蓋を取り、死人の冷えた肉と骨とを取り出して、ボリ〳〵食つてゐる、餘りのことに仰天して氣絕したお婿さんを、その花嫁さんが呼び生かして云ふことには、

「お前さんは、死人の肉を食べたわたしを怖いと思ひますか、わたしの方では生きたお父さんの脛をかぢるお前さんの方がよつぽど怖い！」

事實、死んだものや、化けたものはそんなに怖い筈はないのです。

今し、棺の蓋を折角細目に明けて、さうして死肉の主が、お愛相に、にこりと笑ひかけたのだから、本當にこちらも調子を合せてやればいゝのに、

「おや〳〵、おばさんかね、久し振りだつたねえ、あれから、どうしたんだえ、一體、お前は白骨の無名沼の中へ沈められてゐた筈ぢやないか、そんならさうで、無事におとなしくあの沼に沈著してゐればいゝのに、何だつてこんな處まで出て來て、因果とまたあの火にまで燒かれ損なつたのだね、水にも嫌はれ、火にもイヤがられ、ほんとに、お前さんといふおばさんも因果の盡きないおばさんだねえ」

とでも云つてやれば、折角笑ひかけた棺の中の死肉の主も亦引込みがついたかも知れないのに……

それに對して、こんな無愛想であるのに、別の因緣になつてゐる棺の上の一重ねの著物だけには、どうやら執著があるらしいのが淺ましいではないか。

斯うして、音無の怪物は死肉には爪牙を觸るゝことなく、そのまゝずつと進んで行きました。

進み行くところは、宮川の川原を縱に上るのですから、盡くる處は無い筈だが、行きとまる處はある、例の蘆葦茅草の合間々々に、水たまりがあり、蛇籠があり、石ころがあつてどうしても進み難い處がある、そこは強いては突破しないで廻り道をする、飛び越し得ると推想される處は飛び越して行く、相當に進んで行つたが更に別條はありません。

川原の中だから人通りはなく、最前のやうな人間の死肉が放り出されてゐるといふやうなことは、極めて稀有の事で、この宮川が神通川となつて海に注ぐまでの間にも、二度と出くわすべき性質のものではありません。

併し、小さいながら川流が二筋に分れて、どうしてもそれよりは進めない處に來ました。

進めないわけではないが、進むには川越をしなければならぬ、たゞ、この場合、衣裳をからげて川越をしてまで前進すべきや否やが疑問なのです。果して、その必要が無いから後戻りをはじめました。

蘆葦茅草が離々とした石野原——行手でバサ〳〵と音がする。

無事單調を破るものとしての唯一の物音、それを聞かんが爲に立ちどまりました。

こゝに、ちよつと注意しなければならぬことは、今迄氣がつかなかつたが、龍之助はその左の小腋に物を抱へ込んでゐることです、それは他のものではない、一箇の箇物を長たらしく小腋にかい込んでゐるのです、はゝあ、この男は、あの死肉の上の箇物を取つて來たのだな、察するに、たゞ、無意識に、ひよつと手が觸れたまゝに引抱へた手ずさみだ、笠と杖とを持たない代りのあしらひに過ぎまい。

面前で起つたバサ〳〵といふ音は、いよ〳〵劇しくなつて、次で、キャッ〳〵と名狀すべからざる悲鳴が起り、龍之助の脚下で風雲が捲き起つてゐるにはゐるが、それは見えない人の爲に、代つて少し說明すると、貉がワナにかゝつたゞけのものです、後ろ足の一つをワナに挾まれた貉が必死の悲鳴と全身の努力を以てそれを脫せんと悶えてゐる處です。さうすると、やゝ暫くあつて、他の一方の蘆葦茅草の中から、むづ〳〵と出て來たものがある、それが同じく貉の一つで、前の貉は一足をワナにはさまれてゐる、後の貉は、どこも

はさまれてはゐないが、見捨てられない愛着に繋がれてゐるらしい。多分一方が雌で一方が雄なのだらう。

人の足音によつて、一旦、離れたが、その足音が止んだらまた出て來て、はさまれないのがはさまれたのを救濟に取りかゝつてゐるのだ。併し、この救濟は、徒らにうろ〳〵するだけで、ワナにかゝつた一方の貉の煩悶を救ふ事も、束縛を解放してやることも出來ないのです——二つ相抱いて周章狼狽展轉反側してゐる。

やがて、一層怖ろしい悲鳴と絶叫との後に、たうとう一方が一方を解放して、さうして二匹相つれて一目散に逃げ出したことです。

さては、ワナが破れた、假りにも人間の手を經て作られたワナは、さる小動物の蠢動によつて、さ樣に容易く改變さるべきものではないのに、二つ共 完全に逃け了せたのは見えない眼前の事實。

だが、完全に——と見たのはウソで、ワナの一方には、一つの小動物の足だけが殘つてゐる、これによつて見ると、一方が一方の足を喰ひ切つて、さうして連れて逃げたのだ。

逃げて、さうして、一目散に蘆葦茅草を飛び切つて水邊の大樹の上に身をかくしてしまつた！ 動物學者は貉と狸とは同じものだといふが、傳説の觀念はさうは教へない、少くとも貉は木に登るが狸は木にのぼらない、狸は腹皺を打つが貉にはさる風流氣はない。

脚下の風雲といふのはたゞそれだけの事でした。

三十九

それから、また暫らくあつて、例の一重ねの衣類を小脇にしたまゝ、屋形船に歸る處の机龍之助を見ました。

その翌朝、お雪ちやんは恥かしい程朝寢をしてしまひました。眼がさめて見ると、龍之助は宵のほどゝ同じこと、自分とは、T字形に横になつてゐるのに氣がついたが、久助さんの姿は見えません。

久助さんは、もう起きてしまつたのだ、昨夜のつもりでは、こんなに落付いて朝寢の出來る筈ではなかつたのに、疲れてゐたとはいへ、どうも自分は暢氣な性質に生れ過ぎてゐる

のかも知れないと考へ、あはたゞしく起き直つて見たけれど、船の外にも久助さんの姿は見えません、わたしに氣のつかないやうに、もう出かけてしまつたのだ、出かけるといつた處で、何處へ行きやうがあるものですか、さし當つての今日の活計の爲に、あのお救ひ米だとか施行小屋だとかいふ處へ行つたのでせう——全くそれは久助さんの事だけではない自分の眼の前の朝の生命の糧が差迫つてゐる場合、お雪ちやんは、寢過ごしたことを恥かしくも思ひ、これから生活の爲に眞劍にならねばならぬと、身をハネ起して見ました。起きて見たけれども、洗ふが如くといふよりは、本來、洗はれてしまつてゐる著の身、著のまゝの我、どうにも斯うにも仕樣が無いその壓迫に打たれてしまひます。

でも、斯うしてはゐられない、その壓迫をハネ返しでもするやうにお雪ちやんが起き上つた途端に、自分の膝の下に落ちた著物が、あんまり重過ぎる事に氣を取られずには居りません。

「おや」

いつの間に、誰れがこんな著物を持つて來てわたしに著せて呉れたのかしら、昨夜、さう

だ、久助さんが、施しでもらつて來たのを、わたしが寢てゐる間に、そつと著せてくれたものに違ひない。

さう〳〵昨晩よく眠れたのは、一つはこのせいでせう、こんな一重ねの著物を、わたしの寢てゐる間に著せかけて呉れたから、そのお蔭でわたしは、恥かしいほどよく寢入つてしまつたのだ、これでも無からうものなら、夜半の薄著に寒さが身にしみて、いくら疲れたからといつて、こんな際に、こんなによく寢られるものですか、本當に有難い、久助さんの親切が有難い、それなのに、こんな親切な人を置いてけぼりにしやうとか、蒔いてしまはうとか、考へた自分といふものゝ薄情さをお雪ちやんはクドいほど悔む氣になつてしまひました。さうして、この情けの籠る一重ねの著物を見てゐるうちに、これが羽織もそつくりした小紋縮緬の一重ねであることが大變な氣がかりになりました。いくら非常の場合にでも救助の爲に投げ出すにしては、これはあんまり過ぎものだと感じないわけには行きません、大抵の場合、斯う云ふ時に施しに出すのは、著古したものか、洗ひざらしとかいふ種類に定まつてゐるのに、こんな結構な著物を、羽織から揃へて一重ねも投げ出さうと

いふのは、少し氣前がよ過ぎてはゐないかと、お雪ちやんが、そこへ氣を取られたものですから、一旦、起き直つたのを座り直して、右の一重ねの衣類を手に取つて、つく〴〵と見たものです——つく〴〵と見てゐるうちにお雪ちやんの唇の色が變りました。

「先生」

あはたゞしく、寢てゐる、龍之助を呼びかけたものです。

「何です」

「あゝ、怖い、ちよつと起きて下さい、あなたに見ていたゞかなければならないものがあります……といつてあなたはお見えになりますまいが、この重ねの小紋縮緬の著物をごらん下さい、これはまあ、あのイヤなおばさんの著物に違ひありません、違ひません〳〵、わたしがたしかに見た通りの品です、それが、こゝに來て居りますよ、どうして、誰れがこの著物を……」

著物が蛇にでもなつたやうに投げ出しました。

四十

「お雪ちやん、著物がどうしたといふのだ」

「先生、これが驚かずにゐられませうか、昨夜、久助さんが、わたしの上へかけてくれたこの一重ねの著物、これは何だと思召す」

「何だか、わしが知つてゐやう筈はあるまい」

「さうです、誰だつて知つてゐる筈はありません、このお召の一重ねは、これは、たしかに、あのイヤなおばさんの著てゐた著物でございますよ」

「え」

「久助さん、どうして、どこからこんな物を持ち込んだのでせう」

「知らない」

「廻り合せにしても、あんまりぢやありませんか、いけません、先生、あなたが惡いのぢやありませんか」

「どうして」
「だつて、昨晩、イヤなおばさんの魂魄が、そつと外から忍んで來て、この船をゆすぶつたなんておつしやるものだから、それで、魂魄が、こんな著物をこの船へ持ち込んだんぢやないか知ら」
「ふゝん、魂魄なんてものは、そんなに都合よく物を運べるものぢやあるまい」
「だつて、さうとしか考へられませんわ、平湯へ來てからこつち、本當に、あのイヤなおばさんにつき纏はされるやうでたまりません——白骨から、わたし達の後になり先きになつて、あのおばさんの魂魄がついてゐるに違ひありません」
「本當にその著物が、あの淫亂後家の著物であつたとしたら、全く不思議な廻り合せだ、魂魄の引き合せと云ふより外はあるまい」
「それは間違ひありません、先生にはお見えにならないから議論にはなりませんが、この一重ねは、あのおばさんが白骨で、わたしに自慢で見せたものです、あのおばさんのことだから年にしては隨分派手過ぎますのを、お雪ちやんあなたに讓りませうか、そのうち、

高山から著替が屆くから、そしたら、これをあなたにあげるから、仕立直してお召しなさいなんて、おばさんが云ひながら自慢に著出したのを覺えてゐます。あなた、まあ、ごらんなさい、この通り」
「驚くべきめぐり合せだな」
「全く驚いてしまひます、久助さんが歸つたら、早速聞いて見なければなりません、この著物を何處でどうして手に入れたか、それをよく問ひたゞして見ませう」
「久助さんには、そんな事はわかるまい」
「久助さんに分らないにしても、これを久助さんに渡した人からたづねて見ればわかる筈です、わからせずには置きません」
「わからせて、どうするね」
「どうするのだといつて、先生、こんなものが身につけて居られますか」
「といつて、本人に返してやるわけにも行くまい」
「それはさうですけれど……、あんまり因緣も過ぎますからね、何とかしなければ、あの

おばさんの恨みが、どこまでついて廻るか知れません」
「恨みが消えないのだ」
「いゝえ、わたしはあのおばさんに恨まれるやうな事は決してしては居りません、もし、わたし達について廻つてゐるとすれば、あのイヤなおばさんは、死際に、何かわたし達に思ひ殘すことがあつて、それを云ひたいが爲に附いて廻るのかもしれません」
「そんな事かも知れぬ」
「さうだとすれば……、わたし變な氣になつてしまひます、イヤなおばさんはイヤなおばさんに違ひないけれど、わたしに對して何もイヤな事をしたわけぢやなし、わたしを贔負にして隨分可愛がつてくれたおばさんなのではなかつたか知ら……」

四十一

お雪ちやんは、こゝで何だか今までの無氣味な、陰慘な氣分が、どうやら哀れみの心に變つて行くやうに自分ながら氣が引けてならなくなりました。

「あのおばさん、決して惡い人ぢやないわ、わたしには惡い人とは思はれない」
「好きな人かな、あれが」
「好きとはいへないけれど、人がイヤなおばさん、イヤなおばさんといふほど、惡い人ぢやないと思はれて仕方がありません」
「それでも、お雪ちやん、お前は今まで、やつぱりイヤなおばさんで通して來て、その證を持ち出されてさへ逃げたではないか」
「皆さんが、イヤなおばさん、イヤなおばさんといふから、それでわたしもイヤなおばさんにしてしまつたのではないか知ら、一體、あのおばさんの何處がイヤなおばさんなのでせう」
「うむ——何處といつて聞かれてはわしにもわからないがね、いゝ年をして、若い男を可愛がるなんぞは、隨分イヤなおばさんの方ぢやないか」
「淺吉さんの事ですね……ですけれどもね、年上の女の人が若い男を可愛がるのはいけない事か知ら、いゝえ、それはいゝことぢやないに定まつてゐるが、淺吉さんの方にもイク

ない處があると思ふわ」
「どつちにしても、いゝ年をした亭主持――ではない、後家さんが、若いのをつれて溫泉に入りぴたつて巫山戲きつてゐることは、人の目にいゝ感じを與へはしまい」
「それはさうですけれど……世間に類のないことぢやなし、體裁のいゝことぢやありませんけれど、殺してやる程憎い事ぢやありませんね」
「さうか知ら」
「ですから、不思議なのね、蔭では皆んなイヤなおばさん、イヤなおばさんと云ひながら表では皆んな追從して、あのおばさんを座持に立てゝしまつて、あのおばさんの命令が夏中の白骨の溫泉一ばいに行はれたぢやありませんか、たゞイヤなおばさんだけなら、たとへ表面のお追從にしろ、人があんなに從ふ筈がありません、やつぱりあのおばさんはあれで、あの人だけの人德を持つてゐたのぢやないか知ら」
「さうか知らん」
「わたしに向つても、隨分親切でした、イヤなおばさんだから、そのつもりでゐなくちやいけないと思ひながら、わたしは、つい〳〵あのおばさんの親切にほだされてしまつてゐたんですね」
「結局、お雪ちやんの爲には、イヤなおばさんではなく、好きなおばさんだつたのか」
「好き……好きとは云へませんけれど、イヤがる理由が無くなつてしまひます」
「では、やつぱり好きなおばさんなのだ、その好きなおばさんであればこそ、白骨から此方へ來る間、お雪ちやんについて廻り、昨夜も、お雪ちやんが寒からうと心配して、わざ〳〵その約束の著物を持つて來てくれたのかもしれない」
「隨分氣味が惡いけれども、さう取れば取れないことはありませんのね、あのおばさんの魂魄が、わたし達を恨んでぢやなく、わたし達を懷かしがつてあとをつけるのなら、この著物も全く可哀相な因緣だと思ひますワ、そんなに忌がることはありませんねえ」
「そんなら、その著物はお雪ちやんへの授かり物だから、遠慮なく身につけてゐるのが、却て回向といふものかも知れないぜ」
「それでも、わたしは、これを身につけてゐる氣にはなれません、見ると、あの時の事が

思ひ出されて、おばさんが可哀相でなりませんもの」
「仕たいざんまいをして死んだのだから、可哀相なこともあるまい」
「何してもいゝ、わたしはこの著物を燒いてしまつて、おばさんの思ひが殘らないやうに
——お經をあげてあげませう」

四十二

お雪ちやんは、その著物を抱えて外へ出ましたが、土手下の枯芒の、こんもりした中へ、その著物を置くと、自分はひとりふら〳〵と川原の方へ出てしまつて、川原の中を屈んだり伸びたりして、さまよひながら、胸にだん〳〵嵩の增して行くのは、燃料となるべき薪を集めて歩いてゐるのに違ひありません、薪を集めつゝ、河原を進みゆくうちに、採集の興味が知らず〳〵お雪ちやんを導いて、中洲を越えたり、水たまりを飛んだりして、川原の中へと深入りをしてしまひました。
深入りをしてしまつたと云つた處が、本來、幅員の知れた宮川の川原のことですから、深

山大澤に迷ひ行つたのとは違ひ、深く進んだと思ふのが、實は行きつ戻りつしてゐることに過ぎない。
さうして、蘆葦茅草が枯れ〳〵に叢をなしてゐる處、それが全く斷れて石ころの堆い處、その間を、茸狩か汐干狩でもするやうな氣分で、うか〳〵と屈伸しながら歩んで行くと、當然、到著すべき一つの地點に達して、そこで初めてお雪ちやんが、あまりの事にまた驚愕狼狽しなければならぬことになりました、その、ある地點……それは、お雪ちやんが今まで全く忘れてゐた處のものでありました、前の晩に、此の川原を當途もなく歩いて、さうしてこの蘆葦茅草の中に、ふと白い長い箱のやうなものを見出して不審がり、近づいて見ると、それが不吉にも、人間のぬけ殼を藏ふた棺であることを知り、とても忌な思ひをして、あはてゝ逃げて歸つたことのある、そのものが現に、まだ此處に置き放してあるではないか。
何といふ冥利を知らぬ人達だらう、あの時は火事場騷ぎだから、こゝまで持つて來て置くのも已むを得ないが、今となつて、まだ放りぱなしにして置くとは。

お雪ちやんが、それを、もう少し早く氣がついたならば、單にこの白いものがまだ動かされないので置かれてあることだけを知つたならば、一目見たゞけでこの場へ來るのを忌やがつて、前の時のやうに眼をふさいで逃げて行つてしまつて、いやな感情は消えないまでも、後の問題は殘さなかつたでせうに——それは、接近するつもりなくして接近し過ぎてゐました。その接近があまり急激に來たものですから、接近した時はもう退引(のつぴき)することが出來ません、見まいとしても、その全體を見なければならない處まで來てしまつてゐた。それが爲に、見てはならないものを見せられてしまひました。特に、最も惡い處の部面がお雪ちやんに見せる爲にのみ、展開されてゞも置かれたやうなものを、遠慮も割引もなくそのまゝ、忌應なしに見せられてしまつたのは、子供が不意に後ろから居合拔きに抱込(かゝへ)まれて奥齒を拔かれてしまつて泣くに泣けないやうな有樣です。

あの時までは、棺も外面だけでしたが、この時誰れがしたか、その覆ひが取り拂はれてさうして、蓋がコヂ明けてある、コヂ明けた隙間が一メートルばかりの長方三角形に開いて、さうしてそこから中がガランと口を開いてゐる處を忌應なしにお雪ちやんが見せられてしまつたから、もう、避けやうとしても避けられないのです、面をそむけても遲いのです。

却て、その棺の蓋の隙間に引入れられて、怖いものを飽くまで見なければ、動けない作用に引かゝつてしまひました。

その寢棺の蓋をコヂ明けたところから、半面を現してゐる、棺の主の面。

それをお雪ちやんは一目だけで逃げることを許されないで、後ろに强力のものがあつて、その頭をグンと押え、さうして、

「もつと見ろ、もつとよく見ろ、間違へないやうに見屆けろ」

とギウ〳〵押しつけられてゐるやうな見えない力を如何ともすることが出來ません。

「あ、イヤなおばさん——」

もう泣くにも泣けない、叫ぶにも叫べない、棺の中からこちらを見てゐる人は、今も問題のイヤなおばさんです。

四十三

不思議な壓力で、それを充分に見屆けさせられて、お雪ちやんは、その壓力が解けたと見た時分に、自分の周圍を襲ひかゝる、またも不思議な有形動物の形に驚かされました。

「叱！　叱！」

それは思ひがけないことでしたけれども、有り得ない動物ではありません。

このあたりに彷徨する野良犬が五六頭、雨降りの時候でもあるまいに、まつしぐらにくつわを並べて、この處まで飛んで來て息をフウ〳〵吹きながら、棺の廻りに走せつけ、飛びついたり、刎ねかゝつたり、臭氣をかいだり、上へ乘つたり、下をくゞつたりして、この寢棺を取り卷くのでした。

「叱！　叱！」

お雪ちやんは、この時、自分ながらわからない一種の勇氣が出て、有り合せた薪の太いのを持つて、群がる野良犬に向ひました。

お雪ちやんの、竹の棒の音に驚かされた野良犬は、それに一應の挨拶でもするやうに一應は飛び退くけれども、忽ち盛り返して以前のやうに棺に向つて飛びつき、狂ひつき、或は蓋の外れを齒であしらつて向ふへ突きやり、その有樣はどうしても屈竟の獲物——御參なれ、我れ勝ちにといふ淺間しさの外にはありません。

お雪ちやんはあしらひ兼ねました、全くこの犬共はお雪ちやんの手には餘るのです。

でも、犬共は、人間に對する敬意を以て、お雪ちやんの小腕ながら、その振り上げた杖には一應の遠慮をするだけはしますが、その影がこちらへ動けば、もう犬共は引ついて來ます、お雪ちやんの振り上げる杖の瞬間だけに敬意を拂つて、それが戻ると直ぐに附入つてしまひます。

「叱！　叱！」

お雪ちやんをして、もう自分の力ではおへないと覺らしめて置いて、そのうちの最も獰猛なのが、その策杖の二つ三つを覺悟の前で、兩足を棺の側へかけて、鼻と口を、棺の中へ突込んでしまつて、後ろに振動した尾をキリ〳〵と宙天へ捲き上げてのしかゝつてゐます。

「おや、こりや犬ぢややない、山犬ぢないか知ら、狼ぢやないか」

お雪ちやんが、その一頭の獰猛と貪婪ぶりに身の毛を立て、斯う思つてたぢろいだのも無理はない形相でしたが、事實は、やつぱり野良犬の一種で、狼や山犬に屬するものではなかつたやうです、たゞ、飢から來る處の不良性が、極度に、この動物を獰猛と貧婪と殘忍の色にして見せたものでした、いかに、本來溫良なる家畜動物も、飢と放縱とに放し飼をすれば、それは猛獸以上の猛惡を現すことはあります。

それと同じことに、如何に溫和なる人間も、非常の時には、さうして、人間の權威を他動物に向つて示さねばならない時は、別人と見える程の勇氣を、どこからか持ち來すものと見えて、苟くも人間の死體の神聖を冒瀆せんとする不良性動物の潛越と兇暴とに對し、かよわいお雪ちやんが、その全力を擧げて擁護の任に當らなければならない覺悟と力とを與へられたことは案外のものでした。

お雪ちやんは、片腕にかゝえてゐた薪を振り捨て、片手に持つてゐた杖に全力をこめて、僅かに棺の中へ首を突込んだ山犬に似た奴を思ひきり打ちのめして、さすがに驚いてハネ返つた處を、手早く棺の蓋を仕直して、しつかりと押え、さうして、早くもその手近にあつた手頃の石——手頃の石と云つても、ふだんのお雪ちやんならば、ほとんど持ち上げることもむづかしからうと思はれる程の大きさと重さとあるのを兩手にウンと持ちあげて、それを今、蓋を仕直した處へ重しにドッカと乘せてしまひました。

この間の働きは、お雪ちやんとしては見られない程の早業と力量とを持つてましたが、それをするともう大丈夫と思つたのか、下へ投げ捨てた薪を又も小脇にかいこむと共に走り出しました。

後をも見ずに走りました。

四十四

さうして、お雪ちやんは、屋方船の處まで歸つて來たのですが、その時は、もう口が利けませんでした。

船べりに取りついて、はあ〳〵と劇しい息をついてゐるだけです。もしこの時に別の事情

が無かつたならば、お雪ちやんは一時その場で昏倒してしまつたかも知れません、また、もし船の中へ走り込む元氣があつたならば、いきなり、龍之助の膝にしがみついて、うらみつらみを並べたかも知れません。

そのいづれでも無かつたのは、丁度この際、船の向ふ側の一方で、久助さんの聲を聞いたからです、しかもその久助さんが何かその向ふを通行の人と、可なり高聲で會話をしてゐたのが、お雪ちやんの耳に入つたものだから、この危急の際に、辛くも踏み止まつて、多少の遠慮の心を起したのが、つまりお雪ちやんをして氣絶もさせない、逆上もさせなかつた一つの事情でありました。

それで、はあ〳〵と嵐のやうな息をついて、屋形船の一方の柱に取りついて、お雪ちやがためらつてゐると、それとは知らぬ、土手の往來に面した一方の片側で、久助さんと堤上を通る旅人との問答、

「存じません」

これは久助さんの返事、

「知らない、では古川を經て越中の富山へ出る道はドレだ」

「えゝ、それも存じませんでございます、何しろ……」

「それも知らないのか、三日町から八幡の方へ行くのはどうだ」

「お氣の毒でございますが、何しろ、昨日今日……」

「やつぱり知らないと申すか、然らば、船津へ出る道、その位は知つてゐるだらう」

「それもその……」

「それも知らんのか、では、一たいこの宮川といふ川は越中へ行くのか加賀へ向ふのか、結局何處へ落ちるのだ」

「え、その邊も……」

「加賀の白山、白川道は知つてるだらう」

「それも、その」

土手で横柄にたづねるのは、この邊の百姓町人の類でないことは判つてゐるが、人もあらに久助さんに土地案内を聞くとは間違つてゐる、まして燒け出されの西も東ももうげんじ

てゐる際の久助さんをつかまへて、あんな手嚴しい尋ね方をする方が間違つてゐる、けれども、久助さんも久助さんだ、知らない知らないとばかり云はず、もう少しテキバキした返事の仕樣もありさうなものと、少し息が靜まるにつれて、お雪ちやんは久助さんの返答ぶりを齒痒いものに思ひました。

こちらに聞いてゐるお雪ちやんが齒痒く思ふ位だから、尋ねてゐる先方の横柄な旅人は、もつと業が煮えたらしく、

「何を聞いても知らぬ知らぬといふ、役に立たず奴が……引込んで居れ、時に丸山氏、いづれ此の宮川べりを傳ふて行けば出る處へ出るだらう、出た處勝負としやうかなあ」

「それ宜しからう」

斯う云つて、土手をさつさと歩み去つてしまう旅人はたしか二人連れのやうです。

お雪ちやんは、見るともなしに、脊伸びをして見たら、今、船の蔭を外れて、土手の上をあちらに向つて歩み去る二人の旅人。

それには、たしかに見覺えがあります。いのちが原で、わたし達の一行にからみついて、あの、すさまじい光景を捲き起した浪人達、ついこの間は、不意に白骨の溫泉へやつて來て、宿にわだかまり、あの前の方へ進んで行く大きい方の人が、わたしの眼を後ろから押へて、どうしても放して吳れなかつた氣味の惡い人、その癖、嚴のやうに節くれ立つた手が、氷のやうに冷たかつたのを覺えてゐる、あの人達に相違ない。

その名は佛頂寺彌助と、もう一人は丸山勇仙、肩で風を切つて堤を歩いて行くが、こちらから見ると足許がフラ〳〵して、まるで足が無くつて歩いてゐるやうです。

四十五

お雪ちやんは、やつと船の中へ轉がり込んで、もう起き上がることが出來ません。

頭が火のやうで、眼が車のやうに廻るのです、それをぢつと抑えて、何も云はずに、たゞ伏しまろんでしまひました。

現在、そこにゐる龍之助に向つて、思ふさまこの怖ろしい見聞をブチまけて見やうと意氣込んだのも、こゝで、その勇氣すら無くなつてしまひました、

見るべからざるものを二度まで見たのです、平湯峠の上で、戸板の覆ひが外れた時に見たのは慥かに、あのおばさんなら、たつた今、こゝで見た棺の中の死人も別の人であらう筈がない。

あの時、叫ばうとしたのを、ぢつとこらへて誰れにも云はなかつた位だから、こゝでも胸を抑えてしまつた方がいゝ、わたし一人が納めてゐさへすれば、このイヤな思ひを人にうつすことだけは免かれる。

本當に、魂魄があつて、わたし達について廻つてゐるとしか思はれないあのイヤなおばさん。

お雪ちやんは必死になつて、今、まざ〳〵見た、棺の蓋の外れのあのイヤなおばさんの死面のまぼろしを搔き消さう、搔き消さうとつとめたけれども、これはどうしても消すことが出來ません。

いつそ、先生に、洗ひざらひブチまけてしまへば、いくらか頭が休まるかと思ひましたがそれをこらへてゐればゐる程、イヤなおばさんの幻像が自分の息を詰まらせる程に壓迫して來るのをどうすることも出來ません。

横になつてしまつて、必死に息をころしながらお雪ちやんは黙くなりました。

「どうかしましたか、お雪ちやん」

久助さんが、輕く見舞の言葉をかけると、

「否え」

と打ち消して、わざと元氣に起き直つて見せましたけれども、その面の色つたらありません、幸にして久助だから、別段に面の色が惡いとも何とも怪しまなかつたので、これをしほに、無暗に働いて見せました。

さうして、その晩のうちに相應院へ引きうつるやうに一切の準備をとゝのへたけれども、お雪ちやんとしては何をどうしたか夢中でありました。

たゞ、あの雜草の中の存在物をば、一切思ふまい見まいとして急いだゞけのものでした。

引こしは夜でしたが、それが濟むと、たまらない思ひで、お雪ちやんは枕に就いてしまひましたが、その夢一ぱいに蟠つたイヤなおばさんの面影。

白骨の湯で、小紋縮緬を著た、あのイヤなおばさんが、だらしのない恰好をして寢そべつて、股もあらはにして、その投げ出した足を淺吉さんに揉ませてゐる、淺公は泣きながらそれを揉んでゐる、イヤなおばさんは、ニヤ〳〵と笑ひながら、何とも云へない色眼をつかひながら、誰れやらの膝にしなだれかゝつてゐる處をお雪ちやんが夢に見ました。

まあ、おばさん、何とだらしない恰好！　と見てゐると、そのおばさんのしなだれかゝつてゐる膝の主は横向きになつてゐる、わたしの先生――ぢやありませんか。

イヤな！　お雪ちやんは、名狀すべからざる不愉快で、その時ばかり、遮二無二、おばさんを引ぱつて、そのだらしのない恰好をやめさせようとしましたが、その途端のこと、イヤな色眼をつかつて、ニヤ〳〵してゐたおばさんの首の處から、一つの手が現はれて、それがグットおばさんの面から首を後ろから捲いてゐるのを見ました。

まあ、先生も先生――あんなイヤな眞似を……とお雪ちやんがいよ〳〵たまらない淺ましさで、見てゐられない氣になると、その後ろから廻つた手が、じんわりとおばさんの首を締めて行くのに氣がつきました。

ニヤ〳〵と笑つてゐたおばさんの顏の相が變る――と思ふと、其處が靑い沼で、その底知れない沼へ今のおばさんがまつさかさまに沈んで行くのを見て、お雪ちやんがあつ！と云ひました。

四十六

事實を人に語らない位ですから夢を語らう筈がありません。お雪ちやんは一切に目をつぶり、口をつぐんで、其の夜を明かしましたが、目がさめて見ると、何とはなしに上野原の自分の家へ歸つたやうな氣がしてなりません。

どの道、お寺のことですから、構造に共通したものゝあるのは當り前で、特にお雪ちやんが、上野原の自分の家によく似てゐた住居と感じたのは、旅に出てから、宿屋にばかり落ついて、旅籠氣分に慣れてゐたせゐでせう、斯うして見るとお雪ちやんはまた現前生活の人となりました。

久助さんが、專ら當座の衣食の爲に奔走してくれてゐる、宿屋の主人が旅中での災難を氣

の毒がつて、いろ〳〵世話をして呉れるけれども、何を云ふにも當人の家さへ丸焼けになつたのですから、細かい處の世話は焼けません。

お雪ちやんに、味噌漉を下げさせまいとして、給與の品や米を持つて來て、兎に角、當座に事を缺かないやうにする久助さんの骨折を見ると、お雪ちやんは、また〳〵この人を蒔いてしまはうとしたなくらのみの心を自分ながら悔います。

さうして、この寺で一夜が明けて朝になつて見ると、お雪ちやんは、いよ〳〵自分の故郷の寺の住居が、庭ごとそつくり此處へ移されたのではないか知らと疑つたほどよく似てゐると思ひました。

それが爲にお雪ちやんは懐かしい氣持から、何となしに落ついた氣分も出て、一時は、このお寺を永久の住居に借りてしまつたらとまで思ひ出した位でした。

だが、朝の食事のチグハグを見ると、もうそんな氣分ではゐられないと思ひました、いつまでも火事見舞の給與品に甘んじてゐる譯には行かないことを思ふと、一刻も早くこの急を救ふ道を考へねばなりません。

それは今に始まつたことではなく、初めから考へ續けてゐたのですが、どうしても「遠くの親類よりは近くの他人」となつて、その近くの他人のうち、まづ、こんなことを相談して見ようといふ相手は、白骨にゐた宿の人達、わけて、懇意にしてゐた北原さんに越したことはない、あの人に、手紙を書いて、久助さんに持つて行つて貰はう、白骨まで少し無理かも知れないが、あの人の足ならば一日で行ける——

お雪ちやんは、チグハグな朝飯を濟ますと、座敷の一隅の机の處に行つて、北原賢次への手紙を書きはじめたものです。

北原さん、白骨を立つ時はしみ〴〵御挨拶も申上げないで、ほんとに濟まないことだと有じて居ります、けれども、それにはそれだけの事情がありまして、病人やなんぞの好みもあるものですから、皆さんには御挨拶無しで出て參りました、定めて皆さんは、雪は夜逃げをしたとか、駈落をしたとか思つてゐらつしやるかも知れませんが、さういふわけではございません、あれから平湯へ出て、さうして高山へ著いたのですが、皆さんを出し抜いた罰かも知れません、此處へ來て火事に逢ひました、火事に逢つて何もかも

すつかり燒いて了ひまして、ほんとうに著のみ著のまゝです、旅の事ですから、外に相談する人は無し、こんな困つた事はありません。

お雪ちやんは、こゝまで筆を走らせて來たけれども、その次の文言につかへてしまひました、成程こゝまでは、事實をすんなりと直叙したのだから、スラ〳〵と書けましたが、これから、どう書いていゝのか、自分達の困つてゐることは事實だが、この困つてゐるのを北原さんにどう處分しろといふのか、それが書けないので、筆が澁つてゐるうちに、緣の障子の處へ鷄が上つて來たものですから、それを追ひ卸ろす爲と、澁つた頭を晴らす爲につと立つて障子を押し開いて見ました。

障子を開いて見ると意外にパッと開けた風景を見せられてしまひました。

四十七

おゝ、こゝからながめると、高山の町が一目に見渡せて、朝もやが渡つてゐる景色こそほんとに目がさめるやうです。

今朝ほどは少し霧がまいてゐたので凜冽が利引ぎうつるのを、ワザと夜にのぼして昨夜、かなかつた、それに萬事多忙で、風景に見惚れてゐる餘裕が無かつたものとも思はれますが、今となつて、はじめて、此の寺の見晴らしのよい事に感心させられてしまひました。故郷の月見寺も惡い處ではないが、山谷がこれよりはずつと迫つてゐて展望を妨げる。斯うして、見ると行き惱んだ筆の疲れを休めて目の下の風景を指呼して見たくなるらしくお雪ちやんは、見ゆる限りの處に於てあれかこれかと目移りがします。

燒け野ヶ原は、一層かつきりと、その半ば炭化しかけた、材木だの、建前だのが、燻ぶつてまだ臭ひと餘燼をくすぶらしてゐるのがよくわかる、それと、燒け殘りのある部分が、毛のくつついたやうに、ハッキリと見分けられる、人家の災難と無災難とに顯著なく、町を割つて流れる宮川の流れもよく見える——その宮川を標準として、燒け殘つた橋の形から見當をつけて行つて見ると、自分の泊つてゐた宿屋のあたりと、それから線を下へ引いて見ると、あの一むらの川沿ひの木立、その下が、假りの二夜の宿となつた屋形船のもやつてゐた處、成程、船もあの通り見えてゐる。

筆を半ばにして、お雪ちやんはその活きた地圖に線を引いてゐたが、昨日までもやつてゐた屋形船の處に至つて、發！と胸が早鐘をつくやうに鳴り出したのは、それと多くも隔らない處の川原の中の蘆葦茅草の中から、今しも盛んに火が燃え出した處です。

又しても火事！と災難の再來に狼狽したのではありません、その火と、火事の火とはおのづから性質の違ふこともわかつてゐるし、また、あんなに川原の中で火事を起す筈もなく起したからとて、前回のやうな危險をもたらすおそれはないが、その火の手の揚がつた地點から、今まで忘れるともなく、忘れてゐたやうな淺ましい光景が、むら〳〵と、あのゥの煙よりも濃くお雪ちやんの頭に湧き上つたからです。

あんな怖ろしいこと——あれが、ほんの少しの間だが、今まで忘れてゐたやうなのが不思議な位です、あれをあれつきりで納めて見向きもすまい、思ひ出しもすまいとの全努力が、漸くお雪ちやんを、こゝまでにしてゐたのが、あの燃え出した火と、それから煙がお雪ちやんの、頭をつむじのやうに旋廻させてしまひました。

あゝ、あゝして石を置いて、せめてもや狼の凌辱から救つて置きたい——イヤなおばさんの最後の肉體に對しての自分の爲し得た好意と親切の全力があれだけのものであつた、あれより以上には、何をしてあげる力も無かつたのだ、混亂の頭と、おのづから血走るやうな眼で、それを見詰めてゐたお雪ちやんは、結局、あの地點はあそこに相違ない、さうして今、火をあんなに盛んに燃やしはじめたのは、わかり切つてゐる、他へ運ぶことをしないで、あのまゝで薪を積んで、イヤなおばさんの死體を燒きはじめたのだ。

御覽！人が集つて來てゐる、薪を澤山に運んで足してゐる、イヤなおばさんはあゝして燒かれてゐる、白骨で長いこと水の中へ　けられてゐたイヤなおばさんの死體は今は思ふ存分の薪を加へられて燒かれてゐる。

せめて、今度こそは、思ひきり燒かれてしまつて下さい、おばさん、水にも火にも業の盡きなかつたおばさんの魂魄、今度こそは、あの鳥邊野の煙できれいな灰となつてしまつて下さい。南無阿彌陀佛——とお雪ちやんは合掌して念佛を申しました。

四十八

宿が特別の注意をもつて周旋して呉れたこの寺の書院住居は可なり廣い。

それから兎も角も北原さんへの手紙を書いてしまひ、久助さんを使に出してしまつて見ると尙更廣い。

この廣い座敷へ、今宵は相當に夜具も當てがはれて龍之助とお雪ちやんは別々に寢ました。

今夜はどんな夢を見せられるか知れないが、お雪ちやんはやつぱり氣苦勞と疲れがあるものですから、夜半近くにぐつすりと眠りに落ちました。お雪ちやんが、もう正體もなく眠りに落ちたと見た時分——それはどちらから云つても丑滿頃でせう、龍之助が靜かに起き上りました、さうして燈下で何か動いてゐるかと見ればそれは頭巾をかぶつてゐるのであつて、頭巾をかぶるまでには、もう、常の身仕度はすつかり出來てゐたのです。さうして刀をさしながら、お雪ちやんの夜具の裾を通つて、襖を細目に開けたとしても、それは、あの油斷のない米友をさへ出し抜いたことのある足どりですから、お雪ちやんが氣のつきやう筈はありますまい。

斯うして龍之助は裏庭から、間もなく塀の外へ出ました、竹の杖を一本ついてさうして後ろに、山を下つて、高山の町の方へ出て行く物腰は、曾て甲府の躑躅ヶ崎の古屋敷を出た時の姿と少しも變りません。

坂道を下りつくし、町の巷に出て小路の中に姿を沒したと見えたが、その後は何處をどうして徘徊よふてゐるか消息が分らない。

人間に自由を與へるべきものではないのです、自由は人間よりは豚に多く與へらるべきもので、一の人間に自由を與へると必ずその結果が他の人間の自由を追害する結果となる、その爲に、天が特に龍之助の如きから兩眼の明を奪ひ、身體の健康を殺いでゐるのに、さうでもしなければ、假りにもこんな人間を、この人間の共存共榮であるべき社會には生かして置けない筈なのに、それでも、なほ不安な處からお雪ちやんといふ保護者をつけ、名も白骨といふ人間離れの地へ追ひやつて置いたのにかゝはらず、その白骨の地を一歩離れて、この高山の町へ送り出したのが、そも〳〵運の盡きです。

飛驒の高山は、甲斐の甲府よりは一層山奥だとはいへ、一方より云へば甲府よりは一層上方の都近いのです——來り遊ぶ人が、誰れも飛驒の高山を蠻獵の窟といふものはなく、こ

れに「小京都」の名を與へて、溫柔の氣分を歇はぬものはありません、森春濤は曾て斯う

いつて「竹枝」をうたひました。

樓々姉妹、去つて花を看る
鬧殺す、紅裙六幅の霞
怪します風姿の春更に好きを
媚山明水小京華
曖は城墟に入つて春樹香ぼし
端無く嗾し得たり少年の狂
遊塵一道半ば空に漲る
花は白し春風櫻の馬場

飛驒の高山は斯う云ふ艶つぽい處であります。事實が詩人の艶説だけのものがあるや否やは知らないが、少くとも斯ううたはるべき風趣情調を持つてゐる處です。斯う云ふ處へ、今時、斯う云ふ人間を放ち出すのが、よいことでせうか、たゞ、時が春風駘蕩の時ではな

いが、處はたしかに櫻の馬場。

それと、この小都を震駭させた大火災のあとですから、人心は極度に緊縮されてはゐるけれど、土地そのものが本來、さういつた艶冶の氣分を供へてゐるものであれば、絆を解かれて、こゝへ放浪せしめられた遊魂は跳らざるを得ないでせう、端なくも、櫻の馬場の前を此の夜中に躍つて過ぐる馬があります、この馬は近在の山郷から材木を積んで來た馬ではありません、また火事の爲に臨時駄賃取りをかせぐ爲に近村から出て來たものでもありません、その花やかに裝ひ飾つてゐる處を見れば天正年間に飛驒の國司、姉小路宰相中將が築いた松倉古城のあとの、松倉大非閣へ參詣しての歸り道でせう、その證據には美々しく裝ひ飾つた馬の脊に素敵に、大きな馬を描いた繪馬が乘せてある。

四十九

今まで勢よくはづんで來たこの馬が、馬場の手前まで來ると、急にすくんでしまつたのが不思議。

「どう、あゆばねえふ」
馬子は、手綱を引つぱつて見たが、馬は尻込みをするばかり
「どう、あゆばねえかよ」
二度、引き絞つて見たけれども、馬は兩脚を揃へて　むことを躊躇してゐる。
「どうした、うむ」
馬子は手綱をたぐつて、近く寄つて馬の鼻つらと足許を見たけれども特別の異狀があるとも思はれないから
「これ、さ、早くあゆべよ、つい一口呼ばれちまつたもんだから、手前にも夜道をさせて氣の毒だつた、明日は休ませつからあゆべよ」
この馬子は、馬をいたはること厚く、〻を以て强行を强ゆることをしないのはしほらしい處がある。松倉大悲閣へ參詣の爲の馬だから、馬には荷物が無い、負擔は至つて輕いのに、足が重くなるとはどうしたものだ。
急に引つゝたか、怪我をしたか、馬子は案じてもしやと、足蹠をしらべにかゝつて見ました。沓が外れて、釘でも踏みつけたか。
かう思つて馬子が充分に馬場へ尋を向けきつて、馬の足もとを調べにかゝつたのが危い、病根は足にあるのではなく、最初から往手の馬場の櫻の大樹の蔭に一個の人影があつたから、馬は怖れをなして立ちすくんだまでのことです。馬の心を知らない人間は、原因を他所の處に見ないで、痛くもない馬の足をさぐりはじめたものですから、暗中はから明きに明きゝつてゐる。
「どう、さあ、足を見せろ」
足を見たが、これは最初から何の異狀が無い。
「さあ、歩べ」
再び馬の前に立つて、脊を馬場に向けきつた馬子は、馬に向つては斯う云ふけれど、態度から見ると、
「屈んでて惡けりや、蹲う立つたらいかゞなもの、こゝんところをすつぽりおやんなすつちや」

と云はぬばかりの姿勢です。

それを櫻の木蔭から一歩づゝ近よつて見すましてゐた覆面が、申さまでもなく机龍之助であつて、まだ刀の柄へも手をかけないで、木蔭から放れて來たのだが、馬子が馬の腹へ廻つて、馬の檢査をはじめた時に、勝手が惡くなつたとでも思つたのでせう、ちよつと立ちつくしたが、丁度、今、馬の鼻面に立つて、脊中を十分こちらへ向けきつたと思はれた時分に、はじめて手にしてゐた杖を地上に取り落しました。

この時です——兩足を揃へて進むことを肯んじなかつたその馬が、矢庭に高く一聲嘶いて竿立になつてしまつたものですから、馬子が大あはてに狼狽て必死にその轡面にブラ下がつたものですから、今の姿勢がまた一變してしまひました。

「どう、ドウしたといふだなあ、別に病氣でも怪我でもねえらしいにわりや狂氣したか」

斯う云つて、馬子が必死にブラ下つたことによつて、一旦竹の杖を地にまで落した覆面が刀の柄に手をかける瞬間を遠慮してしまひました。

食ひ下がられて、馬は二三度轡面を強く左右に振つたが、そのまゝ速力をこめて前面への

突進をはじめました。

「あゝこん畜生、こん畜生、引かけやがつたな」

無論、馬子は手綱に引ずられて宙に振り廻はされながら、綱に取りついて、走り行くのです、そのあとを茫然として見送るかの如き龍之助。

人を斬らうとしたのか、馬を斬らうとしたのか、馬と人と諸共に斬らうとして、そのいづれをも斬りそこねたのか——蹄の音ばカツカツとしてやがて闇に消えてしまひました。

五十

けれども馬子の方では、どこまでも、馬が狂ひ出したと思つてゐるでせう、それが爲に、自分をこんなヒドい目に逢はせやがる、こん畜生！と自分の馬を憎みながら、自分の馬に振り廻され、馬場から町外れ、益田街道を南に、まつしぐらに走せ行くことを留むることが出來ません。何處の百姓か知れないが、恐らく、この馬子は、可なり人のいゝ方であつても、この馬の狂亂を理解することが出來ないで、家へ歸つてから後、相當に馬を譴責

することでせう――もし、亂暴の主人でしたなら、危險の虞ある荒れ馬として、賣り飛ばすか、つぶしにする事か知れたものではない。

つまり、馬に暴れられたのでなく、馬に救はれたのだといふ理解があれば、人間は幸福だつたのですが、馬の心は人の心ではわからない、人の心は馬の心ではわからないものがある。佐久間象山が、京都の三條通木屋町で、肥後の川上彥齋ともう一人の刺客に襲はれた時、象山は馬上で、彥齋は徒歩であつたから、斬るには斬つたが、傷は至つて淺かつたから、象山はそのまゝ馬の腹を蹴つて逃げ出したのを、ついてゐた馬丁が馬の心を知らない――單に馬が狂ひ出したものと見て、走りかゝる馬の往手に大手を擴げてたち塞がつたものだから、馬が棒立になつたのを、追ひすがつた刺客が跳り上がつて思ふ存分に象山を斬つてしまつた、これこそ實に日本一の間拔馬丁、刺客にお手傳をして、主人を俎に乘せてやつた馬鹿者――こんな奴こそ馬に嚙み殺させてやりたい、踏み殺させてやりたい。

斯うして馬と人とに理解の無いといふことが大きな不幸をめぐらすと共に、大きなる惠みをもたらすのです、併し、理解のないことは、どちらも同じことで、象山の馬が日本一の間拔馬丁に制裁を加へる資格も能力も無い如く、今度のこの馬丁も自分が馬のために救はれてゐたといふことは、永久に理解することが出來ないで、これから後のこの馬の履歷書には

「いゝ馬だけれども、不意に引かける癖があつてあぶねえ」

といふ申分がついてしまひませう。

處でこの理解のない馬は。今晩その他にもまた一つの功德を作つてゐることを自ら知らない、それは今晩、ゆくりなくも嚇かされた晉無の怪物に、飛驒の高山へ來てから最初の血祭りの刀を拔かせなかつたといふことは、やはり重大なる功德の一つであつたに相違ないと思はれるが、やつぱりその功德を誰れも知る者がなく、稱へる者がなく、感謝する者も無い。晉無の怪物から云へば、この時に馬子を斬らうとしたのは事實で、斬らうとするにその風向を見はからつてゐるうちに、馬に奔逃されて斬るべき機會を失つて、我ながら呆然として見えぬ眼に、走る馬を見つめて、暫く立ち盡してゐたことも本當です。

故らに解釋するまでもなく、今晩、この處で、この馬を斬らねばならぬ必要も意趣も寸分

あるのではない、馬子風情を……といつた處で、斬つた時の斬り心地には、馬子も大納言もさして變りあるべしとは思はれない。

この男が馬子を斬つて見やうとしたのは、御用金を奪はうといふ經濟の頭から出たのではなく、芝居氣たつぷりの片手斬に大岡を唸らせやうといふ見えから出たのでもなく、端無く嫉し得たり少年の壯――と春濤がうたつた通りの土地の空氣がさせた魔の業と見るより外は無いでせう――尤もこの男は早や少年の部では無いが血氣はまだ必ずしも衰へたりとは云へますまい――斯うして、苦笑ひしながら地上に落した所の杖を取り上げて、越中街道の闇に、行先は、只今逃げた馬と同じ方向ですが、目的としては高山の町の目ぬきの邊へ現はれやうとするに違ひない。

五十一

この度の大火にあたつて、いつぞや宇津木兵馬が觸書を讀んだ高札場のあたりだけが、安全地帶でもあるかのやうに取り殘されて居りました。

歯の抜けたやうな枝ぶりの柳の大樹までが、何の被害も蒙らずに、あの時の儘ですが、今晩この夜中に、天地が寂寥として、燒野ヶ原の跡が轉た荒涼たる時、その柳の木の下にふと一つの姿を認められたのは前の櫻の馬場の當人とは違ひます。

その者は、三度笠をかぶつて、風合羽を著た旅の人、いつの間にやつて來たかこの寂寞と荒涼たる燒跡の中の僅かな安全地帶に立ち入つて、柳の木の蔭に立ち休らひ、聊か芝居がかつた氣取り方で、身體をゆすぶつて、鼠幕のあたりを、頭でのゝ字を書いて見上げたところ、誰れか見てゐる人があれば、そのキツかけに、

「晉羽屋！」とか「立花屋！」とか云つて見たいやうな、御當人も亦、それを云つて貰ひたいやうな氣取方だが、生憎、誰もゐない。

人の見てゐると見てゐないに拘らゝ、こんな見えをしたがる男で、一應見えを切つて置いて、それから左の手を懷中へスれてふところから鼠の様なものを引き出した形までが一々、芝居がかりで、引き出してから押しいただき、

「有難こえ、恭ぢけねえ」と來る處らしいが、そんなセリフは云はず、胴卷のやうなもの

丶中から綾なして、何を取り出したかと見れば、竹の皮包みは少々色消しです、でも、包みの中を開いて見るまでは舞臺に穴を明けるほどの色消しにもならなかつたが、やつぱり片手をあやなして、竹の皮包みをい丶あんばいに開いて中實をパックリと自分の腿の上へもつて行つた處を見ると、色男も食氣に廻つて、さつぱり栄えない、い丶男が、い丶加減氣取つたしなをして、懐中から取り出した一物が何かと見れば、それはつけ燒の握飯であつて、それをその男が二つばかり諸にかぢつてしまひました。

これは「がんきりの百藏」といつて名代(?)のやくざです。

いつの間に、このやくざ野郎、こんな處まで來やがつた?先日來は尾張名古屋の城の處で金の鯱を横眼に睨みながら忌みたつぷりを聞かせてゐたが——名古屋からこ丶にのしたと見れば、この野郎の足としては、さまでの難事ではないが、こんな野郎に足踏みされた土地にはロクなことは無いに定まつてる、ロクなことが無いといつても南條や五十嵐あたりとはいたづらのスケールが違ふから、飛驒の高山へ來ても高山の天地を動かすやうなことは仕出かすまいけれど、高札をよごす位の事はやりかねぬ奴です。

現に角、この頃、飛驒の高山に何となく浮世の動靜が隱かでないけれどこんなやくざ野郎の姿はきのふまでこの土地には見えなかつた、それを見たのは今晩この處に於て初のお目見えですから、野郎きつと夜通し飛んで來て見たが、目的地へ來て見ると、自分を出し抜いて、火事が目當を燒いてしまつてゐたので面食つてしまつたに相違ない。

來て見て、はじめて口あんぐりと握飯を食ふ始末……燒跡をうろついてあやしまれでもしては、この上氣の利かない骨頂、そこで、そつと安全地帶に立ち入つて、高札場の下の、柳の大樹の下に落ちついて見ると、急に腹が減り出したといふ次第と見えて——燒握飯をたべてしまつて見ると、水が飲みたい、あそこに井戸があるにはあるよ、釣瓶までそつくり備はつてゐるにはゐるが、うつかり水汲みに行くのも考へものだと、野郎その邊にはかなり細心で、井戸もあり釣瓶もあり、その中には當然水もあることを豫想しながら、焦げつく咽喉を抑へて柳の木蔭を動かうともしないでゐる。

前後左右をよく見定めて置いてから、たつぷり水を飲まうといふ了見らしい。

五十二

果して提灯が來る――二つ、三つ、四つ、五つの提灯のやつて來ることを數へられるほどになつて、がんりきの百藏は笠を外し自分の身を斜にして、柳の木を前にすると、殆んど不思議のやうで、本來からだだけは御自慢の、きやしやに出來てゐる事はゐるが、それにしても、比目魚を縦にしたやうな形になつてしまつて、大木といつても、本來街路樹ですから、決して牛を隠すの何のといふほどではない、ざらにあるだけの柳の木なのですが前から見ると、がんりき一人を隠して髪の毛一つの外れも見えなくしてしまつたのは術のやうです、この男が、本式に伊賀や甲賀の流れを汲んでゐるといふことは聞かないが、野郎、やつぱり、その道にかけては天性で、身體を實物以上に平べつたく見せることは心得てゐるらしい。

がんきりの百が、斯樣に柳の木の蔭で身體を平べつたくしてゐるとは知らず、その前へ順々に歩んで來たのは、陣笠をかぶり、打割羽織を著、御用提灯をさげた都合五人の者であ

りまして、これはこの度出來た、非常大差配の下に任命された小差配の連中に違ひありません。

この小差配都合五人は、非常見廻りの爲に、市中を巡邏して、この處に通りかゝつたのだが、この安全地帶の、柳の木の前の高札場の下の、つまりがんりきの百藏が只今、生得の陰形の印を結んでゐる處のつい鼻の先まで來て、そこで云ひ合はせたやうに一服といふことになりました。

見廻りのお役目としては、三べん廻つて煙草にするといふ御定法通りですから、敢て可もなく不可も無いのですが、陰形の印を結んでゐる眼前に、苦手の御用聞に御輿を据えられたがんりきの百藏なるもの丶迷惑は察するに餘りあるものです。

五人の御用提灯は、悠々と提灯の火から煙草をうつしてのみはじめました。

「うん、材木がウンと積んであるがのう、皆んなこりや下原宿嘉助が手で入れたのだのう嘉助奴、旨くやつてるのう」

一人が、道一筋向ふに山と積み上げた材木を夜目で透して斯ういふと、も一人が

「うん、成程近頃下原宿の喜助ほどの當り者は先づ無えのう、旨くやりをるのう
もう一人が、
「一手元締は大きからうのう、嘉助が運勢にやかなはねえのう、なにも、嘉助が運勢といふ次第ぢやねえのう、ありやあ、娘つ子が前の方の働らきぢや」
「はゝあ、いつの世でも女ならではのう、嘉助もいゝのを生んで仕合せだ、氏無くして玉の輿とはよく云ふたものぢやのう」
「螢のやうなもんでのう、お尻の光ぢやでのう——だがあの女つ子も器量もんぢやのう
ドコぞにたまらんところがあればこそ、親玉も、あの女つ子に限つて長續きがしやうといふもんぢやのう」
「さ樣さ、あの飽つぽい赤鍋の親玉が、嘉助が娘のお蘭にかゝつちや、から他愛ねえんだから、異なものだのう」
「お代官といふ商賣もいゝ商賣だのう、百姓の年貢はとり放題、領内のいゝ女は食ひ放題
——わし等が覺えてからでも、あの親玉の手にかゝつた女が……えゝと、まずガンショウ

寺のあのお孃さんなあ、それからトーロク屋の女房、それとまだ富山から貰ふて來たといふ養女名臺のお武家の娘、品のいゝ娘だつたがあれが内實はお手がついたとかつかんとかで親里歸り、それからまた、與樂亭のおかみなあ、あれも、親玉に持ちかけたとかすりつけたとかの評判ぢや、その他藝子や、酌女は片つぱしから食ひ放題、町の中で、いゝ女と見たら誰彼の容捨無しといふ親玉だあ」
この連中、かりにも、陣笠、打割羽織、御用提灯の身として口が輕過ぎるのも變だが、こんな話を他ならぬがんりきの百の野郎なんぞに聞かしてよいものか、惡いものか。

五十三

陣笠、御用提灯、打割羽織といふけれども、本來これ等の連中は、生れついてのお役人の端くれではない。
この非常の際に、代官でも手が廻らない上に、近頃、材木盜人が横行する、それはこの大災について、材木の拂底を告げた處から、土地の者が近村の山々を無願伐採するやからが

多い。それ等の目付とを兼ねて、土地の者で相當の功勞を經たのを引上げて小差配に任命して、大差配の下につけたのだから、譜代恩顧の手附手代といつたやうなものとは地金が違ひ、鹿爪らしいいでたちをしながら、時と場合を見すましては馬鹿口がころがり出す、こゝでも、お役目がらとはまるで違つた蔭口を向けてゐる先きは、お代官といひ、親玉といふのが同一の事に過ぎない、そのお代官であり、親玉である上長官が、衣に目がないといふことを、面白がつてすつぱ抜いてゐるらしい、すつぱ抜く方も面白がり、それを聽く方も嬉しがつてゐるらしい、お里がお里だから、お安いお役向きに出來てゐるらしい。

「嘉助が娘のお蘭は、ドコか特別に味のいゝ處があるんぢやらうてのう、あればつかりが親玉の首根ッ子をつかまへて放さん、親玉の方でも、お蘭に逢つちやあ他愛がねへぢやてお蘭の云ふことならば何でも聞く、從つて嘉助が出頭ぶりは目ざましいものぢやて、飛ぶ鳥も落すといふのはあの事ぢやてのう」

「お蘭は、そんなにいゝ女かえのう」

「いゝ女にはいゝ女だのう」

「さ樣なあ、惡いとは云へねえ、お寺の娘さんにも、お武家の娘御にも、商賣人にも食ひ飽きた親玉が、放さねえのだから惡い容色の女ぢやねえのう、百姓の娘にしてあれだからのう」

「百姓の娘だけに、うぶな處と親身の處が親玉のお氣に召したといふのだなあ」

「いゝや、お蘭も、百姓の娘たあ云ふけど、手とり者ぢや、商賣人にも負けねえと云ふことぢやて」

「親玉を旨く丸め込んでゐることぢやらうがのう」

「親玉ばかりぢやありやせん、その道ではお蘭も、なか〳〵の好き者でのう」

「はあて」

「お蘭もあれで、親玉に負けない好き者ぢやでのう、お蘭の手にかゝつた男もたんとあるとやら、まあ、男たらしの淫婦ぢやてのう」

「親玉のお手がついてからでもか」

「うむ〳〵、却つてそれをいゝことにしてのう、今迄のやうに土臭い若衆なんぞは、てん

で相手にせず、中小姓ぢやの、用人だの、お出入のさむらい衆ぢやの、氣のありさうなのは、萬遍なく手を出したり足を出したりするさうぢやてのう」

「はて、さて、そりやまた一騒ぎあらん事かい」

「どうれ」

「どつこい」

「もう一廻り、見て、お開きと致さうかいなあ」

「さうぢや〳〵」

「どうれ」

「どつこい」

斯う云つて、彼等は、煙草の吹殼を踏消し、御用提灯を取上げて、脊のびをしたり、欠伸をしたりしながら立ち上がる、さうして、間もなく橋を渡つて、あちらへ行つてしまう、一旦、平べつたくなつたがんりきの百藏の身體が、この時又立體的になる。

「ハクション」

音が高い——自分の口をあわてゝ自分の左の手で抑へて、

「風邪をひいちやつた——だが聞き逃しの出來ねえ話を聞かされちやつたぜ——畜生どうしやがるか」

斯う云つて、忌々しさうに、御用提灯のあとを見送つてゐました。

斯うして見ると、御用提灯の連中、云はでもの事を、わざ〳〵がんりきの爲に云ひ聞かせに來たやうなものです。

五十四

がんりきの百も、この柳の木の下へ、風邪をひきに來たものでないことはわかつてゐる、何か野郎相當の野心があるか、さうでなければ進退に窮することがあつて、よんどころなくこの柳の木の下へ立ち寄つたものに相違ない。

「どうれ」

と陰形の印も結もすつかり崩して、まづ最初から、飲みたくて堪らなかつた水を飲まうと

して、井戸の方へそろ〳〵と歩んで行くと、その井戸側から、人が一人、ひよろ〳〵と這ひ出して來たには驚かないわけには行きません、以前の、御用提灯、打割羽織には、さほど驚かなかつたがんりきの百が、井戸側の蔭から、ひよろ〳〵と這ひ出して來たよた者に全く毒氣を拔かれてしまひました。

だが、幸にして、こちらも多少の心得があるから、見咎められるまでには至らなかつたがもう一息違つて、ぶつつけに井戸へ走つてしまはうものなら、大變——このよた者と鉢合せをする處であつた、いゝ處で、またごまかして、今度は高札場の石垣の横に潜み直してゐると、背後側から出たよた者は、がんりきありとは全く知らないらしく、這ひ出して來て、前後左右を見廻しホツト一息ついたのは、つまりこの點に於ては御同病——今しがた、立つて行つた御用提灯、打割羽織の目を忍ぶために自分が柳の木の蔭で平べつたくなつてゐると共に、このよた者は、井戸側の蔭に這ひつくばつて、その目を避けてゐたのだ、つまり自分の陰形は立業であるのに、このよた者は寢業で一本取つたといふわけなのだ、二人共、やり過してしまつてから業を崩し、ホツト息をついて、のさばり出たのは同じこと。

がんりきが石垣の蔭からよく見てゐると、手拭を疊んで頭にのせ、丸い御膳籠を肩に引きかけた紙屑買ひです、紙屑買だといつて無論斯う云ふ場合には油斷が出來ないことで、なほ、よく注意して見ると——がんりきは商賣柄で夜目遠目が利く——手にがんどう提灯を持つてゐる處などは、いよ〳〵怪しい。

そこで、ともかくも、此奴のあとをついて見なければならないことだと思ひました、一應その行動を見屆けてやる必要があると思ひました。

さうして、暫くそのあとをつけて見た後にがんりきが啞然として、自分をせゝら笑つてしまひました。

こいつは生え拔きの紙屑買ひだ、紙屑買ひといふよりは紙屑拾ひの部に屬すべきもので、がんりきほどの者が、あとをつけたりなんぞする程の代物ではない——何だつて氣が利かねえ、飛驒の高山まで來て、紙屑買ひの尻を追ひ廻すなんぞは、七兵衞兄いの前へてえしても話にならねえ——といふのは、こいつが燒跡へ忍んで行くから、その通りついて行つて見ると、その燒跡を鐵の棒でほじくつて、そこで金目になりさうなものは、雪駄の後金

であらうとも鎌の前垂であらうとも拾ひ集めて錢に替へようとする商賣だけのものです、夜隱忍んで來たのは、萬一、この燒跡から小判の一枚が、金の指輪の一つも掘つくり返した時の用意、その時に權利者が出て來られたり繩張爭ひが起つたりしては厄介と思ふからそこで、夜陰こつそり忍んで來たゞけのものです、第一紙屑買ひとしての御膳籠の脊負ひつぷりからして、最初から板についてゐる。

大笑ひだ——だが、こゝまで來た上はまた柳の木の下へ引き返すのも、なほ更ら氣が利かない、といつて、これからわつしの行く處はドコですとたづねるのも一層氣が利かない、第一、それをたづねやうにもたづねる人はあたりになし、ようし、一番、この屑屋をからかつてやれ、相手にとつては少々不足だが、時にとつての慰みだ、一番からかつてやれ——斯くてがんりきはやゝ暫くあとをつけてゐたが、頃を見計らつて、小聲で、

「お爺さん」

紙屑屋の肩を後ろから叩くと、屑屋は一たまりもなくへた〳〵と引くり返つてしまひました。

五十五

「お爺さん」

と肩を叩いたら、直ぐにへた〳〵と引くり返つてしまひ、もう腰が拔けてしまつてけ動ないらしいから、がんりきは苦笑ひをしながら、屑屋の耳に口を當て、

「お爺さん、驚いちやいけねえよ、わしは怖いもんぢやねえ、道中筋をちつとばかり寄道があつて、たつた今、この飛彈の高山といふ處へたづねて來て見るてへと、高山は一昨日こんな大火事で、たづねて來た人の立ち退き先きが分らねえんだ、それで途方に暮れてゐる處へ、お前の姿を見たもんだから呼びかけて見たゞけのものなんだ、そんなに怖がるがものはねえよ」

「はい」

「さあ、立ちな、立ちな、立てねえかい」

「大丈夫でございますしやろ」

「いゝよ、いゝよ、立てなけりや、立てるまで、さうしてゐなさるがいゝや、わしや爺さんに心當りを敎へてもらひさへすりやいゝんだ」

「はい」

「わしやあね、下原宿の嘉助といふ者の實は……甥なんだがね」

「はい」

「餓鬼の時分から手癖が惡くつて、所々方々をほうつき廻り、めつたに叔父さんといつて尋ねた事はねえんだが、ちつと旅先で聞き込んだことがあるから、急にかけつけて見ると飛彈の高山がこの始末なんだ」

「はい」

「下原宿の嘉助は何處へ立ちのいたか知らねえかい」

「はい……下原宿ていのは燒けやしませんでな」

「燒けねへと……ちやあ燒け殘つたのか、そいつあまあ、どつちにしても仕合せだつた、爺さん、濟まねえが一つその下原宿の嘉助の處まで、わつしを案内してお呉んなさらねへか」

「えゝ、そりや何でございます、お安い御用でございますて」

「うむ、濟まねえな、もう立てるかい」

「へい、もう立てますしやろ」

「それからねえ、お爺さん、もう一つ頼みがあるんだがね」

「下原宿の嘉助さんていへば、大した威勢でございますでなあ」

「もう一つ頼みといふはねえ、お爺さん、その嘉助に一人娘があるんだがなあ、おいらには從妹に當るつてわけなんだが」

「はい〳〵」

「その從妹が、今、お代官のお邸に御奉公か何かしてえるといふ事なんだが、ついでにちよつと寄つて行きてえんだ、お代官邸てえのは、どつちの方なんだえ、それへも一つ案内をしてもらいてえと思ふんだが、聞いちやあくれめえか」

「はい」

がんりきの百の野郎は、たつた今のきゝかぢりを此處で、もう應用してしまつてゐる、目から鼻へ抜けたつもりですつかり應用を試みてゐるが、相手の煮えきらないこと、はいはいとは云ふが、一向立たうともしないから、業を煮やし

「まだ、立てねえのかい」

「もう、大丈夫でございますしやろ」

「大丈夫でございますしやろはいゝが、立てねえぢやねえか」

「はい〳〵」

「ちえッ、そら、爺さん手をとつてやるよ威勢よく起きねえ」

といつて、がんりきは、その手首をグット引ばつて、幾らか包んで、屠屋の手に持たせ、

漸く起こしてやり

「さあ、先きへ立つて案内して呉んな」

要領を得て、怖々ながら、屠屋の老爺が立ちかけたが、またぺたりと腰を落し、ワナ〳〵と慄え出して、

「あつ！あつ！」

といつて指しをして、その手でがんりきの合羽の裾を劇しく引く。

五十六

「世話の燒けた老爺さんだ」

がんりきは、骨無し同樣な、老爺の腰の拔つぷりに愛想をつかし、こんな度胸で火事跡荒しに來るなんて、全くふざけた老爺だと思つて、蹴飛ばしてやりたくなつたのを、さうもならず、是非なく老爺の指した方を見ると、こんどはがんりきがゾッと立ち盡してしまひました。

「お化……」

老爺は指差しをしたまゝ、二度目に腰を拔かして、ヘタ〳〵と座り込んでしまつてゐる、その指先きの示す處を見ると、略ぼ十間の彼方の同じ燒跡の中に、すつくと立つて、此方を見てゐる一つの黑い人影があるのです。